

大波羅遺跡

2001年

日田市教育委員会



B区出土「山」墨書土器



D区出土「田」墨書土器

序 文

大波羅遺跡は大波羅丘陵から西に広がる沖積地に位置し、遺跡のすぐそばの丘陵上には大波羅神社があります。

今回報告いたします大波羅遺跡からは弥生時代から古代の溝や建物等が発見され、中でも大量に発見された土器の中から黒書土器が見つかりました。この黒書土器は市内では3例目となる発見で、市内の古代社会を知る上での貴重な資料です。

このたび発行いたします本書が、郷土の歴史を知る上での一助としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・報告書作成にあたってご指導いただきました皆様に心より感謝を申し上げます。

平成13年3月

日田市教育委員会教育長 後藤元晴

例 言

1. 本書は日田市都市計画街路城町高瀬線道路改良工事に伴う大波羅遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書には日田市教育委員会が平成11・12年度に実施した発掘調査の成果をまとめている。調査地点については平成11年度調査をA・B区とし、平成12年度調査をC区～E区としている。
3. 調査にあたっては、市都市計画課や地元の方々のご協力を得た。また、大波羅神社には調査の際に駐車場の便宜を図っていただいた。記して感謝申し上げます。
4. 調査担当は、A区が吉田、B区が上居、五十川、C～E区が渡邊である。
5. 発掘現場での実測は各担当者が行ったほか、三浦陽子、財津真弓の協力を得た。その他個別遺構図は雅企画有限会社 森山敬一郎氏の委託による。遺構写真は各調査区担当者が行った。空中写真は有限会社スカイサーベイ九州の委託による。
6. 本書に使用した遺物の実測は各調査区担当者である吉田、五十川、渡邊が行い、行時、若杉の協力を得た。遺構・遺物の製図は渡邊の他、雅企画有限会社 財津加奈子氏の委託による。
7. 遺物写真は雅企画有限会社 長谷川正美氏に撮影委託したものをを使用した。
8. 図版中の番号は全て挿入番号と一致する。
9. 巻頭カラーに使用した写真は、B区出土「山」黒書土器、D区出土「田」黒書土器である。
10. 遺跡からの出土遺物および図面・写真については、すべて日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
11. 本書の執筆は各担当者が行い、編集は各担当者で協議の上、渡邊が行った。

本文目次

第1章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯と調査経過	1 (土居)
第2節 遺跡の立地と歴史的環境	4 (土居)
第2章 調査の内容	
第1節 A区の調査	7 (吉田)
第2節 B区の調査	11 (五十川)
第3節 C区の調査	35 (渡邊)
第4節 D区の調査	39 (渡邊)
第5節 E区の調査	53 (渡邊)
第3章 まとめ	60 (渡邊)
出土遺物観察表	

挿図目次

第1図 調査区位置図 (1/8000)	第30図 溝出土遺物実測図 (1/3)
第2図 周辺遺跡分布図(1/20000)	第31図 トレンチ・21号溝土層断面図 (1/40)
第3図 A区遺構配置図 (1/200)	第32図 18号溝出土遺物実測図 (1/3)
第4図 トレンチ土層断面図 (1/40)	第33図 ピット出土遺物実測図 (1/3)
第5図 A区出土遺物実測図 (1/3)	第34図 包含層出土遺物実測図 (1/3)
第6図 B区遺構配置図 (1/200)	第35図 その他の出土遺物実測図 (1/3)
第7図 B区基本土層図 (1/40)	第36図 出土石器実測図 (1/2、2/3)
第8図 弥生・古墳時代溝配置図 (1/400)	第37図 13号溝出土木器実測図 (1/2)
第9図 14・17・24・25号溝土層断面図 (1/40)	第38図 C区遺構配置図 (1/200)
第10図 24号溝出土遺物実測図 (1/3)	第39図 1号溝土層断面実測図 (1/40)
第11図 14・25号溝出土遺物実測図 (1/3)	第40図 3号溝土層断面実測図 (1/40)
第12図 ピット出土遺物実測図 (1/3)	第41図 1号土坑実測図 (1/30)
第13図 古墳時代包含層出土遺物実測図 (1/3)	第42図 C区出土遺物実測図 (1/3・1/4・2/3)
第14図 その他の出土遺物実測図 (1/3)	第43図 D区遺構配置図 (1/200)
第15図 出土石器実測図 (2/3・1/2)	第44図 遺物包含層土層断面実測図① (1/80)
第16図 1号掘立柱建物実測図 (1/80)	第45図 遺物包含層土層断面実測図② (1/40)
第17図 2号掘立柱建物実測図 (1/80)	第46図 包含層土器出土状況 (1/80)
第18図 2・3号溝遺構実測図 (1/100)	第47図 包含層出土土器実測図① (1/3)
第19図 2号溝土層断面図 (1/40)	第48図 包含層出土土器実測図② (1/3)
第20図 3号溝土層断面図 (1/40)	第49図 包含層出土土器実測図③ (1/3)
第21図 2・3号溝出土遺物実測図 (1/3)	第50図 包含層出土土器実測図④ (1/3)
第22図 1号竪穴状遺構実測図 (1/30)	第51図 包含層出土土器実測図⑤ (1/3)
第23図 1号竪穴状遺構出土遺物実測図 (1/3)	第52図 包含層出土土器実測図⑥ (1/4、1/3)
第24図 1・2・4・5号土坑実測図 (1/30)	第54図 包含層出土瓦実測図 (1/4)
第25図 6・8・10・14号土坑実測図 (1/30)	第53図 包含層出土墨書土器実測図 (1/3)
第26図 土坑出土遺物実測図 (1/3)	第55図 包含層出土鉄器実測図 (1/2)
第27図 古代の溝配置図 (1/400)	第56図 E区遺構配置図 (1/200)
第28図 4・5・6号溝土層断面図 (1/40)	第57図 1号溝土層断面実測図 (1/40)
第29図 7・9・10・11・13・30号溝土層断面図 (1/40)	第58図 E区基本土層図 (1/40)

第59図	杭出土状況実測図 (1/30)
第60図	2・3・4・5号溝実測図 (1/60)
第61図	2号溝土層断面実測図 (1/40)
第62図	3号溝土層断面実測図 (1/40)
第63図	4・5号溝土層断面実測図 (1/40)

第64図	1号土坑実測図 (1/30)
第65図	E区出土土器実測図 (1/3)
第66図	3号溝出土土器実測図 (1/2)
第67図	大波羅遺跡遺構配置図 (1/800)
第68図	大波羅遺跡時期別遺構変遷図 (1/800)

本文写真目次

写真1	機械作業風景
写真2	現場作業風景
写真3	B区基本土層
写真4	4号土坑出土「□山」墨書土器

写真5	「山」墨書土器
写真6	「田」墨書土器
写真7	E区基本土層

表目次

第1表	遺構番号変更表
第2表	出土遺物観察表①
第3表	出土遺物観察表②
第4表	出土遺物観察表③

第5表	出土遺物観察表④
第6表	出土遺物観察表⑤
第7表	出土遺物観察表⑥
第8表	出土遺物観察表⑦

図版目次

巻頭図版	B区出土「山」墨書土器 D区出土「田」墨書土器
図版1	①大波羅遺跡遠景ー市内を望む (空撮) ②大波羅遺跡遠景ー佐寺原台地を望む (空撮)
図版2	①B区全景 (南から) ②C・D・E区全景 (真上から)
図版3	①A区全景 (南西から) ②トレンチ土層 ③A区出土遺物
図版4	①B区全景 (真上から) ②古墳時代の溝 (真上から)
図版5	①14・17・24・25号溝土層断面 ②25号溝土層断面 ③25号溝遺物出土状況 ④35号ピット遺物出土状況 ⑤36号ピット遺物出土状況 ⑥37号ピット遺物出土状況
図版6	①古代の溝 (真上から) ②1号掘立柱建物 (真上から)
図版7	①ピット1土層断面 ②ピット2土層断面 ③ピット3土層断面 ④ピット4土層断面

⑤ピット6土層断面	
⑥ピット7土層断面	
⑦ピット7断割り断面	
⑧ピット8土層断面	
図版8	①1号掘立柱建物に人を配置 (北東から) ②2号掘立柱建物 (西から) ③2号溝土層断面 ④3号溝土層断面 ⑤1号竪穴状遺構 (南西から) ⑥1号土坑 (西から) ⑦1号土坑土層断面 ⑧5号土坑 (南西から)
図版9	①6・7号土坑 (南から) ②8号土坑 (西から) ③10号土坑 (西から) ④14号土坑 (南西から) ⑤4号溝土層断面1 ⑥4号溝土層断面2 ⑦4号溝墨書土器出土状況 ⑧4号溝土器出土状況
図版10	①5号溝土層断面 ②6号溝土層断面 ③7号溝土層断面1 ④7号溝土層断面2

- ⑤7号溝縄文土器出土状況
 ⑥9号溝土層断面
 ⑦10・13号溝土層断面
 ⑧13号溝土器出土状況
- 図版11 ①11号溝土層断面
 ②30号溝土層断面
 ③トレンチ土層断面
 ④トレンチ土層断面1
 ⑤トレンチ土層断面2
 ⑥トレンチ土層断面3
 ⑦トレンチ土層断面4
 ⑧21号溝土層断面
- 図版12 B区出土遺物1
 図版13 B区出土遺物2
 図版14 B区出土遺物3
 図版15 B区出土遺物4
 図版16 B区出土木器
 図版17 ①C区全景(真上から)
 ②C区完掘(南から)
- 図版18 ①1号溝(北から)
 ②1号溝土層断面1
 ③1号溝土層断面2
 ④3号溝土層断面
 ⑤C区出土遺物
- 図版19 ①D区全景(真上から)
 ②D区完掘状況(北から)
 ③遺物包含層土層断面1
 ④遺物包含層土層断面2
 ⑤遺物包含層土層断面3
- 図版20 ①包含層遺物出土状況1
 ②包含層遺物出土状況2
 ③包含層遺物出土状況3
 ④包含層遺物出土状況4
 ⑤包含層土層断面1
 ⑥包含層土層断面2
 ⑦包含層土層断面3
- 図版21 D区出土遺物1
 図版22 D区出土遺物2
 図版23 D区出土遺物3
 図版24 D区出土遺物4
 図版25 D区出土遺物5
 図版26 D区出土遺物6
 図版27 D区出土遺物7
 図版28 D区出土遺物8
 図版29 D区出土遺物9
 図版30 ①E区北側全景(真上から)
 ②E区南側全景(真上から)
- 図版31 ①1号溝完掘北側(南から)
 ②2号溝土層断面1
 ③1号溝完掘南側(南から)
 ④1号溝土層断面2
 ⑤2号溝完掘1(南東から)
 ⑥2号溝完掘2(南東から)
 ⑦2号溝土層断面
 ⑧2号溝杭出土状況
- 図版32 ①3号溝完掘(北西から)
 ②3号溝土層断面1
 ③3号溝土層断面2
 ④3号溝土層断面3
 ⑤3号溝遺物出土状況1(西から)
 ⑥3号溝遺物出土状況2(西から)
 ⑦3号溝遺物出土状況3(西から)
 ⑧3号溝遺物出土状況4(西から)
- 図版33 ①3号溝杭出土状況1
 ②3号溝杭出土状況2
 ③3・4号溝杭出土状況
 ④4号溝完掘(南東から)
 ⑤4号溝土層断面
 ⑥5号溝完掘(南東から)
 ⑦5号溝土層断面
 ⑧1号土坑完掘(西から)
- 図版34 E区出土遺物1
 図版35 E区出土遺物2

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と調査経過

本遺跡の発掘調査は、日田盆地東部の丘陵下を縦走する都市計画街路城町高瀬線道路改良事業に先立ち行ったものである。この道路建設計画については、国道210号線若宮町と県道戸畑日田線山崎町を結ぶ総延長680mの補助幹線道路として、昭和44年に計画決定がなされ、昭和56年から建設事業が着手となった。昭和62年には建設主管課である都市計画課から市教委に対して埋蔵文化財に関する協議がなされ、事業の進捗にあわせて随時、事前の試掘調査を実施してきた。

このようななか、試掘調査によって遺跡の存在が明らかとなった会所宮遺跡では、平成2年度に会所山の北側山麓のA区、平成4年度に隣接したB区、平成7・8年度にはさらにC区と継続した発掘調査を行った。各調査区からは、主に弥生時代中期から古墳時代中期の竪穴住居・土坑などの集落遺構や、古代～中世の溝などの遺構を検出し、弥生土器や須恵器、土師器、土錘、鉄刀などの遺物が出土した。

こうした発掘調査が行われている平成6年には、この路線もさらに北へと延長されることとなり、この変更に伴って都市計画課とは事前の協議を重ね、新たに追加となった路線内の試掘調査を用地買収が完了した場所から実施することとした。

今回追加となった路線内の試掘調査は、延べ2回実施した。このうち、会所宮遺跡に近接した場所の試掘調査では遺跡の存在が確認されなかったが、平成10年度に実施した大波羅遺跡隣接地での試掘調査では古代の遺構や遺物などが確認され、遺跡の存在が明らかとなった。このため、遺跡名を「大波羅遺跡隣接地」から「大波羅遺跡」と改め、この遺跡の取り扱いについて協議を行うこととなった。

この事前協議で現状での保存が難しいとの結論に達し、結果的には用地買収の進捗に合わせて本格的な発掘調査を実施することとなった。調査は路線予定地の北側から行うこととなり、平成11年度にはA・B区、平成12年度にはC～E区の発掘調査をそれぞれ実施し、平成12年度中には整理作業を終え、本報告書の発行となった。

調査経過を簡単にまとめると、A区は平成11年6月2日から調査を開始し、6月3日からは遺構検出と遺構の掘り下げを行い、6月9日には調査を終了し、機材を撤収した。

B区は、平成11年12月8日から機械を使って調査を開始した。平成12年1月11日からは作業員に



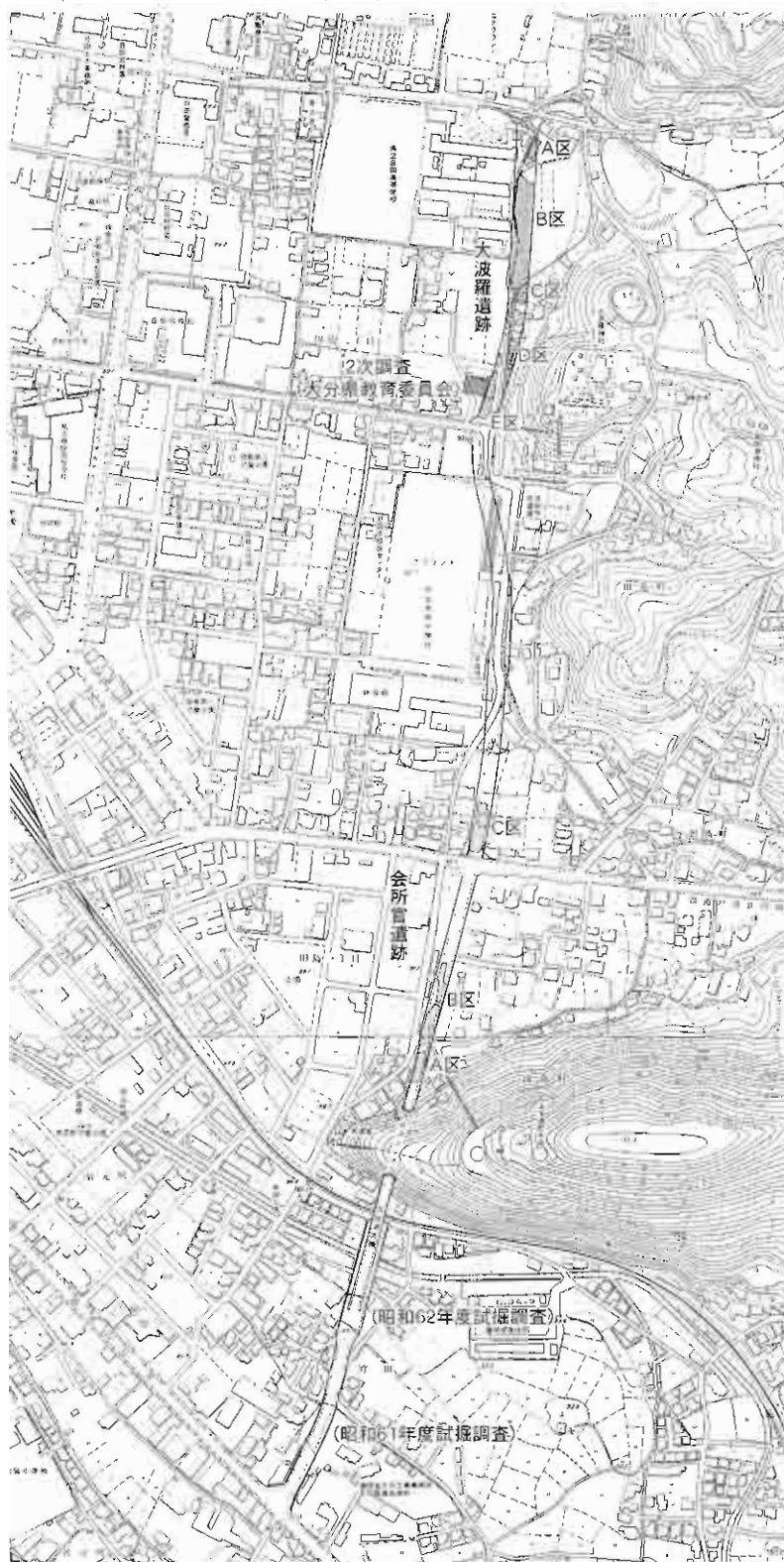
写真1 機械作業風景



写真2 現場作業風景

よる遺構検出を始め、28日から遺構の掘り下げを始めた。3月18日には空撮を行い、3月31日には機材を撤収し、調査を終了した。

C～E区は、平成12年4月17日から開始した。4月27日からは作業員による本格的な遺構検出を始め、5月12日から遺構を掘り始める。5月16日からは全体図、25日からは個別遺構実測を始める。6月7日には空撮を行い、8月4日にはD区に真砂土を入れ、8日に調査を終了した。



第1図 調査区位置図 (1/8000)

なお、本遺跡に関わる年度別の関係者は、以下の通りである。（職名は当時のままとしている。）

（平成11年度）

- 調査主体 日田市教育委員会
- 調査責任者 加藤正俊（日田市教育長）
- 調査事務 原田俊隆（文化課課長）、石井英信（文化課課長補佐）、佐々木豊文（文化課主査）、美野寿美香（文化課臨時職員）
- 調査員 土居和幸（文化課主任）、行時志郎（同主任）、吉田博嗣（同主任）、若杉竜太（同主事）、森山敬一郎（同囑託）、五十川雄也（同囑託）
- 発掘作業員 穂本文雄、石田和也、石田スズ子、一ノ宮嘉蔵、宇野京子、宇野慎吾、宇野広光、猪熊ヨネ、小野忠臣、梶原巳年、五島勇美子、五反田静子、財津勲子、財津静子、財津利枝、財津由太、財津真弓、坂本今朝人、坂本都美子、佐藤カスミ、清水忠造、杉森久恵、武内アイ子、高倉富美子、高倉美利、高村笑美子、田中昇、田中雅子、筒井英治、手嶋トシエ、長岡大輔、中野ヨシ子、中村邦宏、仁田坂シズエ、野村勉、平川知義、藤野美音、藤原太一、本田早苗、本田忠勝、松岡初治、三浦陽子、森島晋太郎、吉弘昇

（平成12年度）

- 調査主体 日田市教育委員会
- 調査責任者 加藤正俊（日田市教育長）～11月14日、後藤元晴（日田市教育長）11月15日～
- 調査事務 原田俊隆（文化課課長）、石井英信（文化課課長補佐）、佐々木豊文（文化課主査）、江田香織（文化課臨時職員）
- 調査指導者 山田拓伸（大分県立博物館学芸員）
- 調査員 行時志郎（文化課主任）、吉田博嗣（同主任）、若杉竜太（同主事）、渡邊隆行（同主事）、五十川雄也（大分県文化課囑託）
- 発掘作業員 秋ヤエ子、穂本文雄、石田和也、一ノ宮嘉蔵、猪熊ヨネ、江藤キミ子、五反田静子、後藤孝市、財津利枝、財津由太、財津真弓、清水忠造、杉森久恵、庄内武子、高倉富美子、高倉美利、高村笑美子、田中昇、筒井英治、手嶋トシエ、長岡大輔、中村邦宏、仁田坂シズエ、平原知義、藤原太一、本田早苗、本田忠勝、松岡初治、三浦陽子、森島晋太郎、吉弘昇
- 整理作業員 石田紀代子、大内真理子、梶原ヒトエ、川原君子、田中静香、安元百合

このほか、調査にあたっては、下記の方々の現地指導・助言をいただいた。（敬称略）

小田富士雄（福岡大学教授）、下村智（別府大学助教授）、坂本嘉弘、村上久和、宮内克巳（以上、大分県文化課）

第2節 遺跡の立地と歴史的環境

大波羅遺跡は、日田市大字田島字大原148-2番地ほかに所在する。

この遺跡の存在する日田市は大分県の西部に位置し、西は福岡県との県境をなし、周辺は7町2村と接する人口約63,000人の四方を山に囲まれた小都市である。市域の大半は植栽された杉による山林によって占められ、市の中央部を中心に市街地が形成されている。

日田市の地形を概観すると、その中央の沖積地は標高約80m前後を測り、その周りを標高約150mの阿蘇溶岩台地が巡っている。さらにその周辺には岳滅鬼山（1,036m）、大将陣山（909m）、一尺八寸山（707m）などの1000m級の山々が連なり、遠くには彦山系や久住山系、阿蘇外輪山が広がり、望むことができる。こうした地形は、典型的な盆地を形づくり、夏は暑く冬は寒い気候風土を生み出している。

日田盆地の中心部には、久住山や阿蘇を源とし、有明海へと注ぐ筑後川（三隈川）が西流しており、この河川には南北方向から山間を縫うように幾つもの小河川が流れ込んでいる。こうした地理的条件は、行政区画は大分県に属してはいるものの、古代より経済や文化面など福岡県の強い影響を受けて発展してきたことから、日田独自の文化も栄えてきた。

さて、このような背景のもと、大波羅遺跡は日田盆地の東部に位置している。遺跡の場所は標高90~93mを測り、遺跡のすぐ東側には大波羅丘陵がある。この大波羅丘陵は、北の慈眼山から南の会所宮まで南北に続く丘陵のほぼ真中にあたる。また、西側には沖積地が広がっており、遺跡からだとほぼ180度盆地内を見ることができる。

次に歴史的な環境について概略すると、遺跡周辺は現在田島と呼ばれる地域に該当している。この地名の由来は、『豊西記』には日田で初めて水田が開かれたことから“田始播”と呼ばれるようになったと記されている。

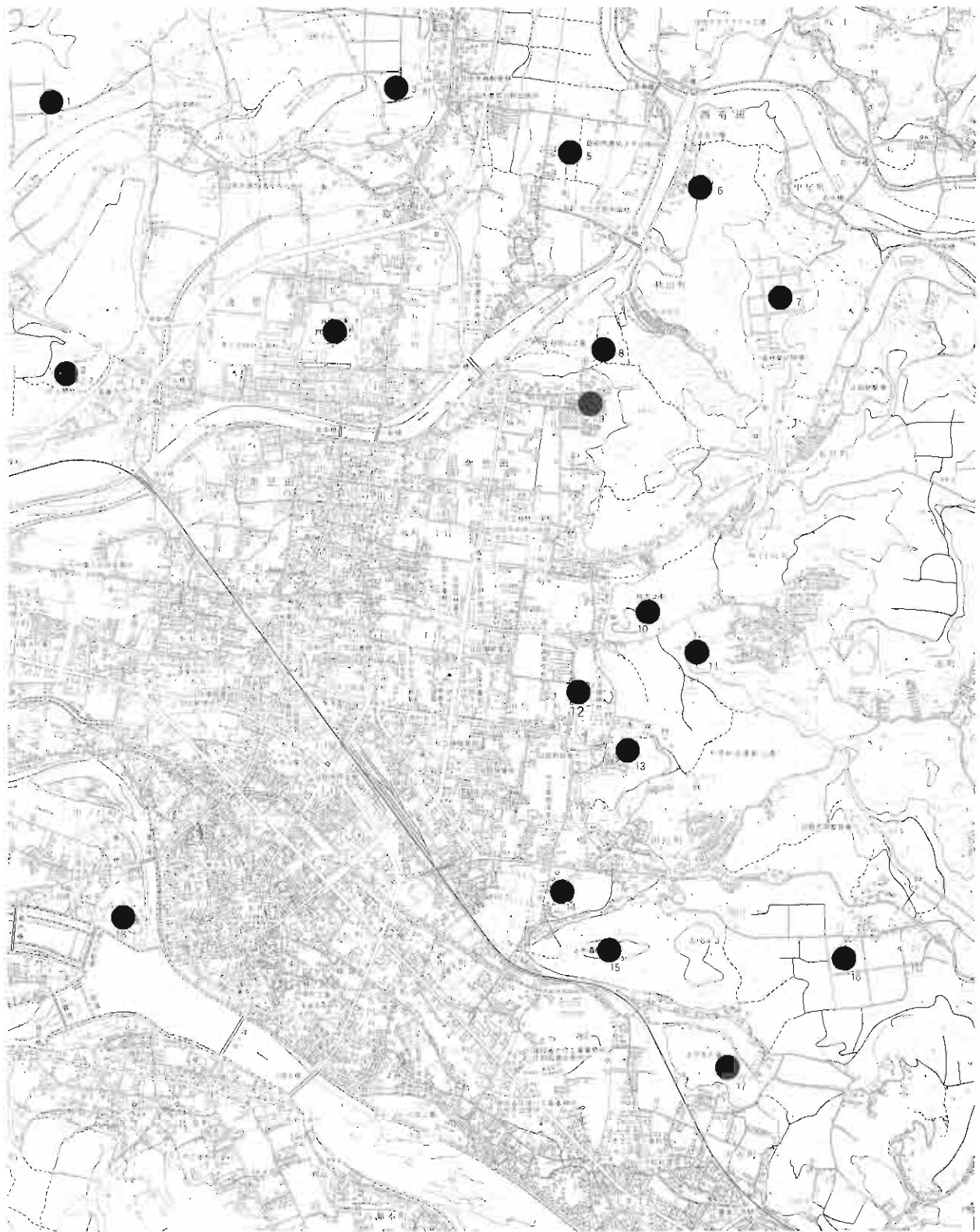
古代律令下にあつては、この田島一帯は『豊後国風土記』にみえる日田郡五郷のうちの一つである鞆編郷に属していたと考えられている。同書物によれば、この鞆編郷は、日下部氏が拠点としていた場所の記述が伝えられているなど、古墳時代後期の有力な豪族の地としても知られている。

さらに、『八幡宇佐宮御神領大鏡』によるところの、長元9年（1036年）に日下部為行が日田郡内に五ヶ所の名田を開発したうちの田嶋別符の地に比定されている。この田嶋別符は、面積26町と最も規模の大きな桑畑の開墾であったと記されている。

中世期の日田は、古代日下部氏に替わって、遺跡の北側にある慈眼山一帯を本拠地とした郡司大蔵氏が約250年間にわたって日田の地を支配することとなる。しかし、中世末期には大蔵氏から大友氏へと移行し、大蔵氏の一族郎従から選ばれた八名による郡老支配へと変わる。そのうちの一人である堤氏が拠点とし、居城としていた堤城が、遺跡のすぐ北の丘陵上にその名残を残している。

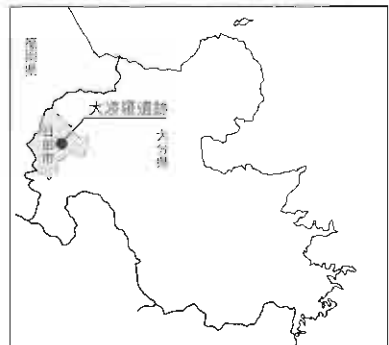
近世に入ると、日田は江戸幕府の直轄地に組み入れられ、月隈山麓には陣屋が建設されて田島村が成立する。また、それまで来求里にあった元大原が、寛永元年（1624年）には現在の地に大原八幡宮として変宮されることとなる。

最後に、周辺の主な遺跡を見てみると、まず大波羅遺跡の北には、慈眼山遺跡（註1）、佐寺原遺跡、上ノ馬場遺跡（註2）、東側には赤迫遺跡（註3）、薬師堂山古墳（註4）、南には会所宮遺跡（註5）、会所山遺跡、法恩寺山古墳群（註6）などが存在している。これらの遺跡のうち、



0 500m 1000m

- | | | |
|----------------|------------|---------------|
| 1. 小迫辻原遺跡 | 7. 佐寺原遺跡 | 13. 薬師堂山古墳 |
| 2. 吹上遺跡 | 8. 大蔵古城跡 | 14. 会所宮遺跡 |
| 3. 後迫遺跡 | 9. 慈眼山戸頃遺跡 | 15. 会所山遺跡 |
| 4. 月隈横穴墓群・丸山城跡 | 10. 堤城跡 | 16. 元宮遺跡 |
| 5. 日田条里上手地区 | 11. 赤迫遺跡 | 17. 法恩寺山古墳群 |
| 6. 夕田横穴墓群 | 12. 大波羅遺跡 | 18. 日隈古墳・日隈城跡 |



第2図 周辺遺跡分布図 (1/20000)

これまでに3次の発掘調査が実施された慈眼山丘陵下に位置する瀬戸口遺跡では、古代の井戸と水汲場遺構が調査され、これらの遺構から「門」、「林」などの墨書土器や曲物・木製品などと、中世の溝・石垣状の石組・井戸などの遺構と多量の土師器・輸入陶磁器・摺鉢・火鉢・渡来銭・硯・高さ4cmの十一面観音菩薩などが出土している。とくに、後者の溝は15世紀後半の大型建物を伴うもので、大蔵氏に直接的に関係する遺構として重要なものである。また、この瀬戸口遺跡に近接する上ノ馬場遺跡では、中世の溝や土坑、井戸、柱穴などの遺構と伴う多くの遺物が出土しており、遺構の密集度や瓦や硯、銭などの遺物、地名などから、やはり大蔵氏に関係したものと考えられている。

次に、赤迫遺跡ではこれまでに7ヶ所の調査が行われ、このうちA地点では弥生時代後期から古墳時代前期の溝や土坑、古墳時代後期の竪穴住居跡・流路、奈良時代の溝などが検出され、古墳時代後期の流路からは下駄や鋤の柄・斧の柄・曲物などの木器が多数出土している。また、大原丘陵上のB・G地点では古墳時代中頃の石蓋土壙墓や横穴墓などが確認され、人骨のほか鉄剣・鉄刀・刀子・鉄鏃・玉類などが出土している。この大原丘陵南側には薬師堂山古墳が存在しており、主体部が箱式石棺と考えられる径35mを測る日田盆地では最大の円墳である。

さらに、これまでに3次の調査が行われた会所宮遺跡の3地点では、弥生時代中期前半の竪穴住居や土坑、古墳時代後期の溝、古代～中世の溝などの遺構が調査されている。なかでも弥生時代中期前半代の遺構は、市内では数少ない沖積地での当該期の集落事例でもある。また、会所山丘陵の隣接する法恩寺山古墳群は7基の円墳で構成され、4号墳は赤色顔料を用いて円文や動物、鳥などが描かれている装飾古墳として古くから知られている。

このように、大波羅遺跡の周辺には、古代から中世の日田の歴史を考えるには重要な遺跡が残っている。

註1) 坂本嘉弘編 『慈眼山瀬戸口遺跡』 大分県教育委員会 1992年

註2) 行時志郎編 『上ノ馬場遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第23集 日田市教育委員会 2000年

註3) 行時志郎他 「赤迫遺跡」『日田市埋蔵文化財年報』平成5～8年度 日田市教育委員会 1995～1998年

註4) 本格的な発掘調査は行われてはいないが、測量のみ市教育委員会が実施している。

註5) 土居和幸他編 『会所宮遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第11集 日田市教育委員会 1996年

註6) 賀川光夫編 『法恩寺山古墳』日田市教育委員会 1959年

参考文献

『角川日本地名大辞典 44大分県』 角川書店 1980年

『日田市史』 日田市 1991年

第2章 調査の内容

調査は北側から開始し、調査の進捗にあわせて便宜的にA～E区と区割りを設定して行った。このため、本報告では調査内容の説明や遺構番号については各調査区別に行うこととし、第3章にて本遺跡の調査での遺構番号の統一を図ることとした。また、図版中の写植では略記号を用いており、略記号の内容は以下のとおりである。

土坑・土、溝・溝、溝状遺構、竪穴状遺構・竪穴、掘立柱建物・掘立、包含層・包層、ピット・P

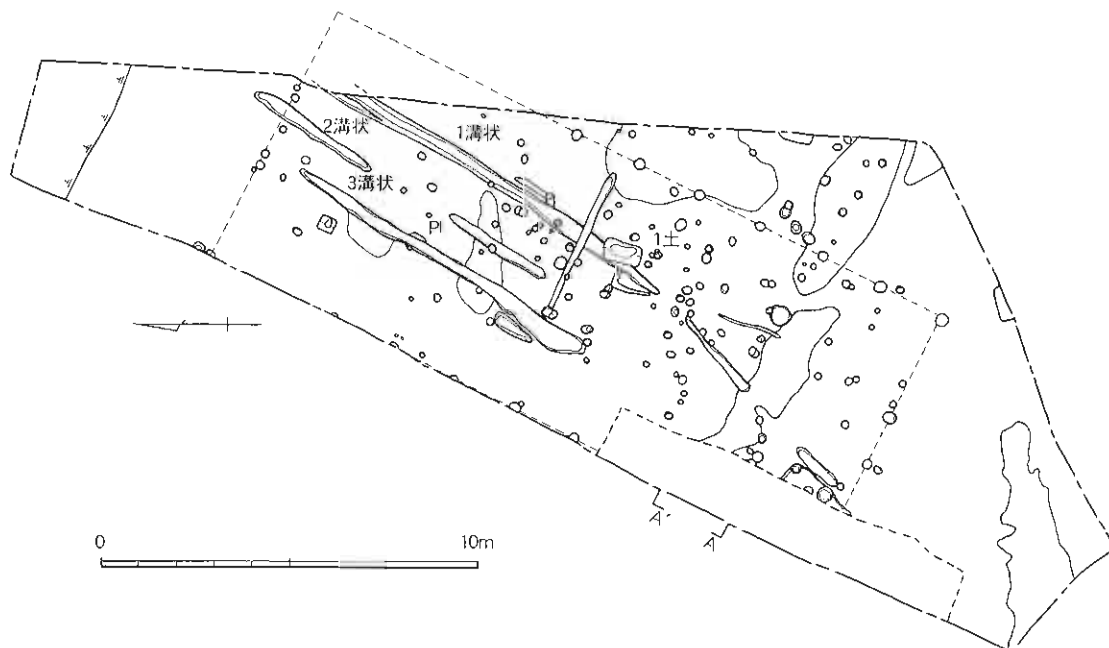
なお、略記号中ではすべて「号」は除外している。

第1節 A区の調査

調査区は、B区より水田と畑の段差によって約1m程低い位置にあたる。調査では、現表土面から約20cm下の暗灰褐色砂質土（3層）から遺構が検出され、その下層からは縄文時代の遺物包含層（4層）が確認された。（第4図）4層は灰褐色砂質土で小さな砂礫が土器とともに混在しており、高い位置からの水の流れにより、この層の中に流入したものと考えられる。

4層の中からは1、2の遺物が出土した。1は深鉢で、頸部から口縁部に内向する。口縁端部に刻目が入り、頸部に刻目突帯文が巡る。外面は鉄分が付着しており、調整は不明である。夜白期に属すると思われる。2は黒色磨研土器の浅鉢である。口縁部は外につまみ上げて端部は丸く収まる。晚期中頃の所産。

上記の3層を掘り込む土坑1基、溝状遺構3条、ピットなどが検出された。ピットは調査区全体で検出されているが、建物になるものは見られなかった。なお、第3図全体図中に示している建物



第3図 A区遺構配置図（1/200）

復元線は、現代のビニールハウスの跡であり、破線で結ばれるピットは攪乱である。以下各遺構について説明を加える。

1号土坑（第3図）

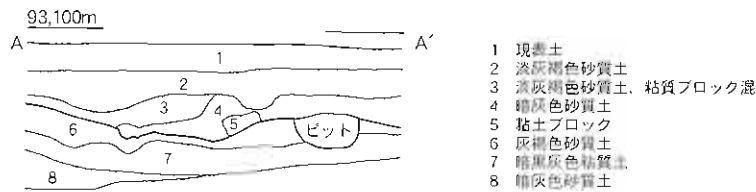
長方形の平面プランを呈し、長軸1.00m、短軸0.60m、深さ約20cmを測る。底面は北方向へ緩やかに傾斜している。出土遺物は、青銅製の吸口の破片が1点出土した。

溝状遺構（第3図）

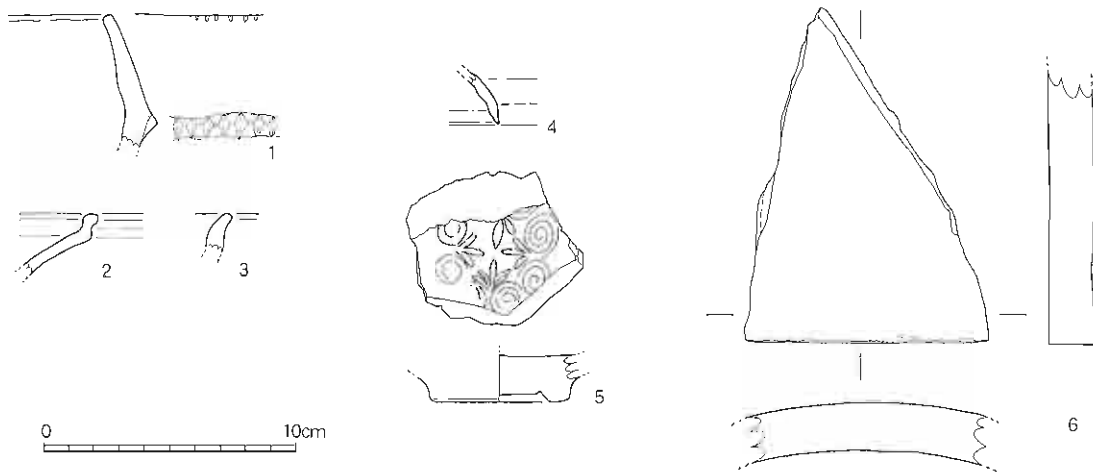
いずれも北東より南西方向に並行して伸びており、調査区内での残存長は1号が17m、最大幅0.5m、深さ10cmを測る。2、3号はいずれも残存長9m、幅は0.5~1.0mで、深さは5~10cmである。溝状遺構の底面は緩やかに水が流れ、水路として機能していた可能性がある。これらの溝の中からは、遺物の出土はなかった。

その他の出土遺物（第5図、図版3）

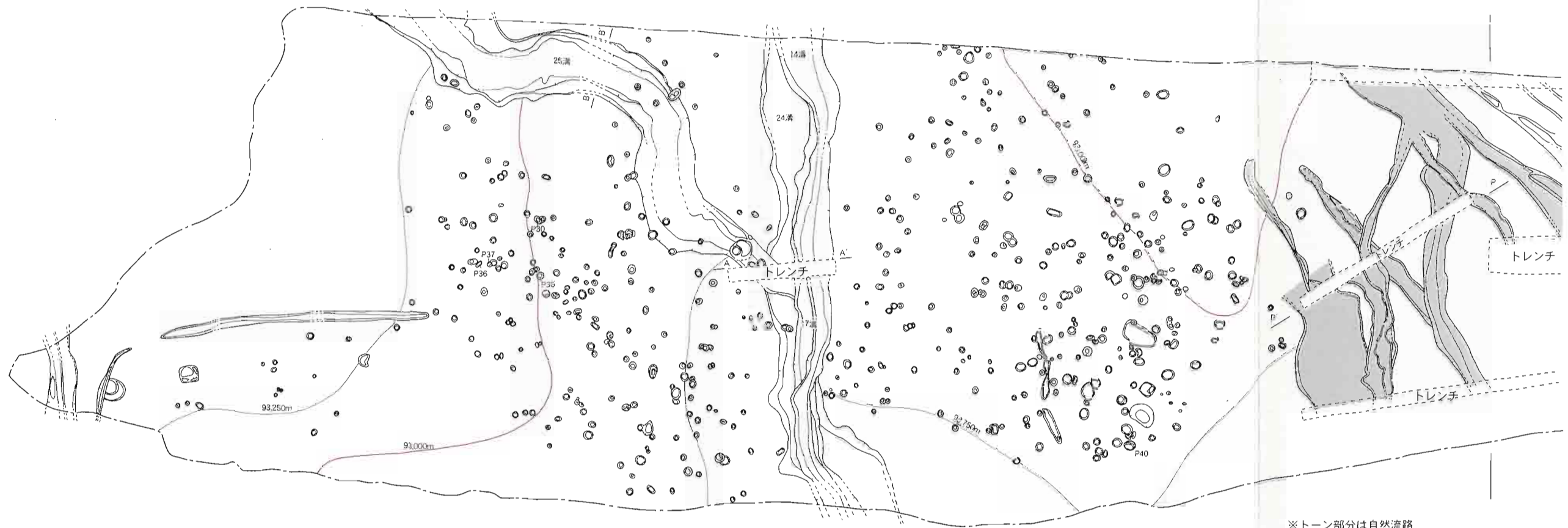
3はピット1から出土した縄文土器の浅鉢である。頸部は内湾しながら口縁部にかけて外反する。4~6は遺構検出時に出土した。4は須恵器の杯蓋である。5は龍泉窯系青磁碗である。見込にパルメットのスタンプ文が入る。底径は4.9cmを測る。6は瓦である。



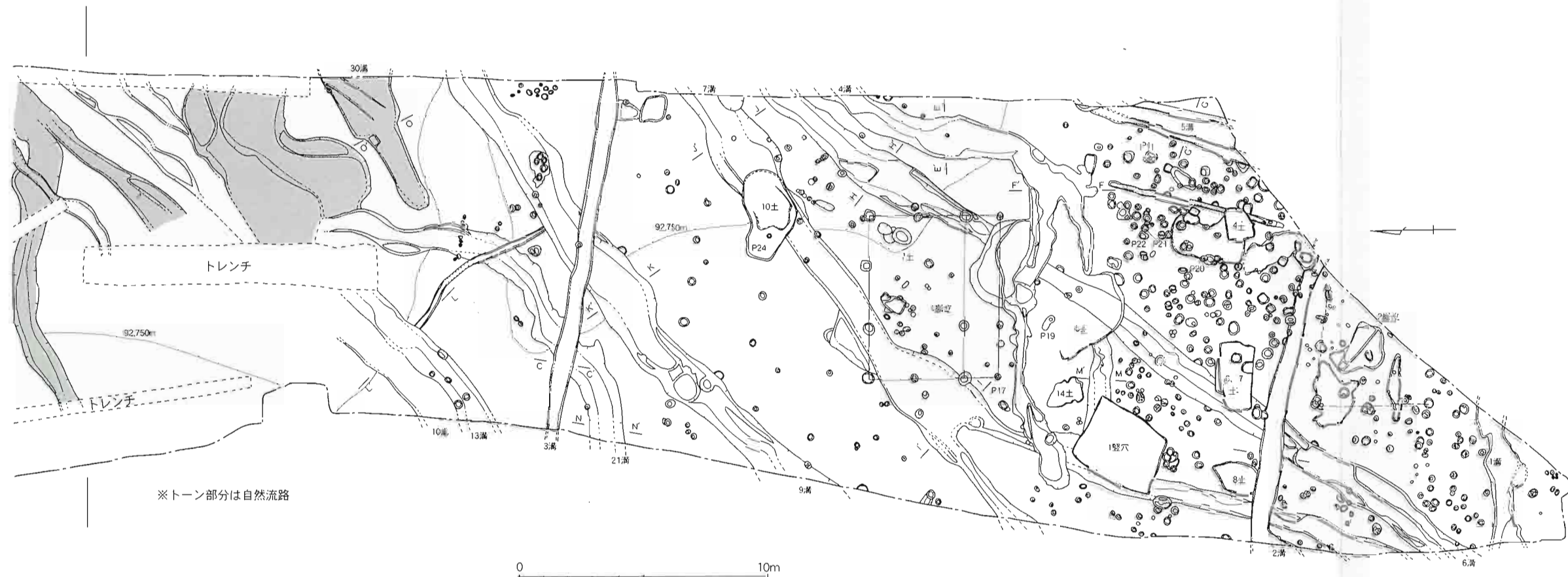
第4図 トレンチ土層断面図（1/40）



第5図 出土遺物実測図（1/3）



※トーン部分は自然流路



※トーン部分は自然流路



第6図 B区遺構配置図 (1/200)

第2節 B区の調査

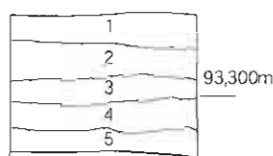
調査区は丘陵下に広がる標高92.75～93.5mの沖積地で、東から西方向に向かって、緩やかに傾斜している。

基本層序（第7図、写真3）は5層に分かれ、各層とも灰色・褐色の色調強く、どの層にも共通して下部に鉄分を多く含んでいることから、古代から現代まで水田として活用されていたと考えられる。また、地山と考えられる層は水を多く含んでおり、当時の状況も同様であったと考え、居住空間には適していなかったのではないかとと思われる。

B区で検出した主な遺構は、弥生・古墳・古代の溝および自然流路が約30条、古代の掘立柱建物2棟、古代の竪穴状遺構1基、土坑10数基、ピット群である。ほかに中世の柱穴も1基確認した。以下時代別に説明を加える。



写真3 基本土層



- 1 灰褐色粘質土
- 2 暗灰褐色粘質土
- 3 明灰褐色粘質土
- 4 暗灰褐色粘質土
- 5 明灰黄褐色粘質土

第7図 B区基本土層図 (1/40)

1. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は24号溝のみである。

24号溝（第8、9図、図版5）

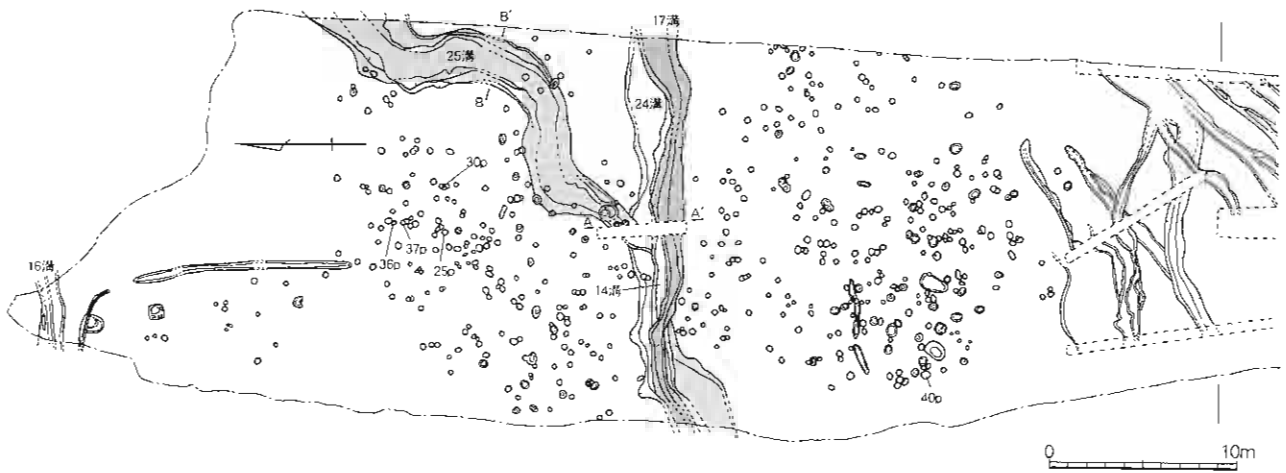
遺跡の北側に位置し、14・17・25号溝から切られる溝で、東西方向に流れる。調査区内での長さ約20m、検出面の幅約1～2m、底面の幅1m、深さ約0.6mを測る。埋土は、すべて砂質であること、溝の底面のレベルは東側が高く、西側が低いこと等から、東から西へと地形に沿って流れていたと考えられる。

出土遺物（第10図、図版12）

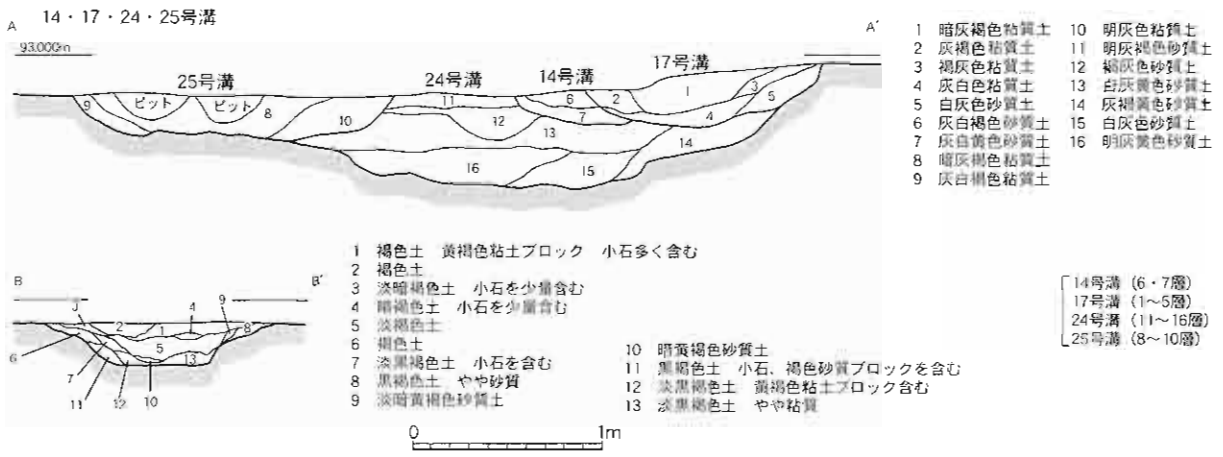
1～8は縄文土器である。1は鉢で波状口縁を呈し、口縁部に文様帯を作る。西平式土器である。2は鉢で、口縁部は内湾して文様帯をつくり、3条の沈線を巡らす。3～6は浅鉢で、縄文晩期の所産である。3は端部が平坦であり、4・6は端部が丸みを帯びる。7は鉢か椀と考えられる。8は深鉢の底部と思われる。9～12は溝下層からの出土した弥生土器である。9は長胴甕の口縁である。内外ハケ調整。10～12は弥生土器である。10は壺の口縁で、口縁部は外反し端部は平坦になる。11は甕で、口縁部は短く「く」の字状に外反する。12は複合口縁壺である。

2. 古墳時代の遺構と遺物

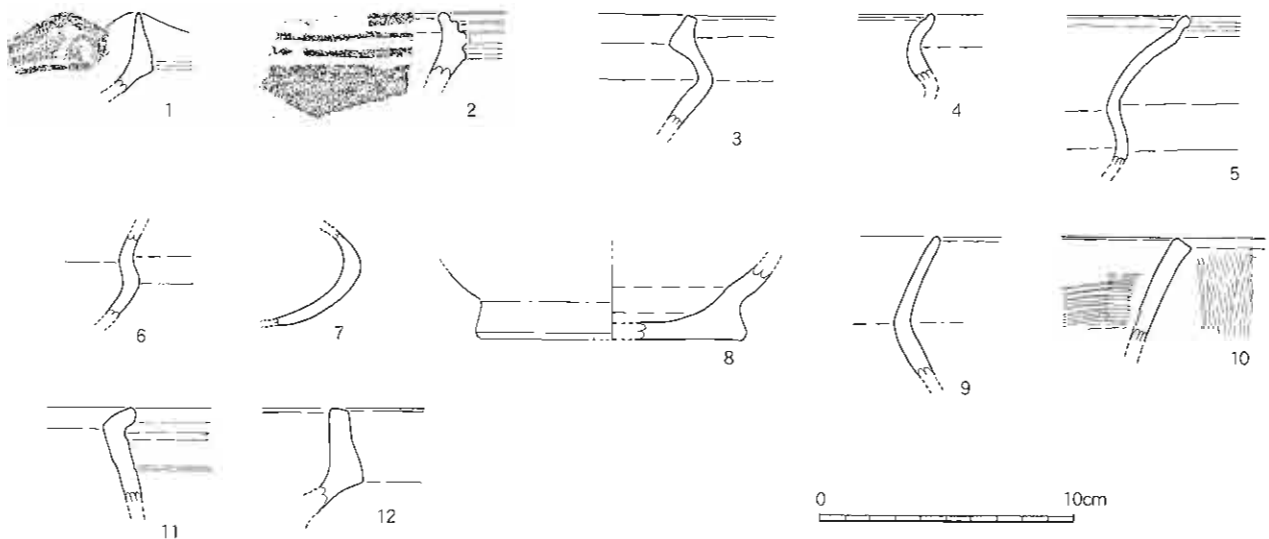
古墳時代の遺構は14・17・25号溝や高杯等が出土した数個のピット、包含層であり、いずれも調査



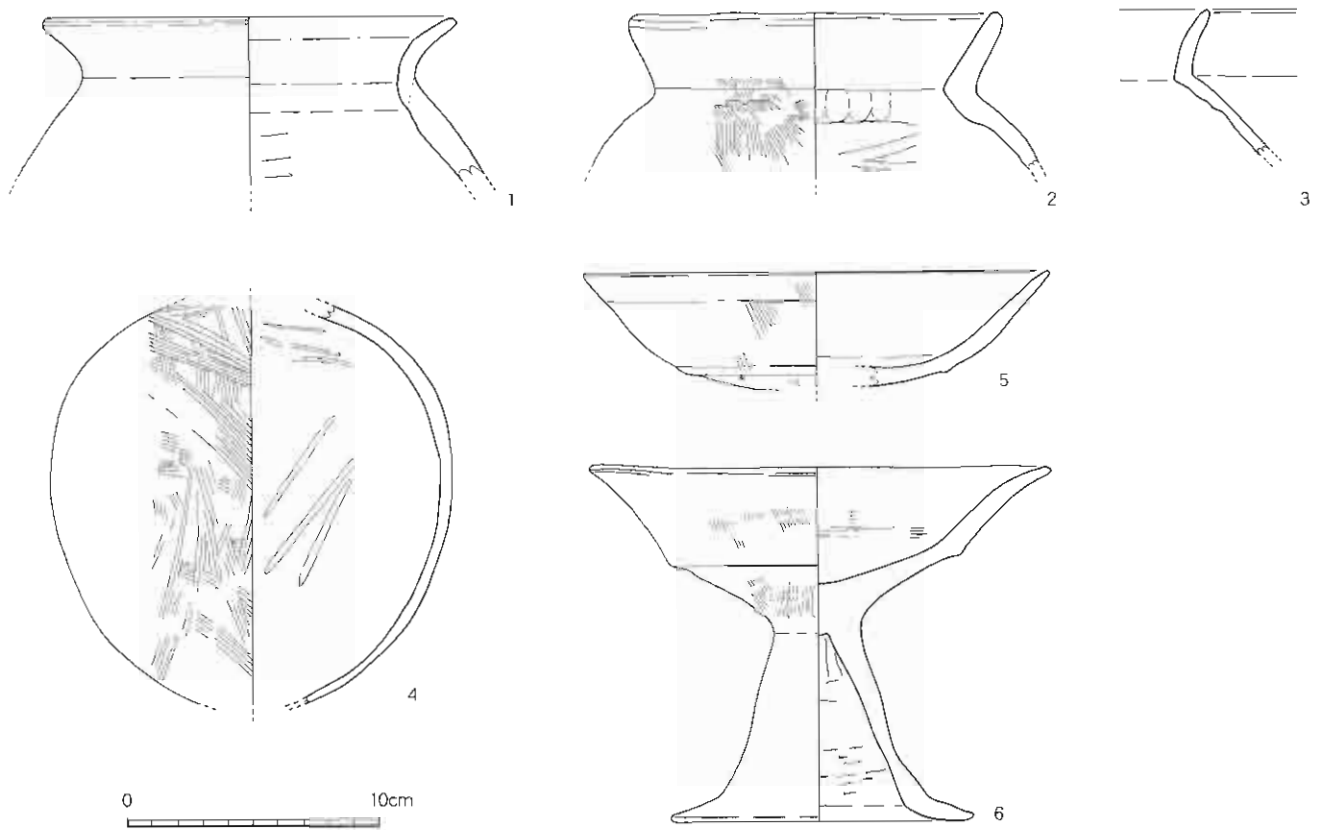
第8図 弥生・古墳時代溝配置図 (1/400)



第9図 14・17・24・25号溝土層断面図 (1/40)



第10図 24号溝出土遺物実測図 (1/3)



第11図 14・25号溝出土遺物実測図 (1/3)

区の北側に集中している。

1) 溝

14号溝 (第8、9図、図版5)

調査区の北側に位置し、24号溝を切り、17号溝に切られる溝で、東西方向に流れる。調査区内での長さ約20m、溝幅約2.0m、深さ約0.4mを測る。出土遺物より古墳時代と推定される。

出土遺物 (第11図、図版12)

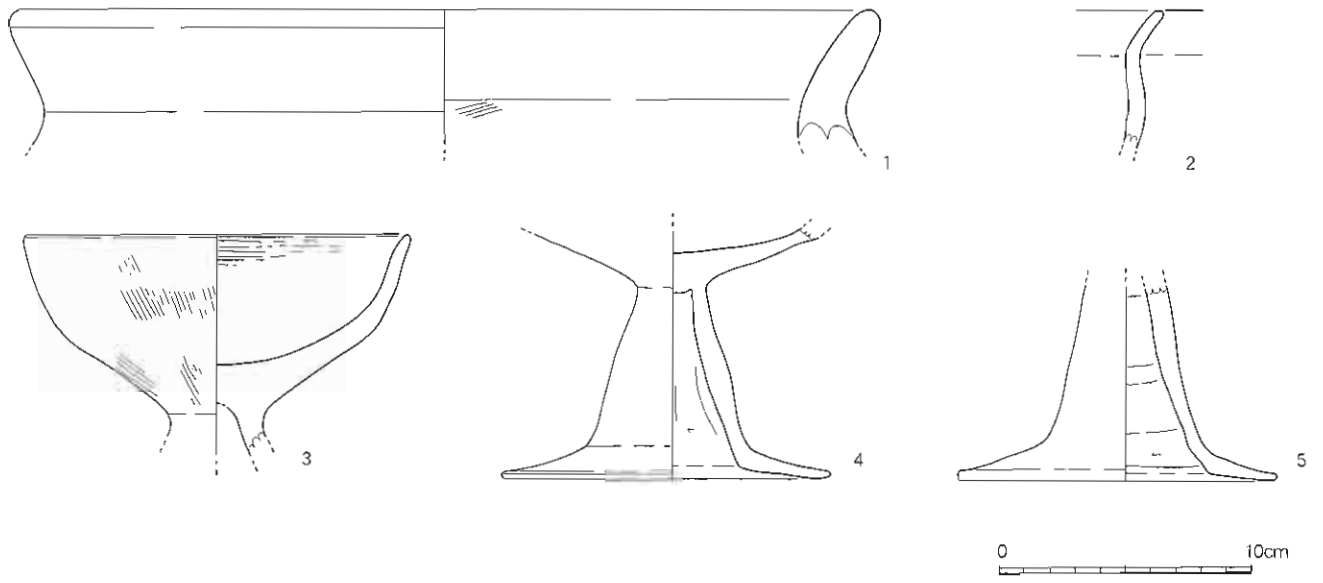
溝に伴うと考えられる遺物は1点のみである。1は土師器の甕の口縁で、口縁部は「く」の字状に外反する。

17号溝 (第8、9図、図版5)

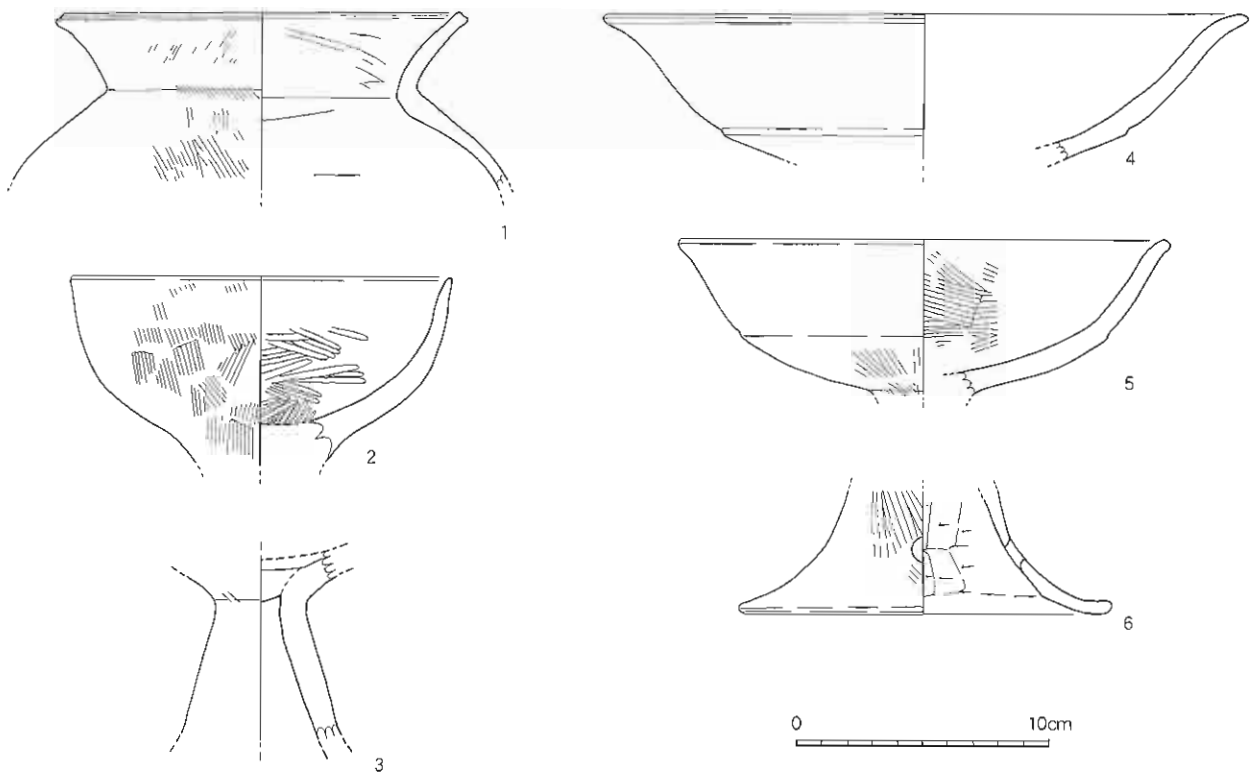
17号溝は調査区の北側に位置し、14・24号溝を切る溝で、東西方向に流れる。調査区内での長さ約20m、溝幅約1.0m、深さ約0.2mを測る。時期を比定できる遺物は出土していないものの、14号溝と軸を同じくし、ほぼ同じ場所に位置することから14号溝と時期を大きく隔てないと考えられる。

25号溝 (第8、9図、図版12)

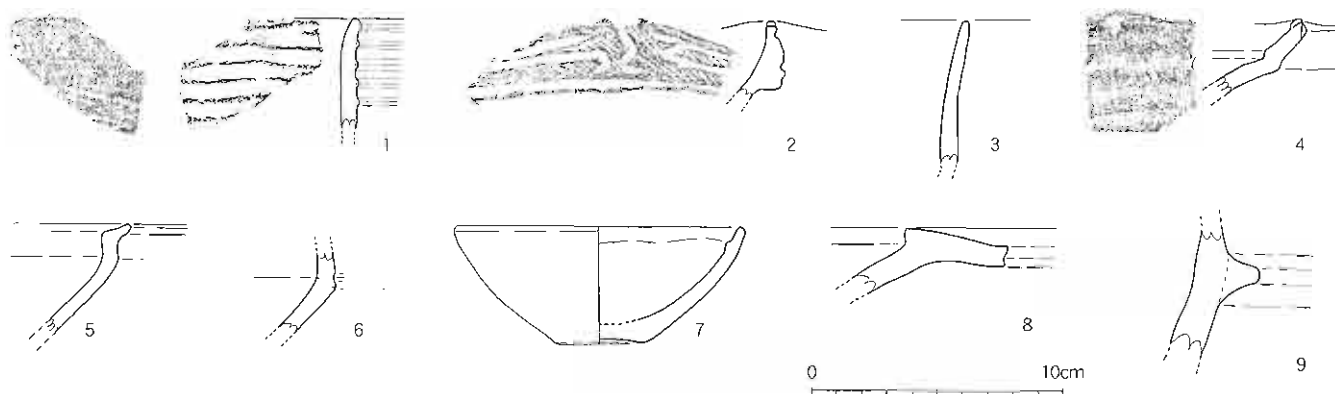
調査区の北側に位置し、14・17号溝に切られ、北東方向から南西方向に蛇行する溝である。調査区内での長さ約30m、最大幅約2.5m、深さ0.5m弱を測る。



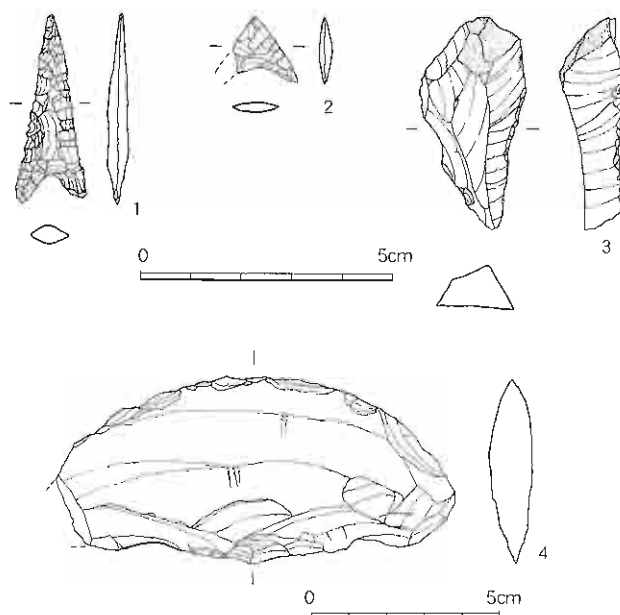
第12図 ピット出土遺物実測図 (1/3)



第13図 包含層出土遺物実測図 (1/3)



第14図 その他の出土遺物実測図(1/3)



第15図 出土石器実測図(2/3、4のみ1/2)

出土遺物(第11図、図版12)

2、3は土師器の甕で、口縁部は「く」の字状に外反し、頸部内面にはケズリにより明瞭な稜が残っている。4は壺の胴部で、扁球形を呈する。内外ハケ調整。5、6は高坏である。6は、頸部中段に稜を持ち、口縁部は外反し、脚部は屈曲して外へ開く。

2) ピット(第8図、図版5)

古墳時代のピット群は調査区の北側に集中している。完形に近い遺物の出土状況などが見られることから、掘立柱建物の可能性も現地で検討したが、建物は確認できなかった。

出土遺物(第12図、図版12)

1はピット35から出土した土師器大型甕の口縁部である。やや厚く作りは鈍い。2はピット30から出土した土師器鉢で、口縁部はゆるやかに「く」の字状に外反する。3はピット37からの出土し

た脚付鉢である。口縁部は内湾して立ち上がり、口唇部にかけてやや外反する。4はピット36から出土した高杯である。脚は屈曲して外へ開く。5はピット35から出土した土師器の高杯である。脚は屈曲して外へ開く。

3) 包含層

古墳時代の包含層は、前述の溝やピット群の付近にみられ、特に25号溝以北から遺物の出土があった。

出土遺物（第13図、図版13）

1は土師器の甕である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平坦になる。2は脚付鉢である。口縁部は内湾して立ち上がり、口唇部にかけてやや外反する。3～6は高杯である。3は脚部で杯底にしぼり痕が見られる。4、5は坏部で口縁部中段に一条の稜がみられ、口縁部は外反する。6は5と同一個体と考えられる脚である。穿孔が3穴施される。外面ハケ、内面は丁寧なケズリ調整。

4) その他の出土遺物（第14図、図版13）

14～25号溝、包含層、ピットからの出土遺物のうち流れ込みの可能性が高いものを一括して紹介する。

1～7は縄文土器である。1は深鉢の口縁部で細帯起隆文を5条施す。いわゆる蕪B式土器である。2は波状口縁を呈する鉢で、口縁部に文様帯を呈する磨消縄文土器で、西平式土器である。3は深鉢である。4～6は浅鉢片でいずれも縄文時代後期～晩期の所産である。4は波状口縁で、波頂部に刺突文が施される。6は頸部に1条沈線が施される。7は鉢の底部で、上部端に接合痕が見られることから、口縁部が接合部から外れているものと思われる。縄文晩期の所産と思われる。8、9は弥生土器で、8は高杯の口縁部で弥生時代中期の土器である。9は甕あるいは甕棺の胴部片で断面台形状の突帯を有す。

5) 石器（第15図、図版13）

1は24号溝より出土した石鎌で、やや細長い形状を呈し、鋸刃状に加工を施す。最大長3.4cm、最大幅1.4cm、最大厚4.5mmを測る。硬質安山岩製である。2はピット45より出土した石鎌である。最大長1.3cm、最大幅1.3cm、最大厚2.5mmを測る。3は14号溝から出土した使用痕のある剥片で、最大長4.2cm、最大幅2.1cm、最大厚1.2cmを測る。姫島産黒曜石製である。4はピット12より出土した横刃形石器である。左端が欠けており刃部はやや鋭利に調整される。最大長4.9cm、最大幅10.6cm、最大厚1.1cmを測る。安山岩製である。

3. 古代の遺構と遺物

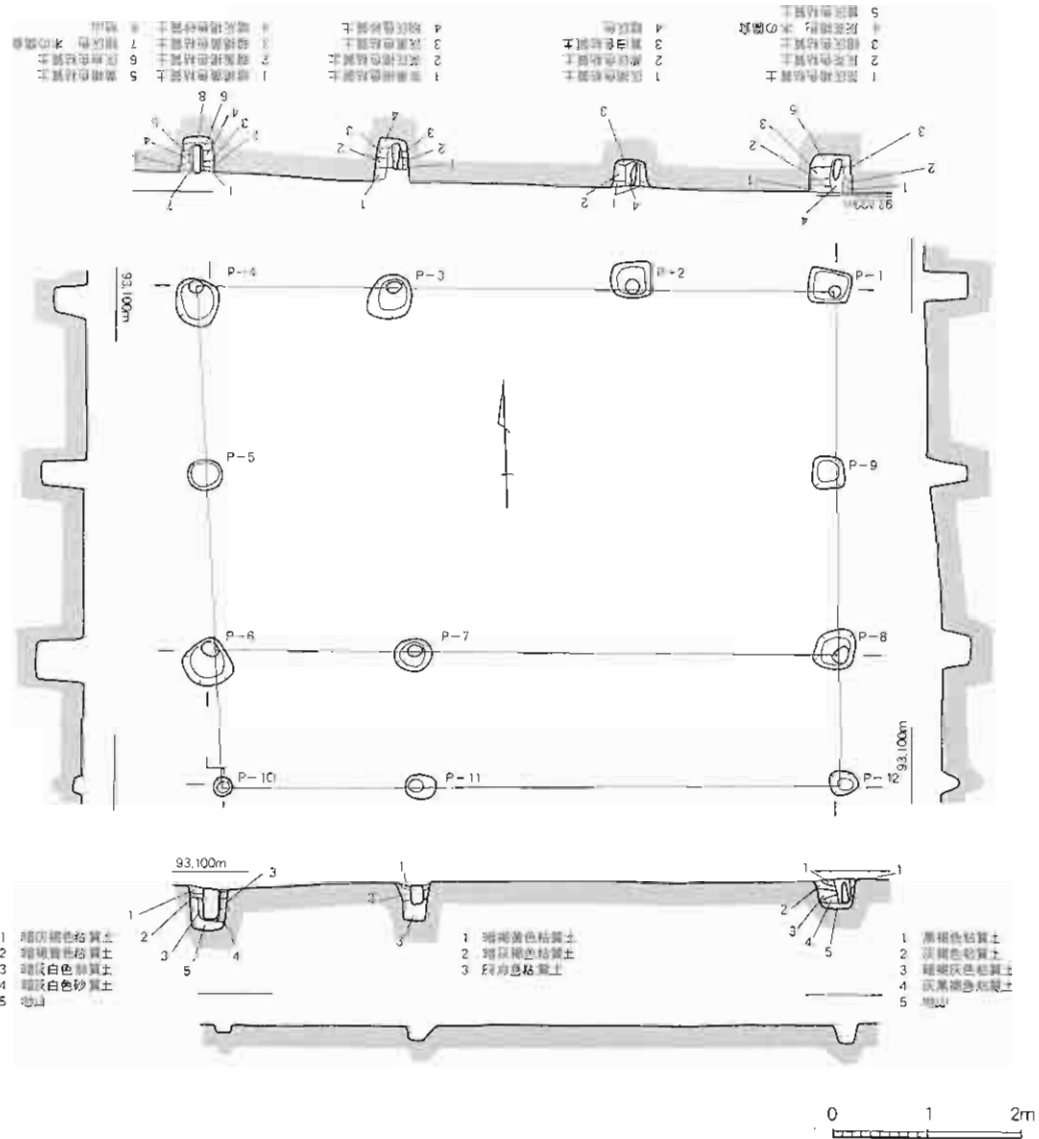
1) 掘立柱建物

調査区内には間隔を一定にして並ぶピットがいくつか検出されており、調査区外へと広がる建物群の存在が考えられるが、ここでは建物として認められた2棟を報告する。

1号掘立柱建物（第16図、図版6、7、16）

調査区の中央からやや南側に位置し、南側に庇を持つ2間×3間の建物である。主軸を東西方向にとる。梁行方向の柱間距離は約1.9m、桁行方向の柱間距離は約2.1~2.5mで、心々距離で東西長軸6.7m、南北短軸3.8mを測る。

柱穴は不正方形を呈し、庇柱穴はやや小さな円形を呈する。柱穴1~4、6~8には柱に使用された木が残存しており、下端をすべて平粗に加工していた。土層から、柱の木を立てた後、版築状に土を埋めて固定させた構築過程がわかる。また、南側の梁行と庇の中間にあたる柱穴が欠けていたが、これは構築段階から欠けていたものと考えられる。礎石などを利用したのであろうか。



第16図 1号掘立柱建物実測図 (1/80)

出土遺物（第30図、図版14）

13は柱穴10から出土した土師器坏である。破片での出土であるが、4号溝からの出土土器と接合した。4号溝との埋没の前後関係が問題になるが、建物との距離が近すぎることから少なくとも同時期に埋没したものではないと考えられる。

2号掘立柱建物（第17図、図版8）

調査区の南端、2号溝の南側に位置し、調査区外へと延びている。6つの柱穴を検出したが、うち2つの柱穴は扁平な石を置いて支えている。調査区外にかかるため建物全体の構造は不明であるが、建物として紹介する。主軸は東西方向にとり、1号掘立柱建物と平行する。出土遺物はないが、埋土の状況などから古代と考えられる。

2) 区画溝（第18図、図版6）

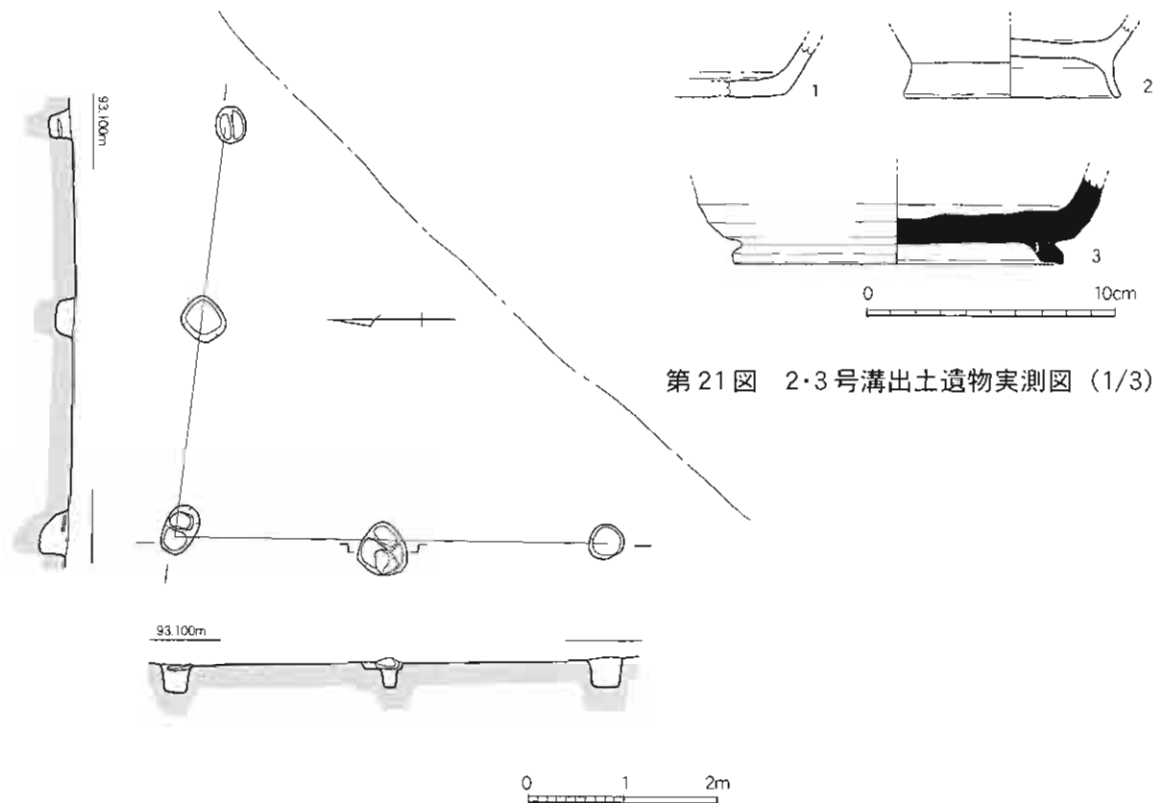
2、3号溝は1号掘立柱建物から東西に約11～12m離れ、主軸と平行して東西方向に延びており、建物を区画する溝であると考えられる。

2号溝（第19図、図版8）

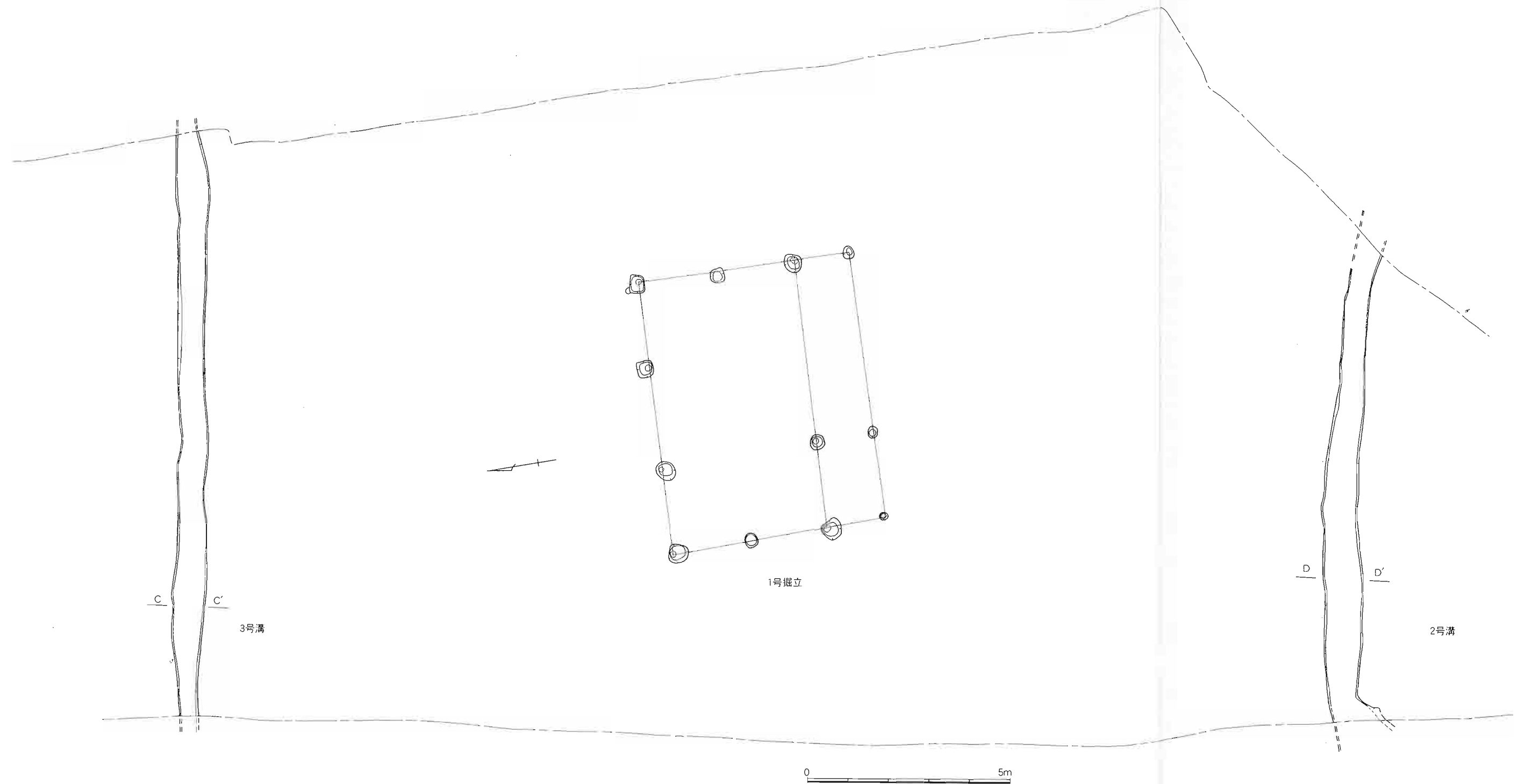
東西に直線的に延び、調査区西端でやや方向を変える。調査区外へと延びるためその方向等についての詳細は不明である。規模は調査区内での長さ12m、最大幅0.8m、深さ0.3mを測る。

3号溝（第20図、図版8）

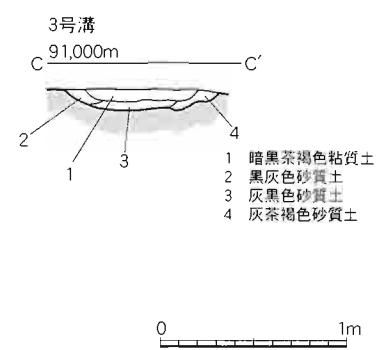
1号掘立柱建物より11m強北側に位置し、2号溝と平行して直線的に延びる。規模は調査区内での長さ14m、幅約0.8m、深さ0.4mを測る。



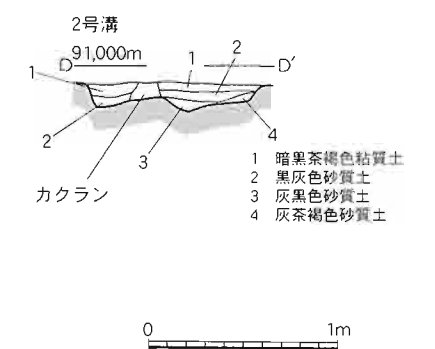
第17図 2号掘立柱建物実測図 (1/80)



第18図 2・3号溝実測図 (1/100)



第20図 3号溝土層断面図 (1/40)



第19図 2号溝土層断面図 (1/40)



第22図 1号竪穴状遺構実測図（1/30）

出土遺物（第21図、図版14）

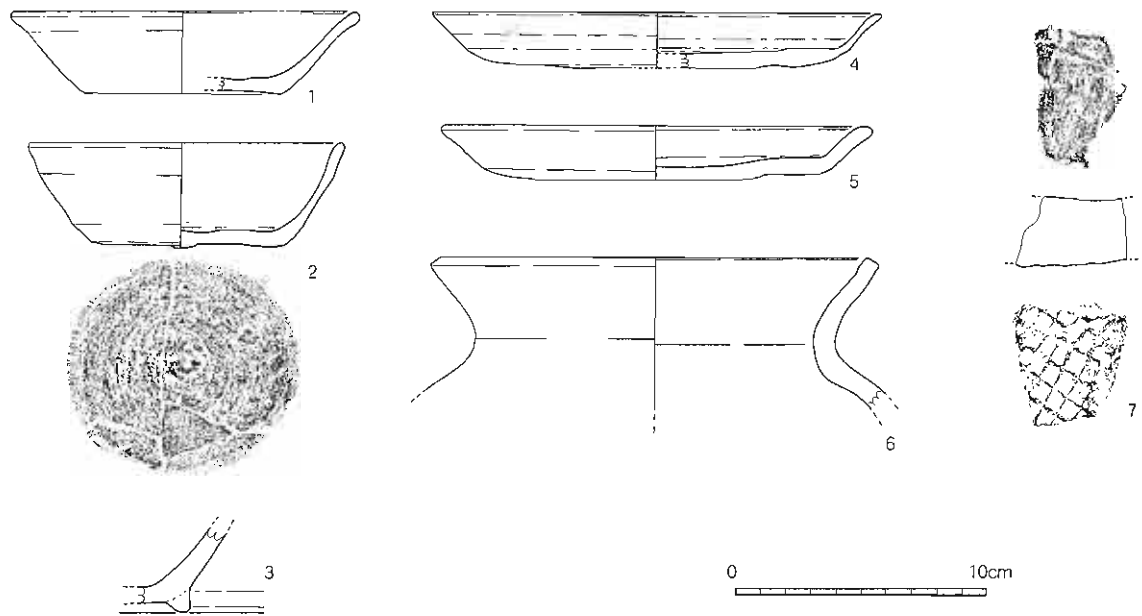
1は2号溝出土の土師器皿である。2は2号溝出土の高台付の坏で、高台は緩やかに外反して開く。3は3号溝出土の須恵器甕の底部である。高台はやや外に開く。9～10世紀代の所産か。

3) 竪穴状遺構（第22図、図版8）

調査区の南西部に位置し、7、11号溝を切る。平面形は不定形を呈し、規模は長軸6.4m、短軸5.4m、深さ5cmを測る。1号掘立柱建物と関連した竪穴住居とも考えられるが、カマドが検出されなかったことなどから竪穴状遺構とする。

出土遺物（第23図、図版14）

1、2は土師器坏である。1は口縁部が外反し、2はやや内湾する。3は高台付の土師器坏である。高台は底部屈曲部に付く。4、5は土師器皿である。6は土師器甕で、「く」の字状に外反し、端部は平坦になる。7は平瓦であり、凸面に格子目叩き、凹面には布目痕が残る。



第23図 1号竪穴状遺構出土遺物実測図(1/3)

4) 土坑

1号土坑(第24図、図版8)

調査区の中央よりやや南側に位置し、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸0.75m、短軸0.65m、深さ15cmを測る。埋土中に人頭大の石があり、その直下から須恵器蓋が出土した。

出土遺物(第26図、図版14)

1は土師器甕で、頸部内面にケズリによる明瞭な稜がみられ、口縁部は外反する。2は甗で、胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。内面ケズリ調整、頸部外面には指頭圧痕が残る。3は把手付きの甕である。内外ケズリ調整。4はツマミを持つ須恵器蓋で、口縁端部を垂直に折り曲げる。

2号土坑(第24図)

調査区の南、1号土坑のすぐ北側に位置するが、削平が著しい。平面形は卵形を呈し、規模は長軸0.6m、短軸0.5m、深さ10cmを測る。

出土遺物(第26図、図版14)

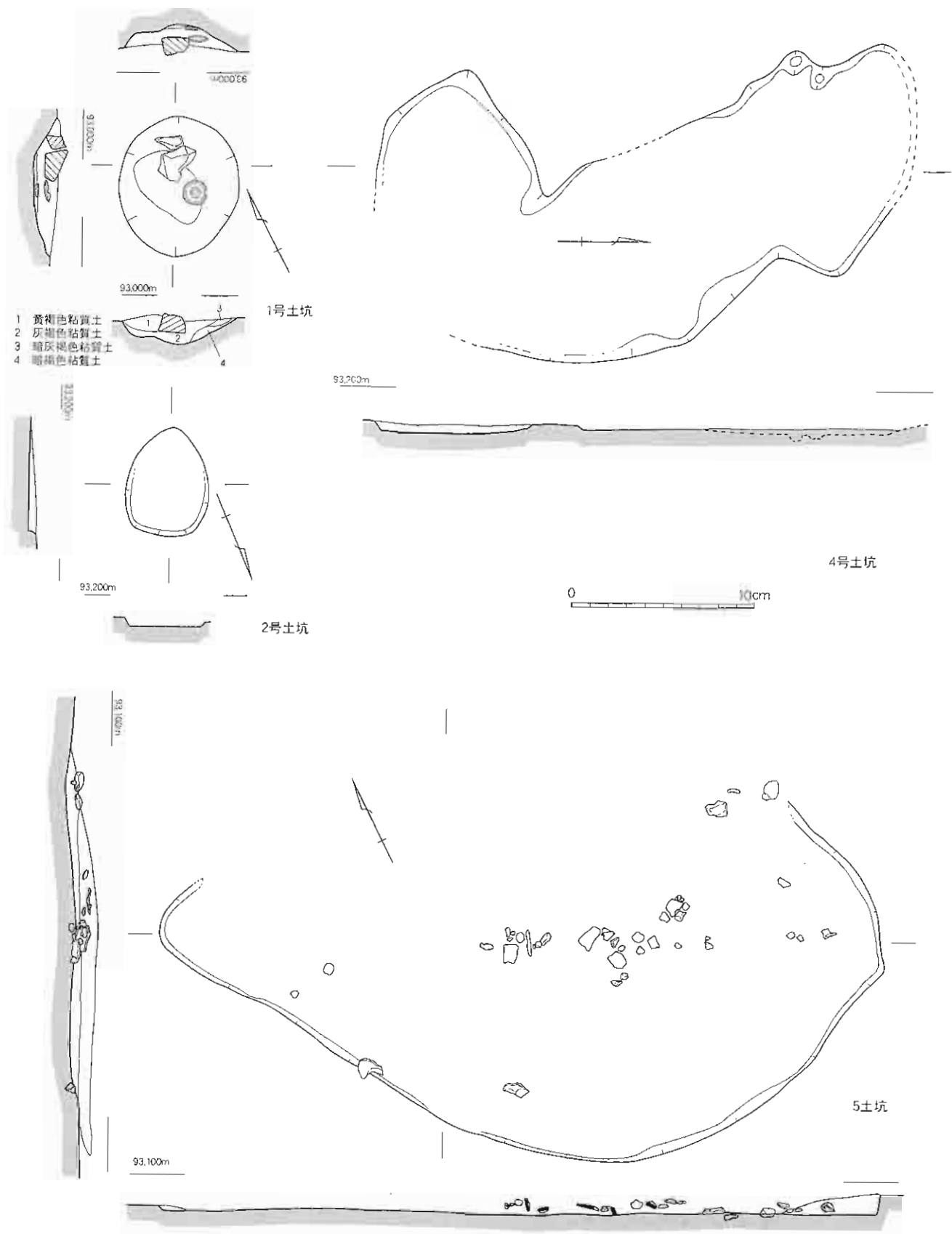
5は土師器の甕胴部片である。内面ケズリ調整。

4号土坑(第24図)

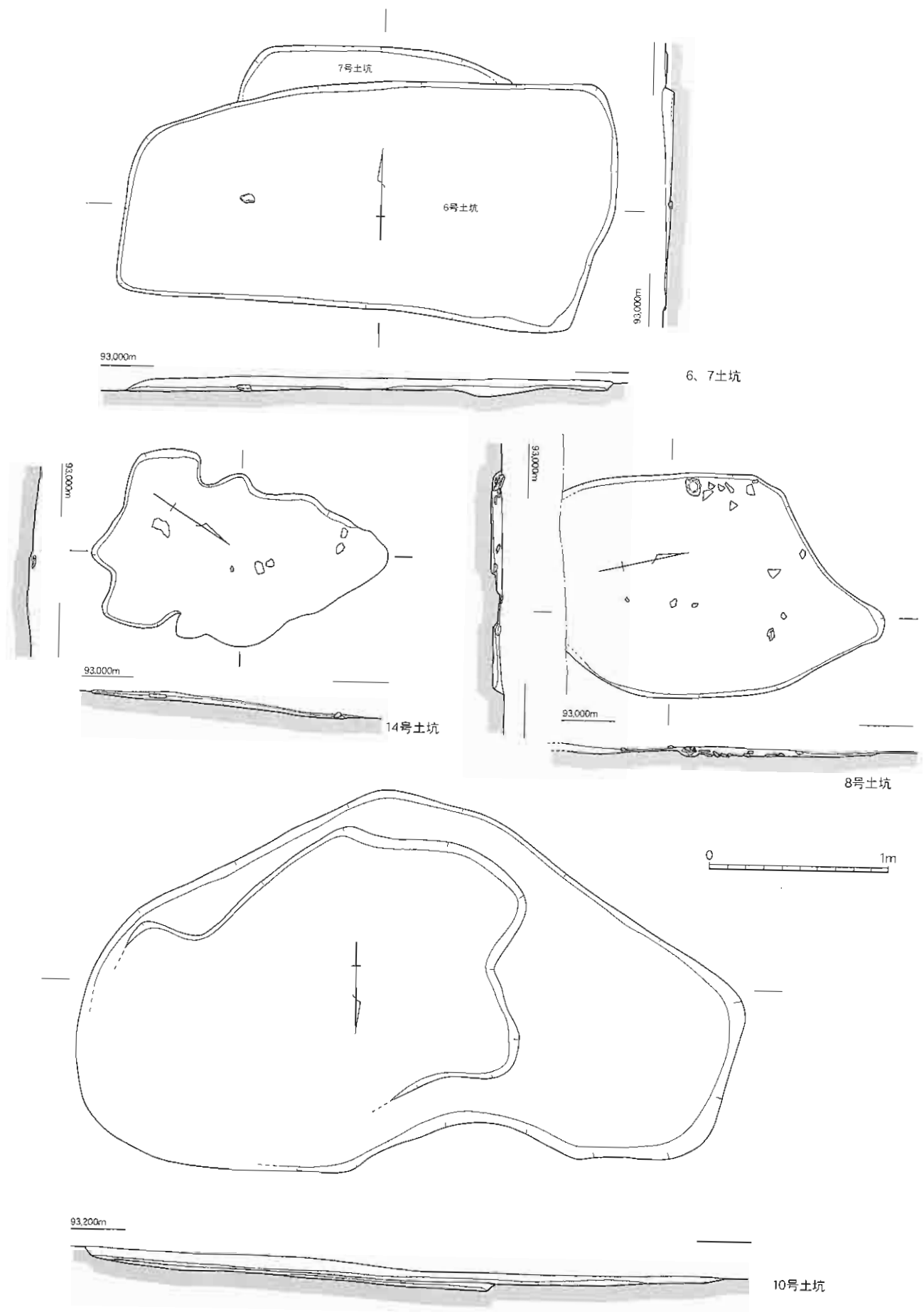
調査区の南側に位置する。削平が著しい。平面形は不定形を呈し、規模は長軸3.2m、短軸1.1m、深さ8cmを測る。

出土遺物(第26図、図版14)

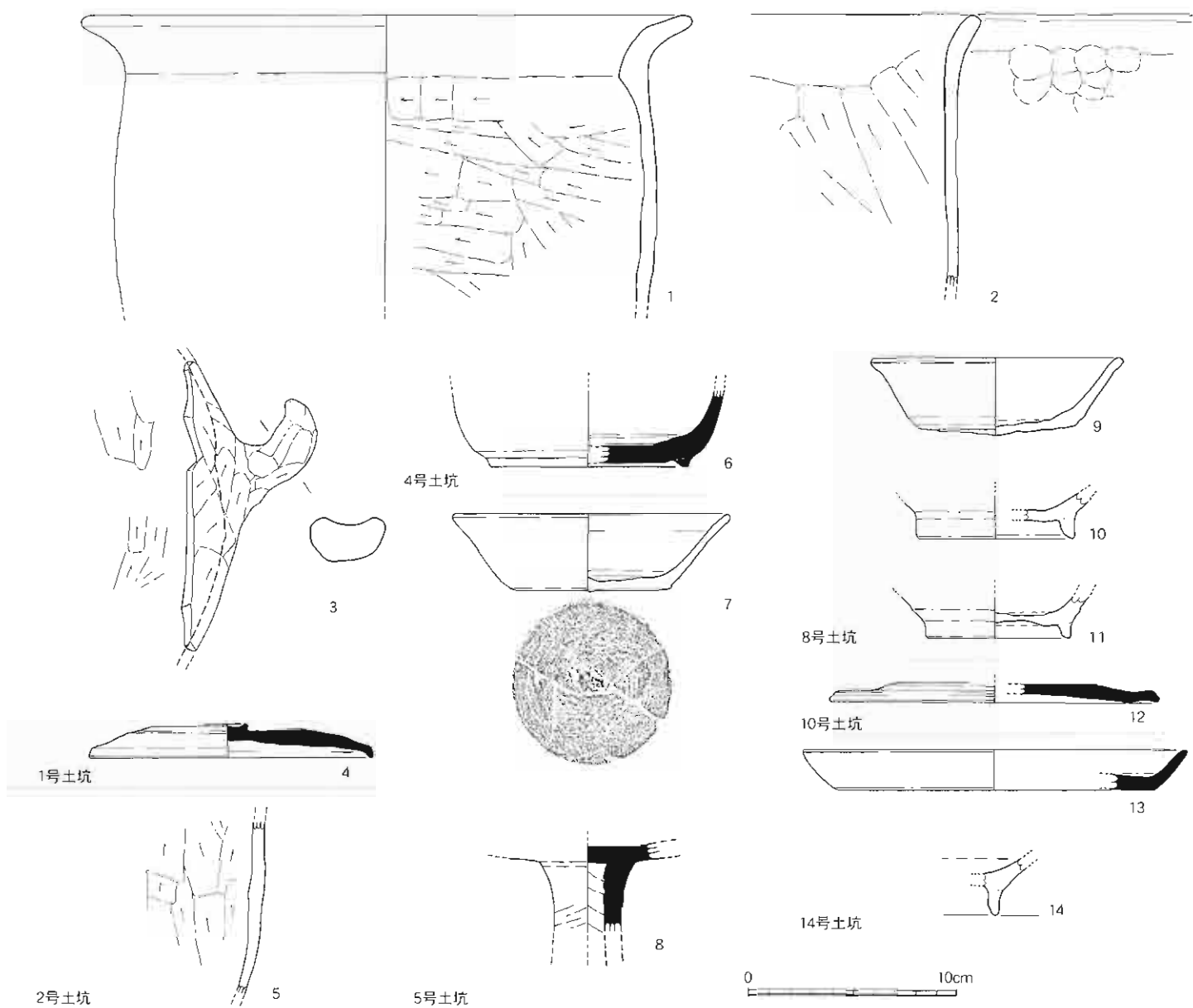
6は須恵器の高台付の坏である。また、須恵器蓋の内面に「□山」と書かれる墨書土器も出土している。(写真4)山の上の文字については墨書が薄く、読み取りができなかった。



第24图 1·2·4·5号土坑实测图 (1/30)



第25图 6·8·10·14号土坑实测图 (1/30)



第26图 土坑出土遗物实测图 (1/3)

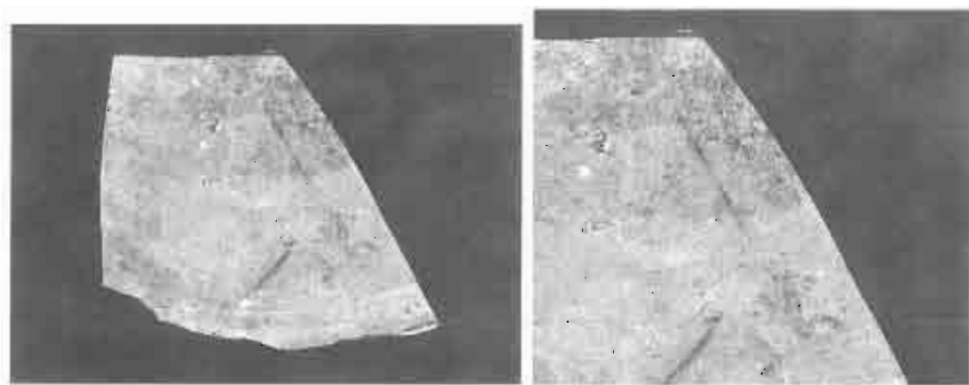


写真4 4号土坑出土「口山」墨書土器

5号土坑（第24図、図版8）

調査区の南側に位置し、6号溝を切る。平面形は不定形を呈するが、削平により南側は残存していない。規模は長軸3.8m、短軸2.0m + α 、深さ15cmを測る。

出土遺物（第26図、図版14）

7は土師器坏である。口縁部はやや外反し、底部は回転ヘラ切りである。8は須恵器高坏で、内外面にしぼり痕が見られる。

6号土坑（第25図、図版9）

調査区の南に位置し、6号溝、7号土坑を切る。平面形は不整長方形を呈し、長軸2.8m、短軸1.3m、深さ約5cmを測る。遺物は土器小片が出土した。

7号土坑（第25図、図版9）

6号土坑にその大半を切られているため、平面形・規模は不明である。深さ3cmを測る。遺物の出土はなかった。

8号土坑（第25図、図版9）

調査区の南側に位置し、2号溝に切られる。平面形は不定形を呈し、規模は長軸1.8m、短軸1.2m、深さ5cmを測る。

出土遺物（第26図、図版14）

9は土師器坏で、口縁部はやや外反する。10、11は高台付の坏で、高台は底部屈曲部に付き、やや細長く延びる。

10号土坑（第25図、図版9）

調査区の中央よりやや南側に位置し、9号溝を切る。平面形は不定形を呈するが、削平が著しい。規模は長軸4.0m、短軸2.0m、深さ10cmを測る。

出土遺物（第26図、図版14）

12は須恵器蓋で、口縁部は外反して端部を折り曲げる。

14号土坑（第25図、図版9）

調査区の南側に位置する。平面形は不定形を呈するが、削平が著しい。規模は長軸1.8m、短軸1.0m、深さ8cmを測る。

出土遺物（第26図、図版14）

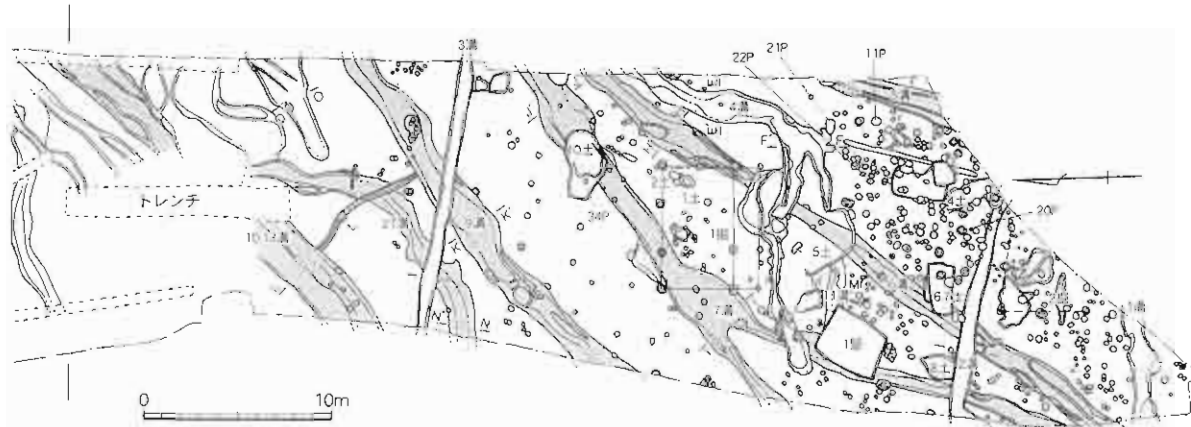
13須恵器の皿である。口縁部はやや内湾して立ち上がる。14は土師器高台付坏である。高台はやや細長く延びる。

5) 溝

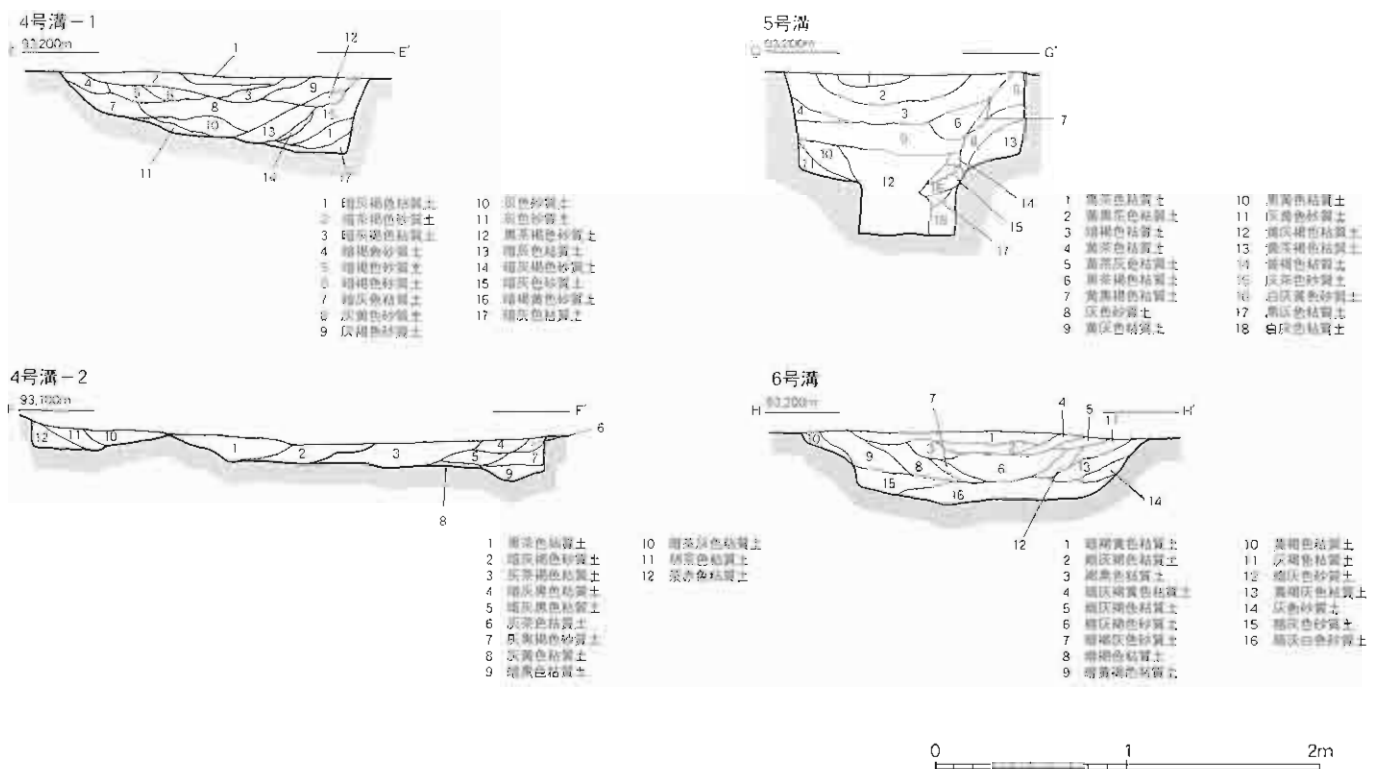
多くの溝が検出されたが、そのうち多くが自然流路であり、調査区南側で北西から南西に向かって流れる溝が古代に属するものと判断した。

4号溝（第27、28図、図版9）

調査区の南側に位置し、6、9号溝を切る。南北方向の流れから、中ほどで東西方向に向きを変えて二股に分かれるが、土層での切り合い関係が見られなかったことから、同時存在した可能性が考えられる。規模は、調査区内での長さ約21m、最大幅1.8m、最大深さ0.4mを測る。下層に砂質土が見られ、水が流れていたことが想定される。この溝からの出土遺物は他の溝に比して最も多い。



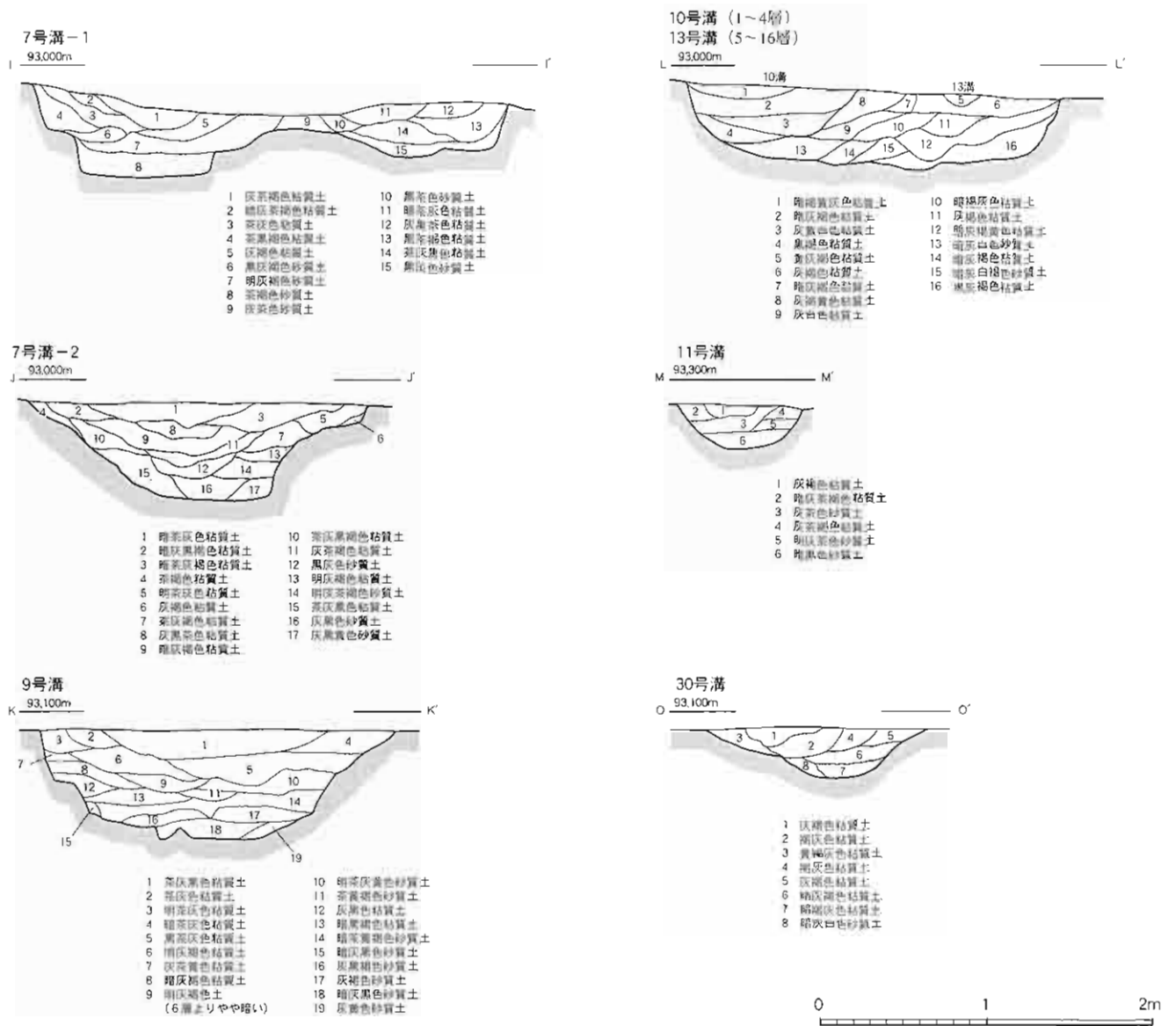
第27図 古代の溝配置図 (1/400)



第28図 4・5・6号溝土層断面図 (1/40)

出土遺物 (第30図、図版14、15)

1～5は須恵器壺である。1、3～5は端部を折り曲げる。2は端部が丸みを帯びつくりは鈍い。6は須恵器皿である。口縁はやや外に開く。7は須恵器高台付坏である。8は須恵器蓋である。つまみを有する。9は土師器皿である。10～14は土師器坏である。10～12は口縁部がやや外に開き、外反する。13は1号掘立柱建物の柱穴10から出土した破片と接合した土師器坏である。口縁部はやや内湾し、端部を外へ折り曲げる。14は内外に手持ちヘラケズリ調整が残る。15～17は土師器皿である。口縁部は外に向かって開き、15は端部を外に折り曲げる。17は墨書土器で、底面に「山」という文字(写真5)が入る。18、19は須恵器甕で、内外タタキ調整。20～23は土師器甕の口縁部で、内面にケズリが施される。24は土師器高台付坏である。高台は外れており、痕跡が残る。



第29図 7・9・10・11・13・30号溝土層断面図 (1/40)

5号溝 (第27、28図、図版10)

調査区の南東部に位置し、北東から南西に流れ、C区1号溝とつながる。規模は調査区内での長さ5m、最大幅1.5m、最大深さ0.9mを測る。断面形は二段掘を呈する。

出土遺物 (第30図、図版10)

25は須恵器蓋で、端部をやや折り曲げる。26は土師器坏で、底部は回転ヘラ切りである。



写真5 「山」墨書土器

6号溝 (第30図、図版15)

調査区の南側に位置し、北東方向から南西方向へと流れる。規模は調査区内での長さ32m、最大幅2.0m、深さ0.4mを測る。下層には砂質土層の堆積が見られ、水の流れが伺える。

出土遺物 (第30図、図版15)

27は須恵器の高台付坏で、高台はやや外に開く。

7号溝 (第28、29図、図版10)

調査区の南側に位置し、1号掘立柱建物、竪穴状遺

溝、10号土坑、4号溝に切られる。溝は途中で2本に分かれ、規模は分岐前で、最大幅2.2m、深さ0.6m、分岐後の東側の溝幅1.0m、深さ0.6m、西側の溝幅0.8m深さ0.4mを測る。7号溝—1土層では、この2本の溝の切り合いは見られなかったことから、同時存在した可能性が考えられる。遺物は土器小片が出土した。

9号溝（第28、29図、図版10）

調査区の中央よりやや南側に位置し、3号溝に切られ、21号溝を切る。北東方向から南西方向に流れる。規模は調査区内での長さ約28m、最大幅2.2m深さ0.6mを測る。溝のほぼ中央から南北方向にのび、10、13号溝とつながる1本の細い溝が検出された。浅い溝であり、用途は不明である。遺物は土器小片が出土した。

10号溝（第28、29図、図版10）

調査区のはほぼ中央に位置し、自然流路に切られ、13号溝を切る。北東方向から南西方向へ流れる。規模は、最大幅1.2m、深さ0.4mを測る。溝の中間付近は大きく攪乱されている。遺物は土器小片が出土した。

11号溝（第11図、図版11）

調査区の南に位置し、5号土坑と竪穴状遺構に切られる。規模は幅0.8m、深さ0.3mを測る。4号溝の続きの溝とも考えたが、深さがやや異なることから、4号溝とは別の溝と判断した。6、7号溝との切り合い等は不明である。

出土遺物（第30図、図版15）

28は須恵器の蓋である。端部はやや断面三角形状を呈する。29は須恵器の坏である。

13号溝（第28、29図、図版10）

調査区のはほぼ中央に位置し、自然流路、10号溝を切られる。北東方向から南西方向へと流れる。規模は最大幅1.6m、最大深さ0.5mを測る。溝の中間付近を大きく攪乱されている。

出土遺物（第30、37図、図版15、16）

第30図30は土師器皿で、内外面にミガキが横方向に入る。31は須恵器の蓋である。端部を下方に折り曲げている。32は土師器の脚付鉢の鉢部である。口縁部は垂直に立ち上がる。

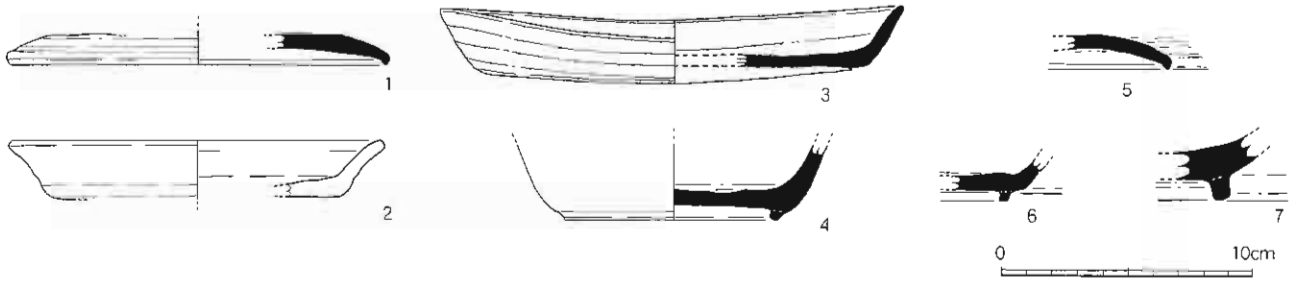
また溝の東側からは木器が出土している。第37図1は建築部材である。2箇所には漆が施される。第37図2、3は加工痕のある木器で、用途不明である。

30号溝（第28、29図、図版11）

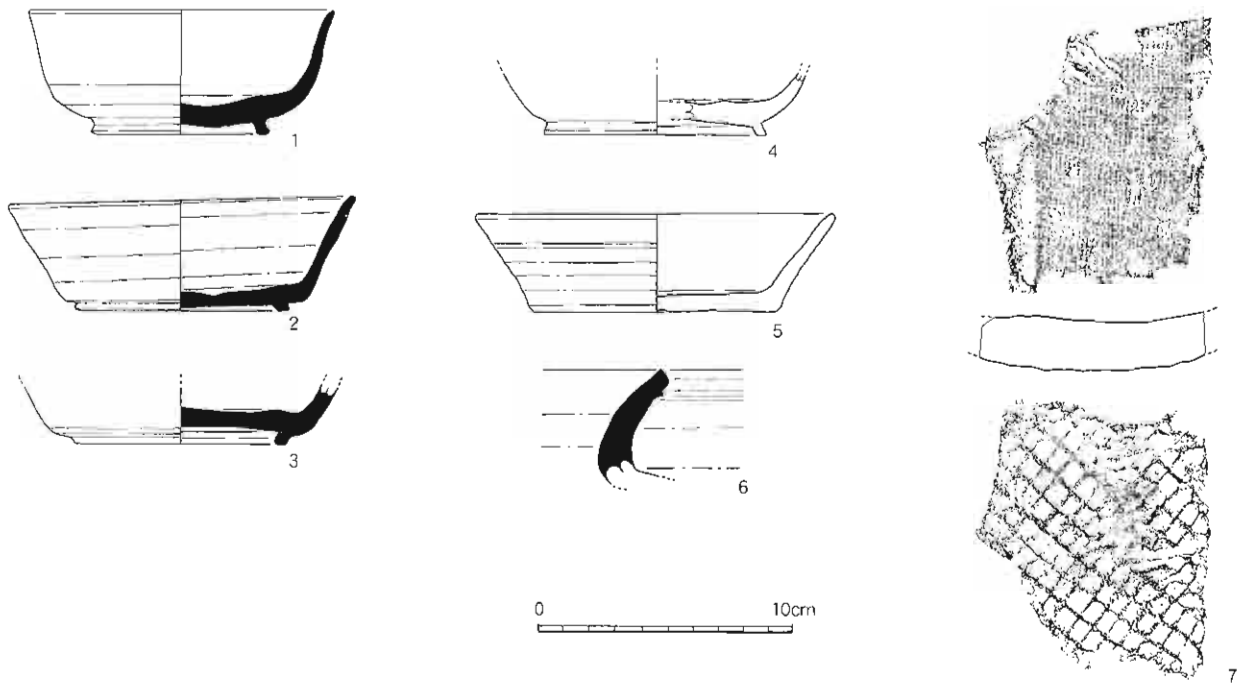
調査区の中央部東側に位置し、6mほどで削平により消滅する。規模は調査区内での長さ約6m、最大幅1.2m、深さ0.4mを測る。埋土が他の溝のものと類似することから古代のものである可能性が考えられる。遺物の出土はない。

6) その他の溝（第6、36図、図版11）

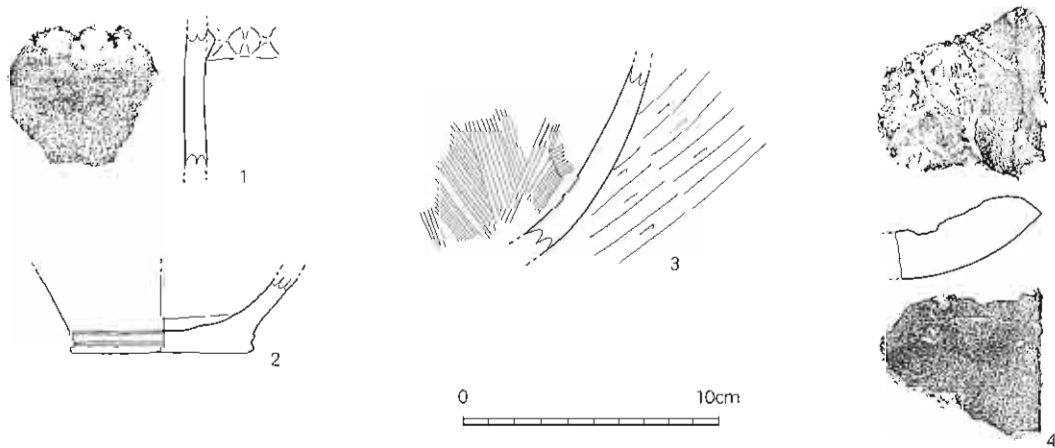
調査区中央のやや谷状に下がった場所に位置し、幾重にも折り重なって東から北西方向に流れる。遺構検出面では各溝の切り合い関係を把握することは出来なかったため、調査区中央にトレンチを入れて土層で確認した（第31図）。トレンチ土層から、著しく切り合っていることが確認されたものの、各層とも砂質であり、砂粒を多く含むなど、類似した埋土が見られること、溝の掘方がしっかりしていないこと、やや地形が谷状に下がることなどから、調査区中央に幾重にも自然流路が流



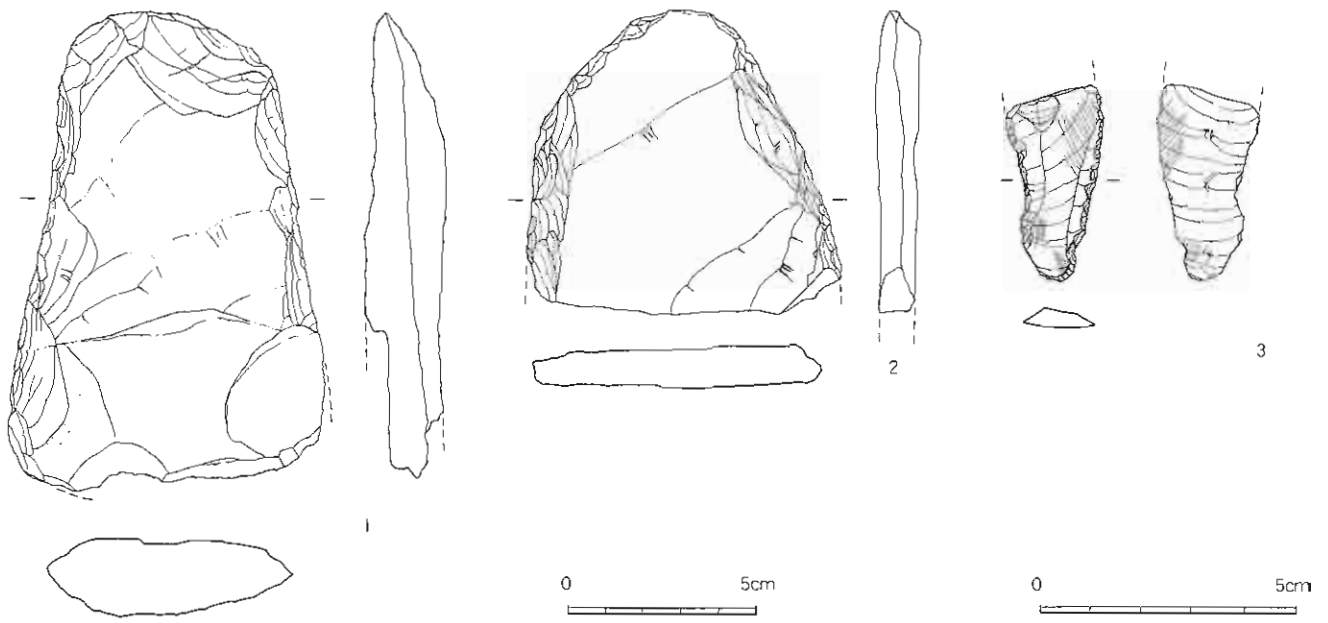
第33図 ピット出土遺物実測図 (1/3)



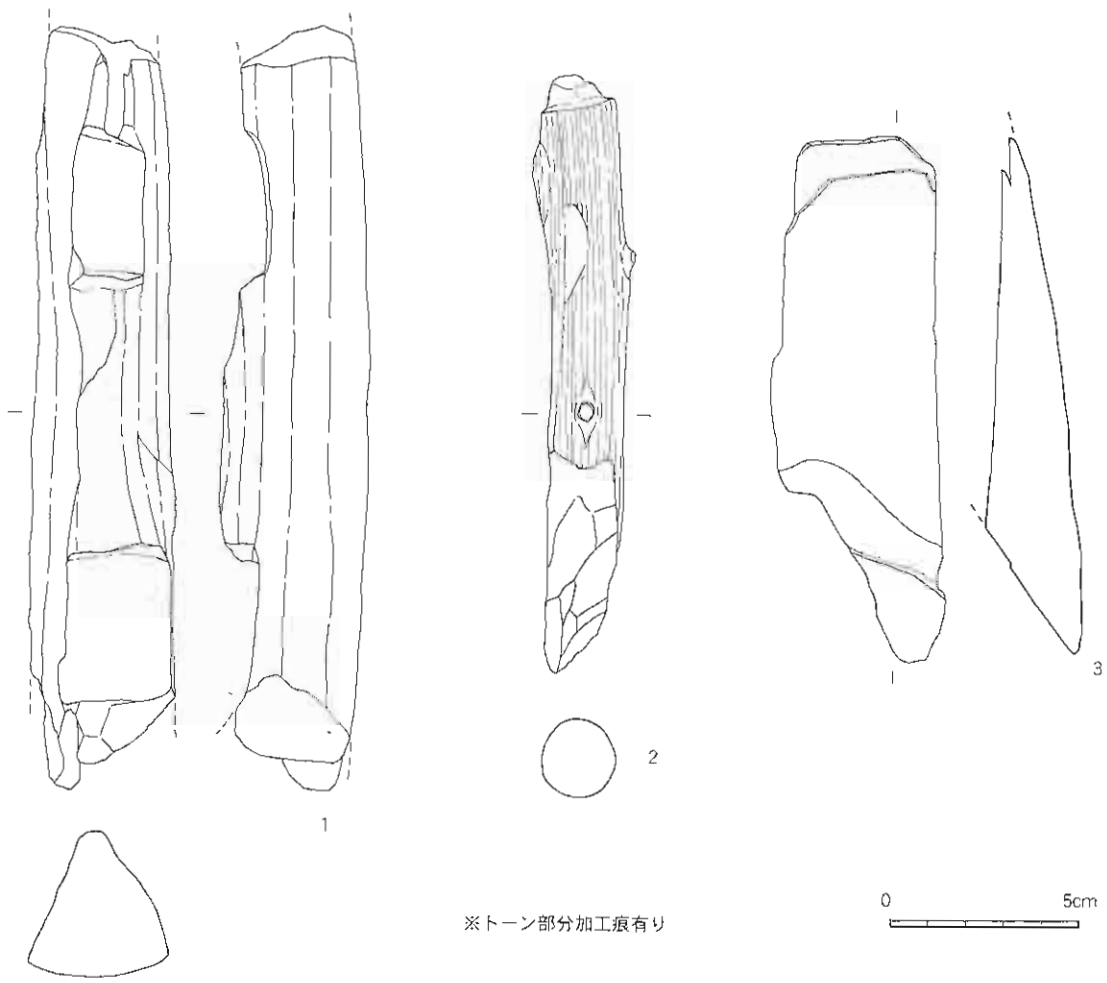
第34図 包含層出土遺物実測図 (1/3)



第35図 その他の出土遺物実測図 (1/3)



第36図 出土石器実測図 (1/2、3のみ 2/3)



第37図 13号溝出土木器実測図 (1/2)

れていたものを判断した、したがって、調査区中央の溝を一括して自然流路として扱う。

出土遺物（第32図、図版15）

1は土師器の坏である。口縁部はやや外に開き端部は外反する。

21号溝（第31図、図版11）

21号溝は調査区のほぼ中央に位置し、3号溝及び10号溝に切られる。規模は最大幅1.4m、深さ0.5mを測る。埋土には砂質層が多く見られることから、自然流路の可能性が考えられる。遺物は土器小片が出土した。

7) ピット

古代のピット群はほとんどが調査区の南に集中している。

出土遺物（第33図、図版15）

1はピット11から出土した須恵器の蓋である。端部は小さな三角形状を呈する。2はピット19から出土で、4号溝、14号土坑から出土した破片と接合した土師器の皿である。3はピット20からの出土した須恵器皿で、全体に大きく歪んでいる。4はピット21から出土した須恵器高台付坏である。高台はやや内側に傾く。5はピット22から出土した須恵器蓋で、端部は小さな三角形状を呈する。6はピット34から出土した須恵器高台付坏である。7はピット11から出土した須恵器高台付坏である。

8) 包含層出土遺物（第34図、図版15）

1～3は須恵器高台付椀である。1、2は高台が底部のやや内側よりに貼り付けられ、3は底部の外側に貼り付けられ、やや内に傾く。4は土師器高台付坏である。5は土師器坏である。口縁はやや外に開く。6は須恵器甕の口縁部である。口唇部に突帯を有する。7は平瓦片である。凸面に格子目叩き、凹面には布目痕が残る。

9) その他の出土遺物（第35図、図版15）

前述してきた遺構の時期に伴わない遺物及び中世の遺物を一括して紹介する。1は竪穴状遺構から出土した縄文土器の深鉢で、口縁部に刻目突帯文を有する。縄文時代晩期末の所産であろう。2は7号溝から出土した縄文土器の底部である。底部外面に2本の沈線が巡る。縄文時代晩期後半であろう。3は9号溝から出土した弥生土器の甕で、弥生時代後期西新式である。4はピット40から出土した中世の平瓦である。中世後半期のものであろう。

10) 出土石器（第36図、図版15）

1は5号土坑から出土した打製石斧で、刃部が欠損する。最大長12.8cm、最大幅8.4cm、最大厚2.1cmを測る。安山岩製である。2は5号溝から出土した打製石斧で、基部が残存する。最大長8.1cm、最大幅8.2cm、最大厚1.1cmを測る。安山岩製である。3は自然流路から出土した2次加工剥片である。縦長剥片の両側面に2次調整が施される。最大長3.9cm、最大幅1.9cm、最大厚0.6cmを測る。黒曜石製である。

第3節 C区の調査

調査区内は標高92~93mの沖積地に位置し、西側に向かって緩やかに傾斜する。隣接する調査区の南側の土地は宅地造成の際に大きく削平を受けているため、遺構は残存しておらず、調査区も宅地造成の際に一部削平を受けていたようである。

調査区は水田として利用されていたと思われる、淡褐色土層と暗黄褐色土層が堆積する。検出された地山は暗褐色砂質土層で、この面を掘り込む形で遺構が検出された。検出された遺構面の上層で淡暗褐色土層が検出されており、この層が遺構の基本的な埋土になるものと思われる。検出された遺構は溝1条、土坑1基、ピット、自然流路である。以下それぞれについて説明を加える。

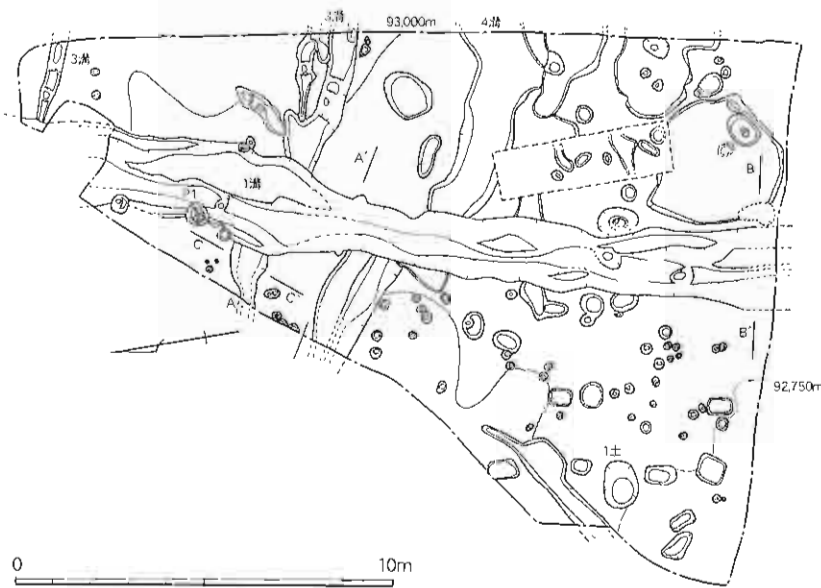
1) 溝

4条の溝が検出されたが、1号溝以外は調査区の傾斜にほぼ沿ってすべて東西に流れていること、掘方も浅くしっかりしていないこと、3号溝のように埋土中に多くの砂粒、礫が含まれること等からすべて自然流路と判断した。

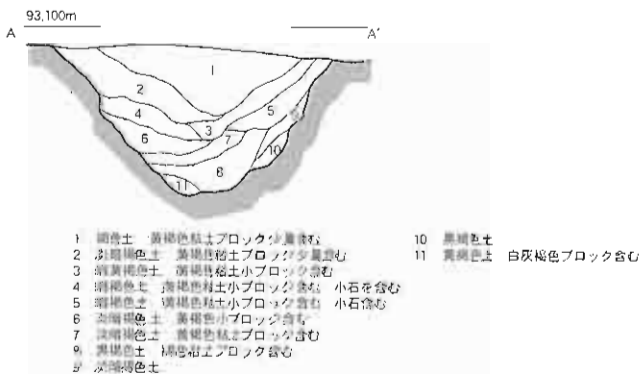
1号溝 (第38、39図、図版18)

調査区を南北に横断する溝である。B区の5号溝とつながる。2~3号溝を切っており、ピット

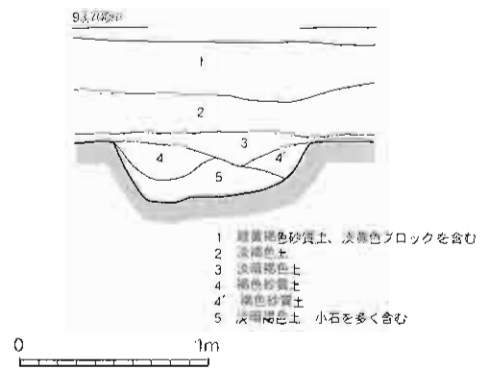
1に切られる。調査区内での長さは約23m、幅約2.4m、深さ約0.8mを測る。断面形は底面がやや平らになるものの、北側でV



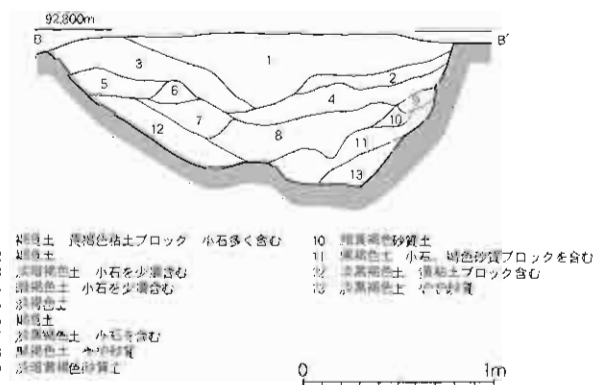
第38図 C区遺構配置図 (1/200)



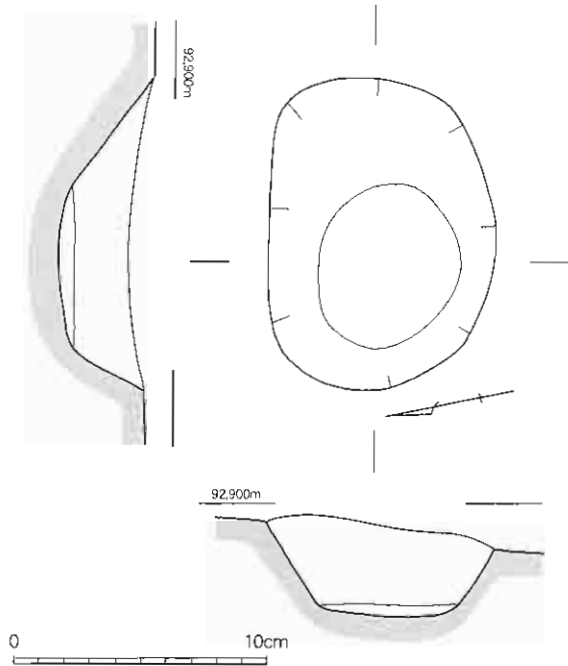
第39図 1号溝土層断面図 (1/40)



第40図 3号溝土層断面図 (1/40)



字状、南側でU字状を呈する。しかし、底に堆積する土層に黄褐色土、灰褐色ブロックが混じるものが多いことから、本来の溝の形状が崩落により損なわれたものと考えられる。出土遺物及び、溝を切るピットからの出土遺物から古代に属するものと考えられる。



第41図 1号土坑実測図 (1/30)

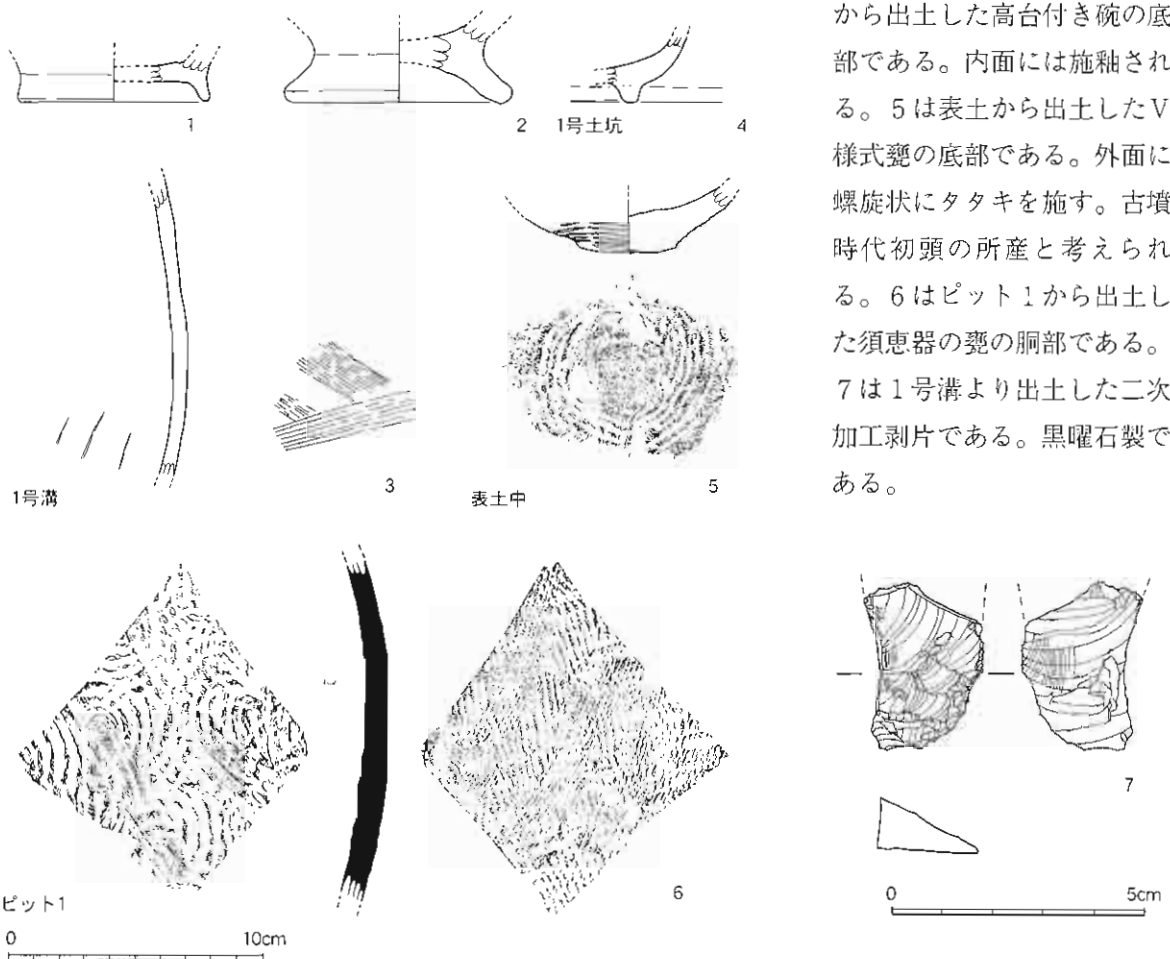
2) 土坑

1号土坑 (第41図)

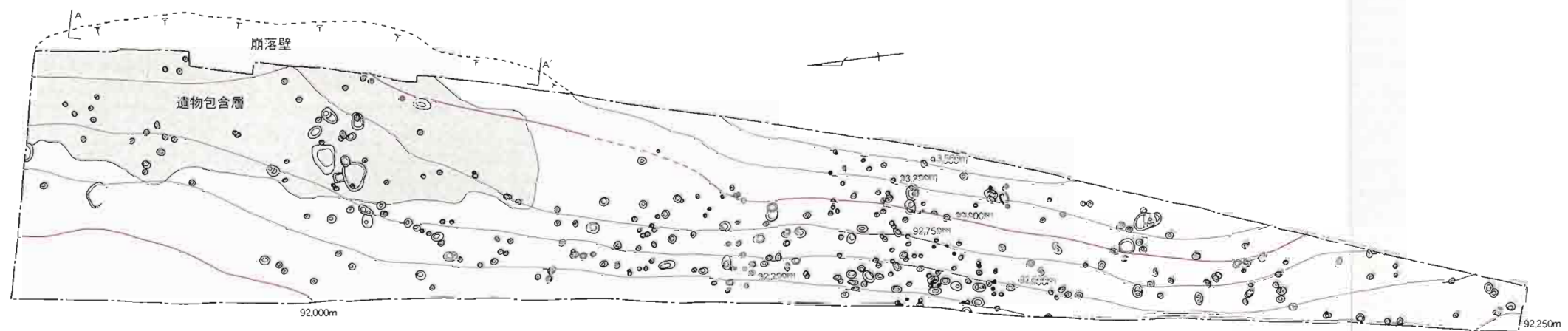
調査区南西で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、その規模は長軸1.2m、短軸0.9m、深さ36cmを測る。床面は中央付近がややレンズ状に下がる。出土遺物には碗の底部がある。

出土遺物 (第42図)

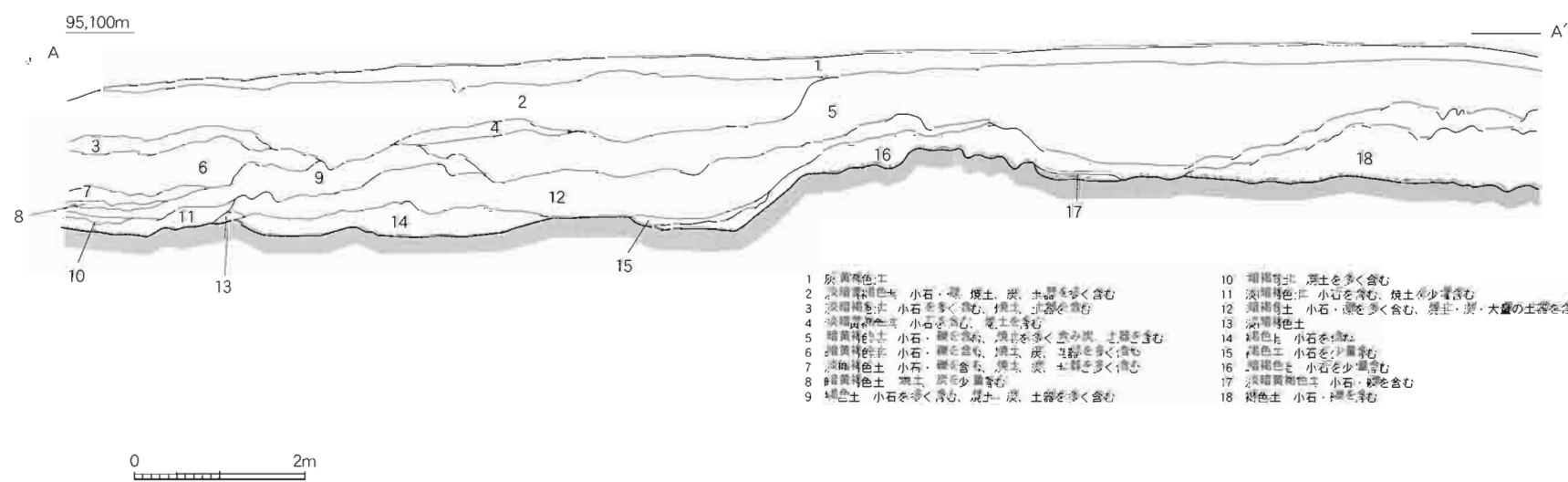
1～3は1号溝から出土した。1は土師器高台付き坏の底部である。2は弥生土器の底部である。上げ底である。3は甕の胴部である。外面ハケ調整。2、3は流れ込みと考えられる。4は1号土坑から出土した高台付き碗の底部である。内面には施釉される。5は表土から出土したV様式甕の底部である。外面に螺旋状にタタキを施す。古墳時代初頭の所産と考えられる。6はピット1から出土した須恵器の甕の胴部である。7は1号溝より出土した二次加工剥片である。黒曜石製である。



第42図 C区出土遺物実測図 (1/3、4は1/4、7は2/3)



第43図 D区遺構配置図 (1/200)



第44図 遺物包含層土層断面図① (1/80)

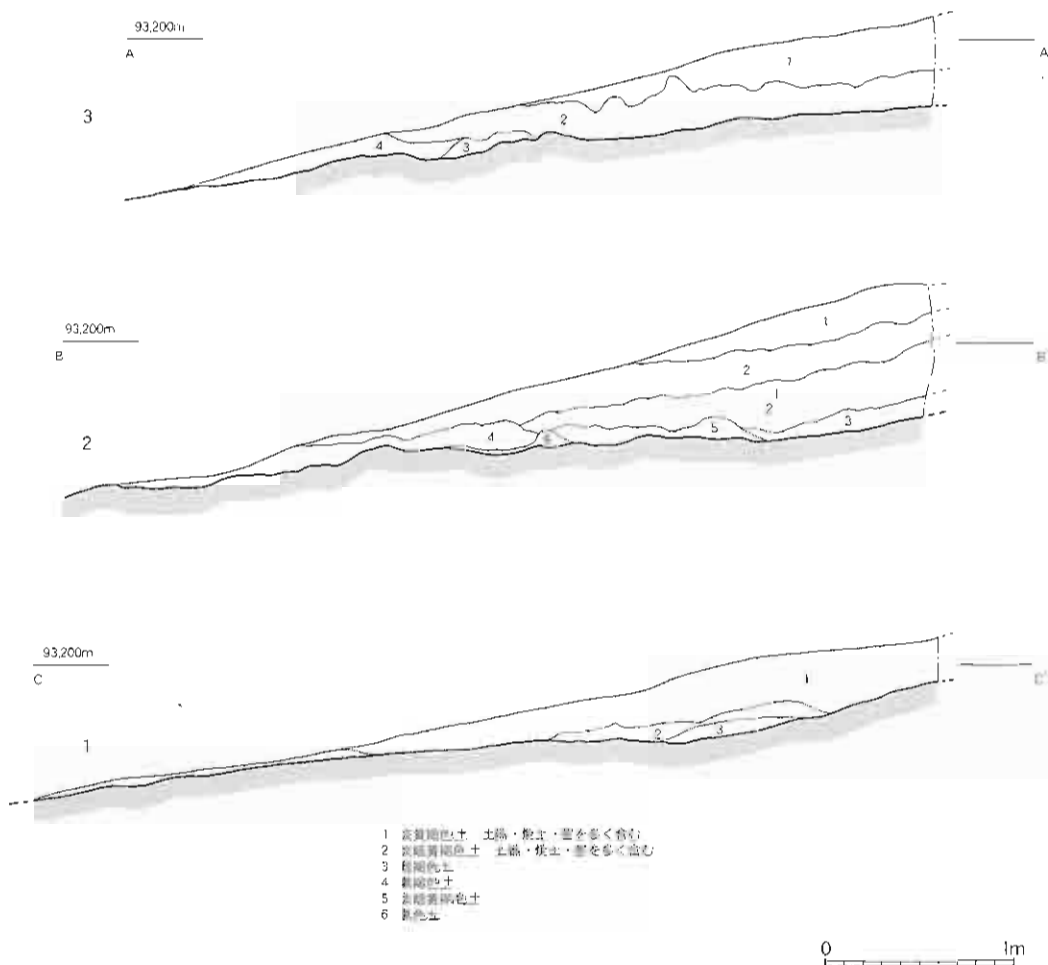
第4節 D区の調査

調査区内は標高92～93.5mの斜面に位置し、西側に向かって傾斜する。隣接する調査区の北側の土地は、宅地造成の際に削平を受けていたものと考えられる。

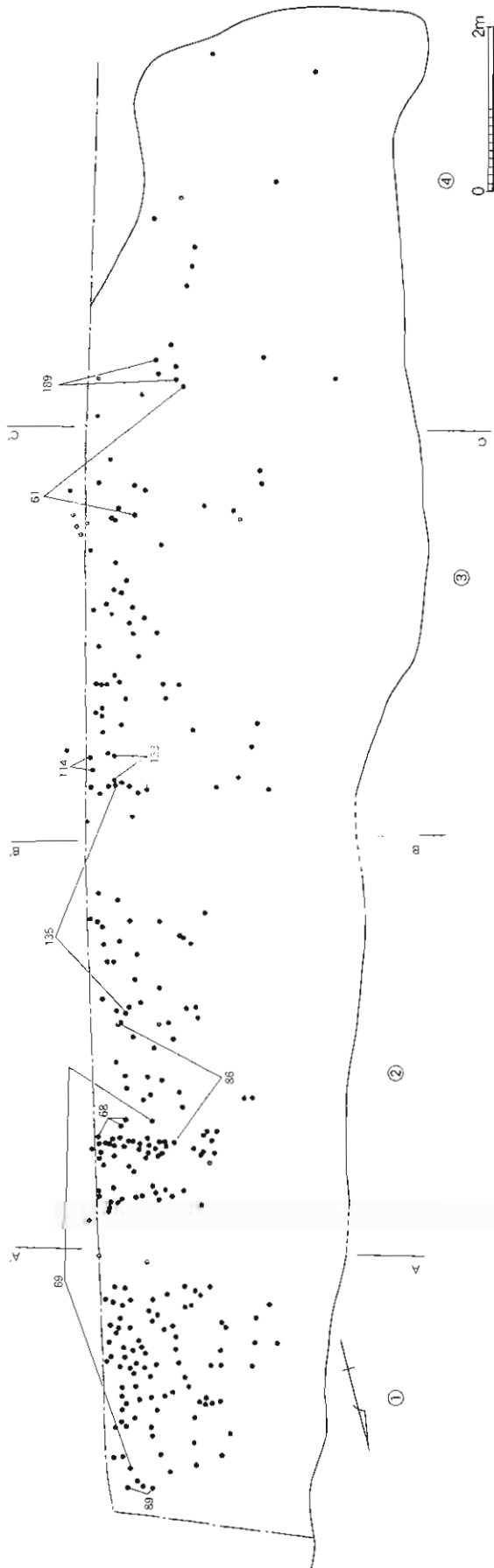
調査区は基本的に暗黄褐色土層（5層）と暗褐色土層（16層）、褐色土層（18層）が堆積し、調査区北側のやや傾斜が下がる場所において堆積がやや複雑化する。検出された地山は黄褐色土層で、地山上面に16、18層があり、これが基本的な遺構埋土になるものと考えられる。検出された遺構は遺物包含層とピット多数であるが、遺物を含むピットがないこと、深さ、間隔など、建物の柱等にならないことなどから、これらは木の根等にあたるのではないかと考えられる。以下、遺物包含層について説明を加える。

1) 遺物包含層（第44、45図、図版19、20）

調査区内の北側のやや傾斜が緩やかになる谷地に位置する。背後には斜面が広がっており、遺物包含層の調査区東端は急激に傾斜がつくことから、包含層は斜面の裾に位置する場所と考えられる。第44図は調査区東側の土層断面図である。北側がやや下がっていることから、この場所が緩やかな谷にあたるのが分かる。したがってこの遺物包含層は、谷地で、斜面の傾斜が緩やかになる場所に遺物が溜まっている層といえる。実際、遺物が多く見られるのは2～9層までで、それ以下の土層には遺物は殆ど含まれていない。このことから、10層以下に関しては旧表土にの可能性が考えら



第45図 遺物包含層土層断面実測図②（1/40）



※線は接合した遺物 Noは実測図に対応 ※黒ドットは1層出土 赤ドットは2層出土

第46図 包含層土器出土状況 (1/80)

れる。この16層等の暗褐色土層は調査区の西側にも見られるが、遺物は含まれなかった。第45図は遺物包含層の縦断土層である。3ヶ所ともほぼ同様の堆積を示しており、1、2層までが遺物を多く含むのに対し、それ以下は遺物を殆ど含んでいない。2層以上が遺物包含層にあたり、3層以下に関しては旧表土等にあたるのではないと思われる。

遺物出土状況 (第46図、図版20)

土層のトレンチによって①～④とグリットを分け、大きな破片に関してはポイントを押さえて層位ごとに取り上げを行った。また、調査中に東側の壁面が崩落し、大量の土器が出土した。しかし、調査区外へと広がり、調査中に崩落する危険性があることから、この部分の遺物は一括して崩落壁出土遺物として取り上げた。遺物の大半はこの崩落壁から出土した。遺物の出土状況は広範にわたり、包含層全面に見られた。特に1層からの出土が多い。ドットで示しているのが遺物の出土した場所であるが、特に東側に多いことが分かる。このことは斜面の裾に遺物が溜まっていったことを示していると考えられる。崩落壁からの遺物の出土が多いこともこのことを示していると言えよう。また、1層と2層の遺物が接合すること、2～3メートル離れた遺物が接合することなどから、この包含層の遺物が調査区外から流れ込んだ遺物であると考えられ、また、仮に流れ込みにしても一次堆積ではなく、二次的な堆積であると考えられる。

どのようにしてこの場所に遺物が堆積したのか現時点では推測の域を出ないが、調査区東側にある斜面中の平坦部、あるいは斜面頂上に古代の集落等が存在し、その廃棄遺物が斜面の崩落等により二次的に斜面裾に流れんで堆積したのではないかと考えられる。この点に関しては今後の調査への課題といえる。

出土遺物（第47～55図、図版21～29）

遺物包含層からは大量の遺物が出土した。ここではその中で比較的残りのよい破片、特徴的な遺物に絞って紹介する。

須恵器

蓋（1～48）

調整は内外ともに回転ナデが施される。口縁端部の形状をもとに分類し、以下説明を加える。

- I 1～5は口縁端部を、下方に折り曲げる。端部外面はやや内側に凹みをつける。1～3はツマミを持つ蓋で、4、5は不明である。
 - II 6～14、42～44は口縁端部が小さく下方に折り曲げ、端部の調整は丸みを帯び、口縁端部内面はやや凹みをつける。6～9はツマミを持ち、10～14は不明である。
 - III 15～21は口縁端部が三角形を呈し、端部の調整はあまい。口縁端部内面の凹みは明瞭ではなくなる。15～17はツマミを持ち、18～21は不明である。
 - IV 22～27、45、46は口縁部がほぼ真直に伸び、端部は丸みを帯びる。すべてツマミをもつ。
 - V 28～31は口縁端部の調整は丸みを帯びるものの、端部内面にやや窪みがあるなどの特徴からどのタイプに属するか不明なものである。
 - VI 32～35は器高が低く、扁平なものである。口縁部を小さく下方に折り曲げる。32、33はツマミを持つ。
 - VII 36～41は器高がかなり低く、扁平なものである。口縁部がほぼ真直に伸び、端部は丸みを帯びる。41以外はすべてツマミを持つ。
- 47、48は比較的口径の大きな蓋で、端部の調整はIIに近いと思われる。49は盤蓋と考えられる。

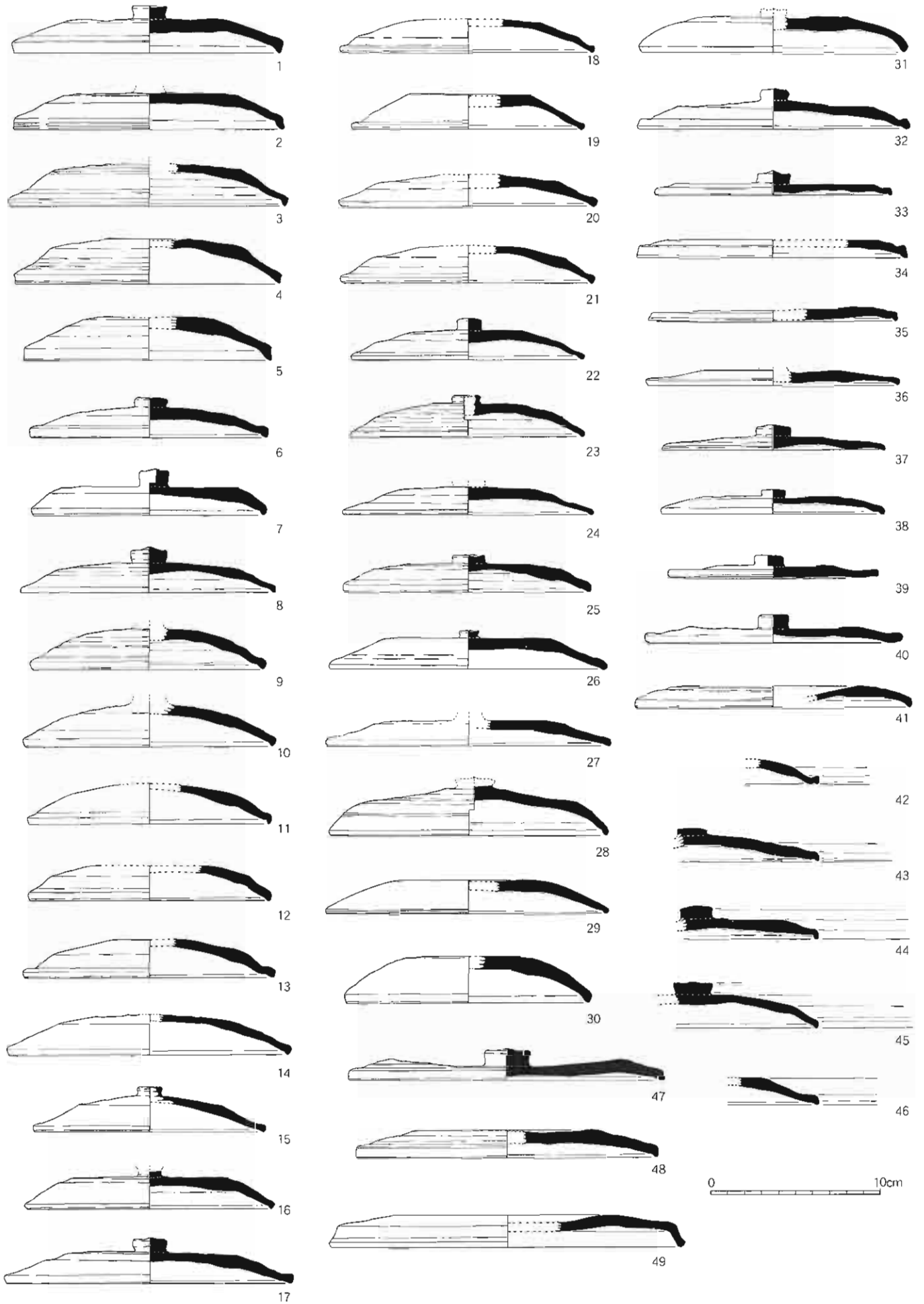
坏（50～103）

高台の付くものと付かないものに分けられる。50～90は高台付の坏で、91～103は付かないものである。調整は内外、回転ナデで、内底面調整ナデ、底面回転ヘラ切りである。99は底面未調整である。

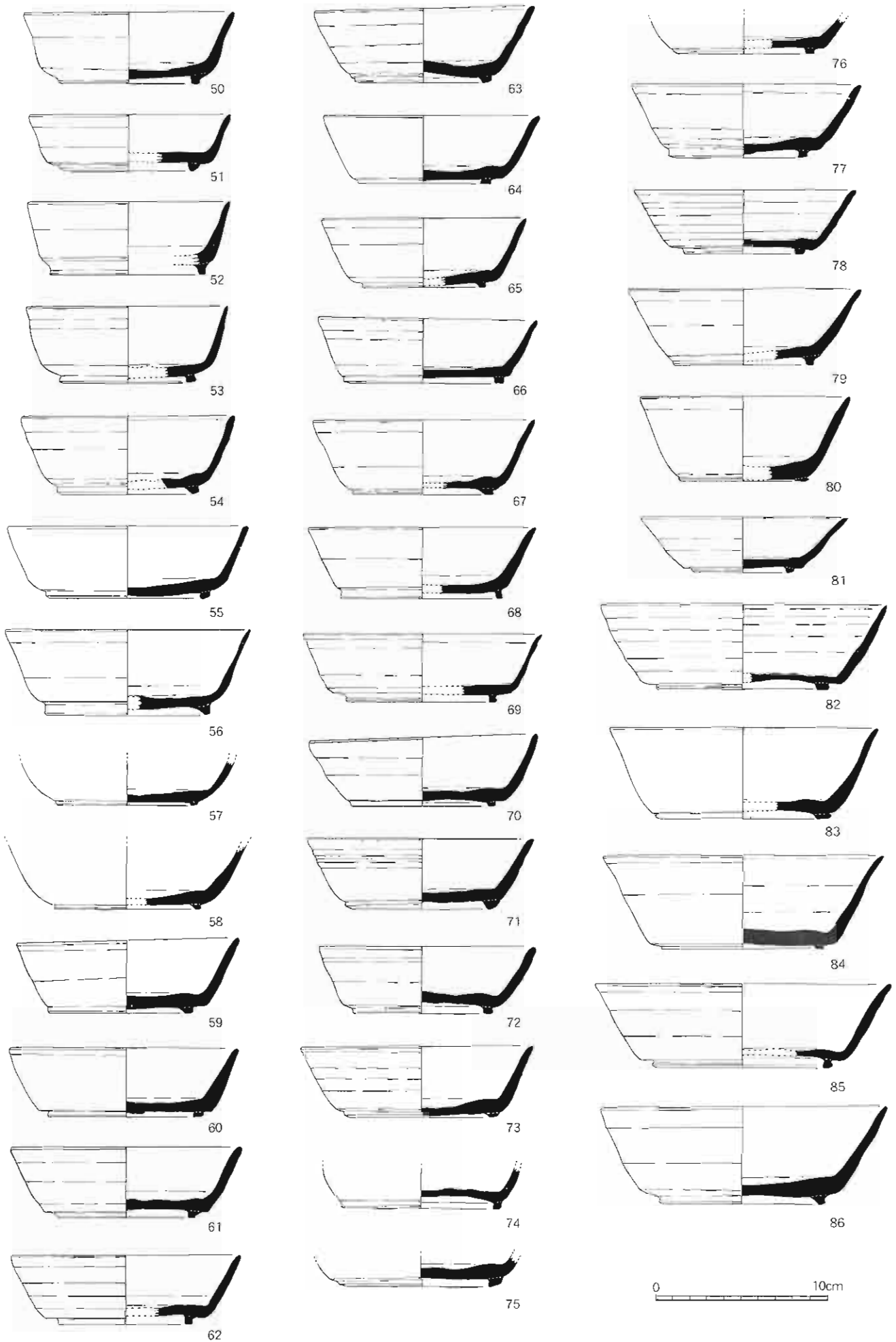
- I 50～53、90は高台の付く坏で口縁部が開かないで立ち上がるものである。底部の屈曲は明瞭である。50、51に関してはS字状に口縁部がやや屈曲する。
- II 54～75は高台の付く坏で口縁部がやや外に開くものである。底部の屈曲は明瞭である。56、66、67、69は口縁部がやや外に屈曲して開く。74、75は底部の破片であるが、このタイプに属するのではないかと思われる。
- III 76～81は高台の付く坏で外に大きく開くものである。79は口縁部がやや外に屈曲して開く。特に81は器高がかなり低く浅い。
82～89は口径の大きな高台付の坏である。口縁部の形態は、82～84はIIに近く、85～89はIIIに近い。
- IV 91～103は高台のつかない坏である。103は器高が口径に対して低く、口縁部が大きく外に開く。皿に近い印象を受ける。

皿（104～118）

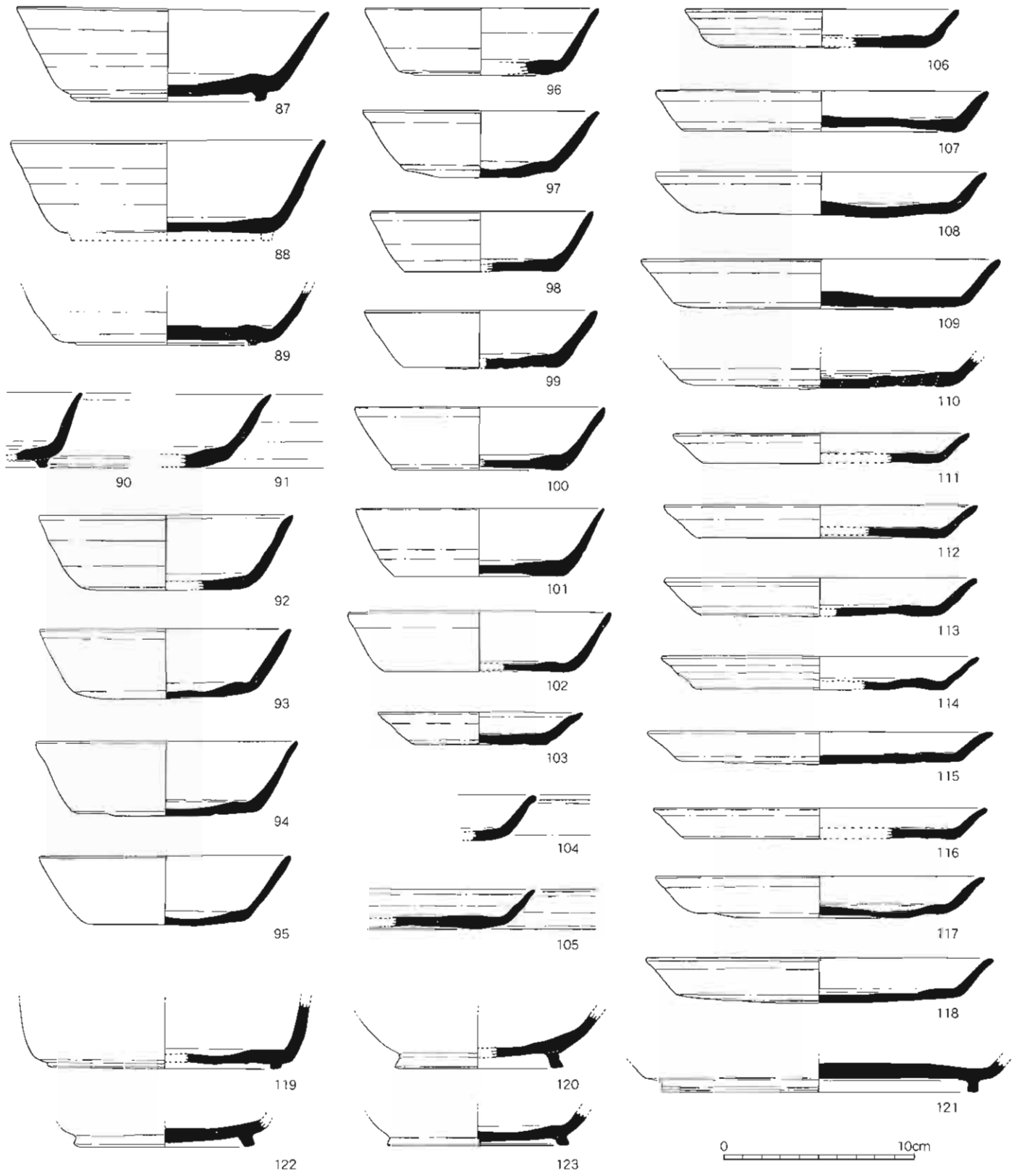
104～107は口縁部がやや立ち上がり、109から118はやや外に開く。調整は内外ともに回転ナデが施される。



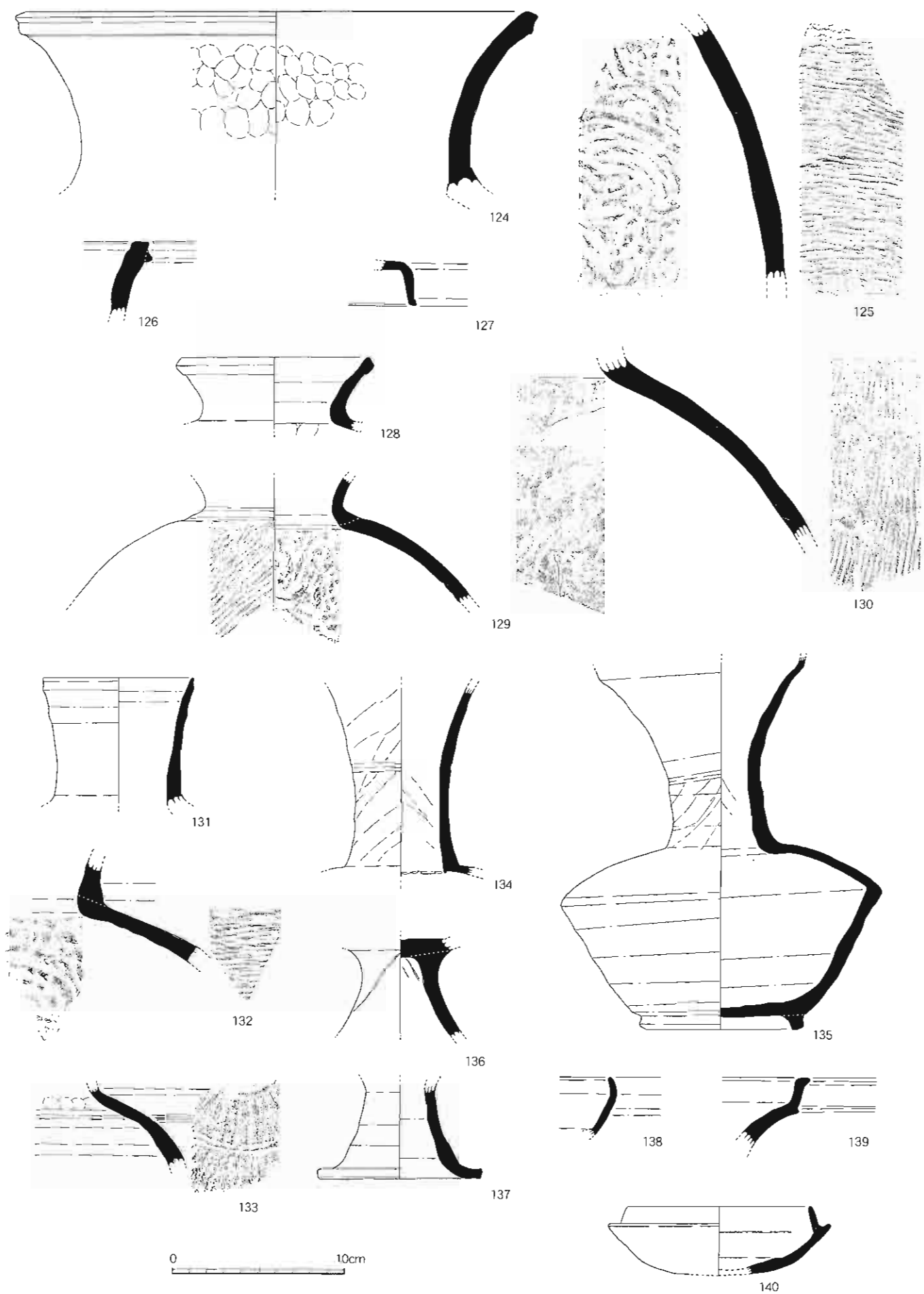
第47図 包含層出土土器実測図① (1/3)



第48図 包含層出土土器実測図② (1/3)



第49图 包含層出土土器実測図③ (1/3)



第 50 图 包含層出土土器実測図④ (1/3)

甕 (124~126)

124、126は甕の口縁で、口縁端部には突帯をつける。124には指頭圧痕が残る。125は甕の胴部破片である。外面平行タタキ、内面青海波状タタキである。

壺蓋 (127)

127は壺の蓋で、口縁部を極端に下方に屈曲させる。端部をやや外につまむ。

壺 (128~135)

128~133は短頸壺である。128は端部を肥厚させ、頸部には指頭圧痕が残る。131に関しては長頸壺の口縁、もしくは平瓶の口縁であろうか。133は頸部内面に指頭圧痕が残り、外面には刺突文が施される。134、135は長頸壺である。頸部にはしぼりが見られ、口縁部は外に開く。

高坏 (136~138)

136、137は脚部で、比較的短脚である。137は脚底部が外反し、端部は平坦になる。138は口縁部で、緩やかに内湾する。

その他 (119~123、139、140)

119~123は底部の破片であるが、119、120は壺の底部ではないかと思われる。122、123は器種不明であるが、坏の可能性が考えられる。

139は甕の口縁部、140はかえりを持つ坏である。これらに関しては古代よりやや時期が上ると考えられる。

土師器

蓋 (141~145)

141~143は口縁部にかけて一旦稜を持ち、やや外反する。端部はやや丸みを帯び端部内面には僅かな凹みをつける。141はつまみを持つ。144、145は器高の低い扁平な蓋で口縁端部は丸みを帯び、つくりは鈍い。

坏 (146~158)

全て高台は付かないものである。146~150、156~157は口縁部はやや外に開くものである。149は外面に指頭圧痕が残る。151~155、158は口縁部は外面に大きく開き、口径に対して底径が小さなものである。

皿 (159~167、170~174)

形態から2つのタイプに分類される。

I 159~167は底部の屈曲は明瞭ではなく、口縁部は立ち上がる。底部は平坦ではなく、やや丸みを帯びる。160、163、164は外面には指頭圧痕が残る。全体的にナデ調整が施される。

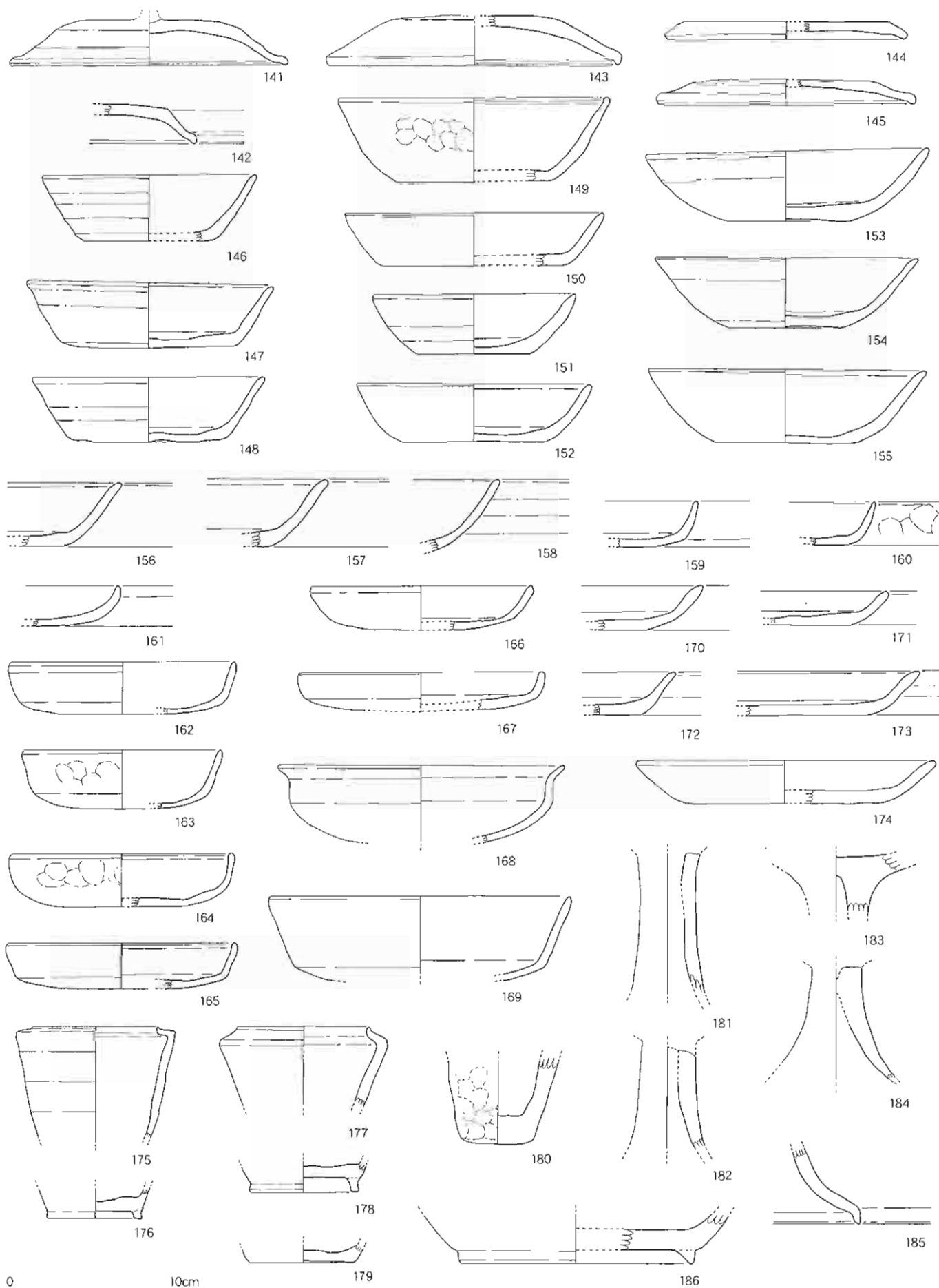
II 170~174は口縁部が外に大きく開くタイプの皿である。底部は平坦である。内外、回転ナデ調整。

鉢 (168、169)

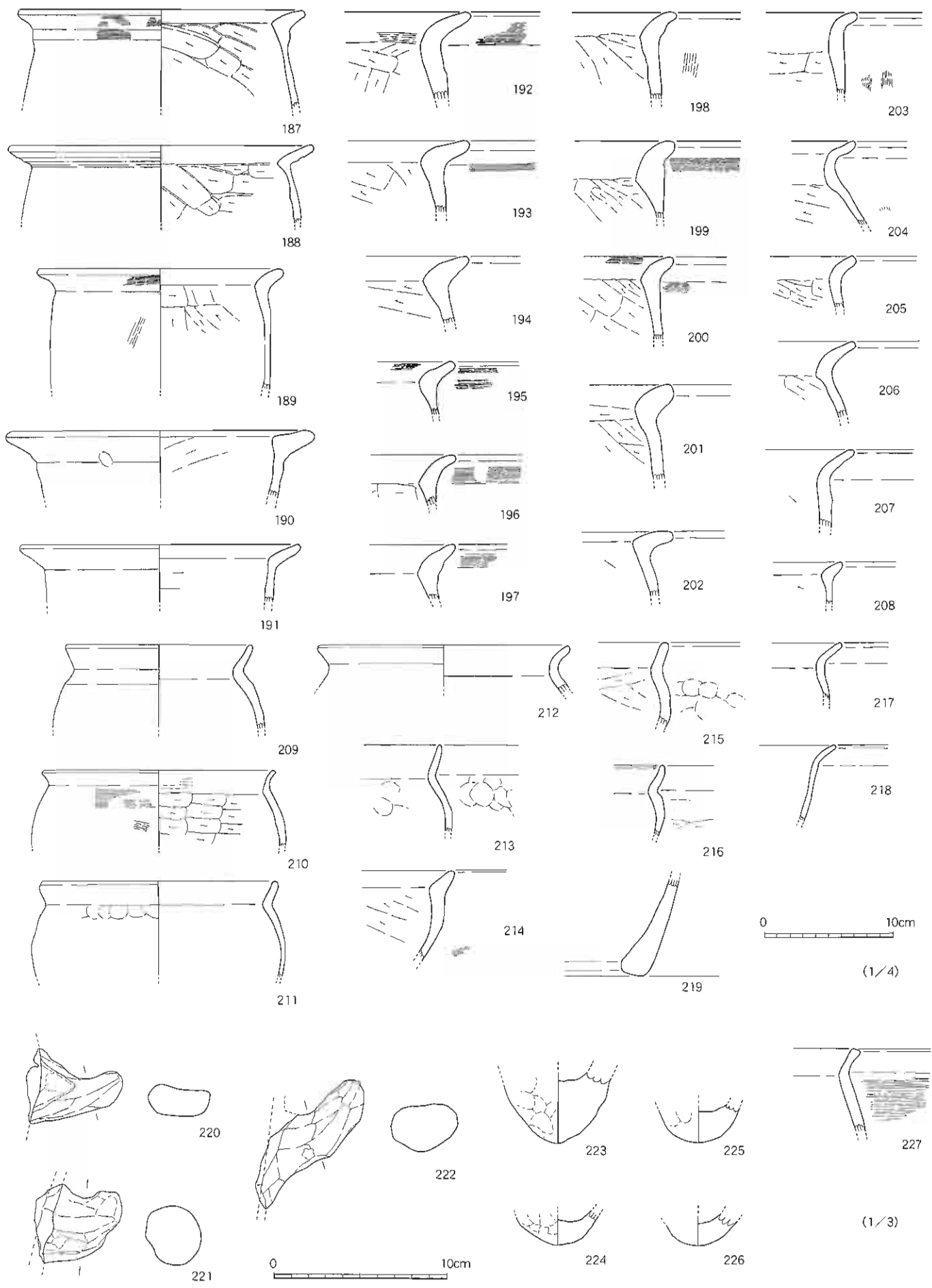
168は頸部を内湾させ、口縁部を外反させる。169は底部がやや丸みを帯び、口縁部は直線的に立ち上がる。

小壺 (175~179)

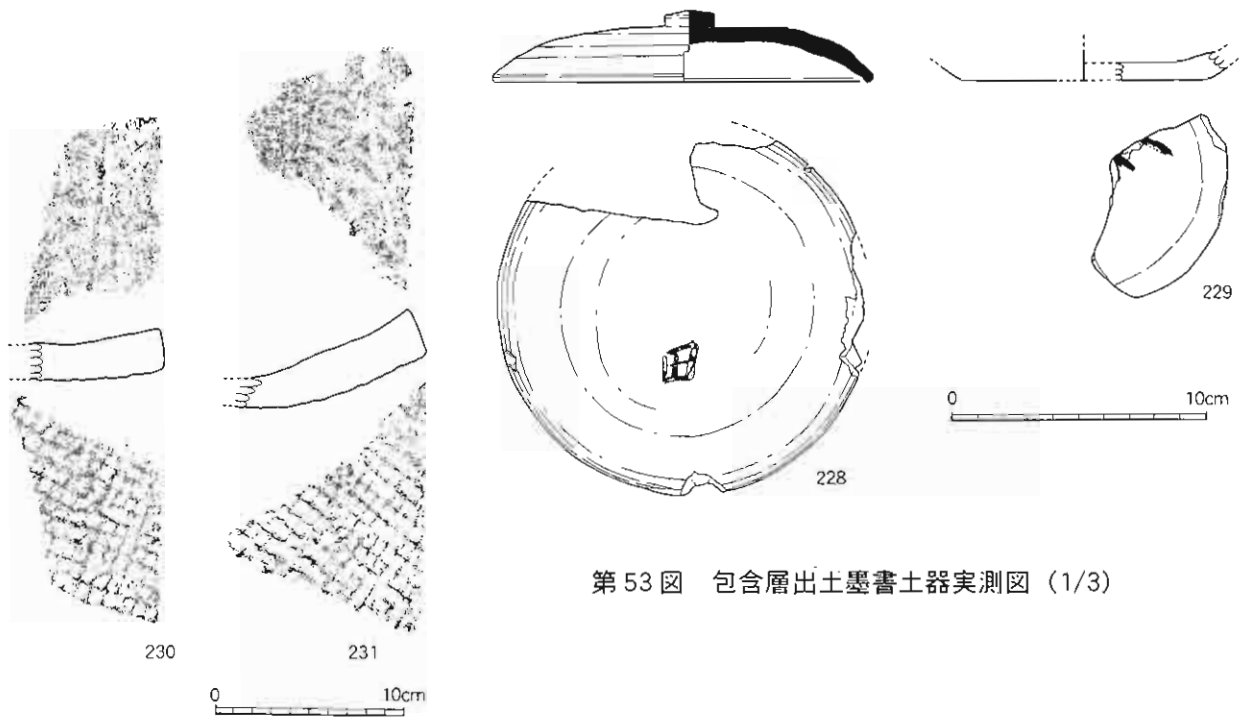
175、177は小壺の口縁部で、胴部はやや外に開き、頸部を一旦内側に屈曲させ、口縁端部を上方



第51图 包含層出土土器実測图⑤ (1/3)

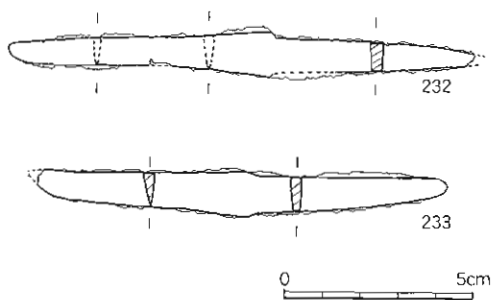


第52図 包含層出土土器実測図⑥ (1/4、1/3)



第53図 包含層出土墨書土器実測図(1/3)

第54図 包含層出土瓦実測図(1/4)



第55図 包含層出土鉄器実測図(1/2)

写真6 「田」墨書土器



につまみ上げる。176、178、179は小壺の底部で、176、178は高台を持ち、179は高台を持たない。176は175と同一個体である。

高坏(181~185)

181、182は脚部が筒状に長く延び、183、184は脚部が比較的短いものである。185は脚底部であるが、端部を下方につまみ下げる。

甕(187~213、215~217)

胴部が直線的に立ち上がるものと、張るものの2種類が見られる。

- 1 胴部が直線的に立ち上がるタイプの甕である。いずれも内面ケズリ、外面ハケ調整である。187~202は頸部内面にケズり出しの稜を持って屈曲し、頸部は肥厚し、口縁端部にかけてやや外反する。端部は丸みを帯びる。口縁部外面には横方向のハケが施される。203は口縁部を若干外反させる。187~202のタイプの甕の一種と思われる。204は頸部で2段に稜を持つ甕で、口縁部はやや上方に内湾する。205は187~202の甕と類似するが、頸部に明瞭な稜を持たず、肥厚し

ない。206、207は頸部に稜を持つが、口縁部が比較的長く延びながら外反する。208は小型の甕の口縁部で、形態は大型の甕に類似する。

II 頸部から胴部丸みを帯びながら屈曲し、胴部が張る甕である。頸部に稜を持ち、口縁部は外反する。器高はIに比べてあまり高くはならないようである。213、215～217はこのタイプの器形の小型のものであると考えられる。213、215には外面に指頭圧痕が残る。

壺 (186)

186は壺の底部で、高台が付く。器壁は厚く、底部から若干外に開く。

鉢 (214、218)

214は内面がケズリの小型の鉢で、口縁部はやや肥厚して外反する。218は器壁がかなり薄く、口縁部は外反する。

甌 (219)

甌の底部である。底端部はやや肥厚する。

把手 (220～222)

甕の把手で、全てケズリ調整。上方にやや内湾する。220はやや扁平で、221は丸い。

手捏ね土器 (180、223～226)

180は手捏ねの小壺形土器で、底部は平坦に仕上げられる。223はやや尖底の鉢形土器の底部で外面には指頭圧痕が残る。224～226は丸底の鉢形土器で指頭圧痕が残る。

その他 (227)

甕の口縁部で、くの字に屈曲する。外面はハケ調整。弥生後期に属するのではないと思われる。

墨書土器 (228、229)

228は須恵器の坏蓋である。崩落壁からの出土である。つまみを持ち、口縁部はやや丸みを帯びて内面に僅かな凹みを持つ。口径は15cm、器高は2.9cmを測る。内面中心からややずれる位置に「田」の字が書かれている。墨書は2cmほどの大きさで、墨はやや薄い。229は何らかの墨書が書かれたと考えられる土師器坏の底部破片である。ただし、墨と考えられる痕跡がやや明瞭過ぎる点、字が不明であることなど、墨書と断定するには、やや根拠に欠ける。

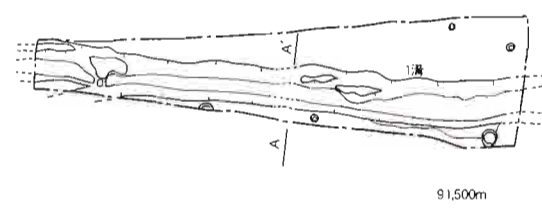
瓦 (230、231)

平瓦の破片で、焼きはやや不良である。凸面には正格子目タタキを斜位に施し、凹面には布目をナデ消している。側面はヘラケズリのちナデである。

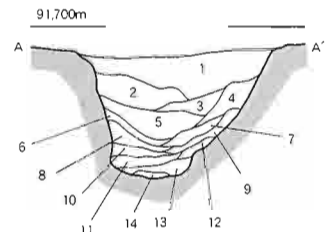
鉄器 (232、233)

刀子である。232は残存長12.2cm、刃部幅0.7cm、柄部幅0.9cm、刃部厚さ約0.2cm、基部厚さ約0.3cmを測る。233は残存長10.8cm、刃部幅0.9cm、柄部幅0.9cm、刃部厚さ約0.3cm、基部厚さ約0.3cmを測る。

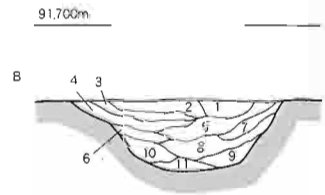
これら包含層出土の遺物は時期的にはほとんどが古代に属するものである。一部、弥生、古墳の遺物も見られるが、ほとんどが8世紀代の範疇に収まるものと考えられる。



91,500m



91,700m



91,700m

- 1 褐色土 黄褐色土ブロック少量含む、小石を多く含む
- 2 淡褐色土
- 3 褐色土 黄褐色粘土ブロック含む
- 4 暗褐色土 黄褐色粘土ブロックやや多く含む
- 5 淡暗褐色砂質土 黄褐色粘土小ブロック含む
- 6 黒褐色土
- 7 黒褐色土 黄褐色粘土小ブロック含む
- 8 淡黒褐色土 黄褐色粘土小ブロック含む
- 9 黒褐色土 黄褐色粘土小ブロック含む

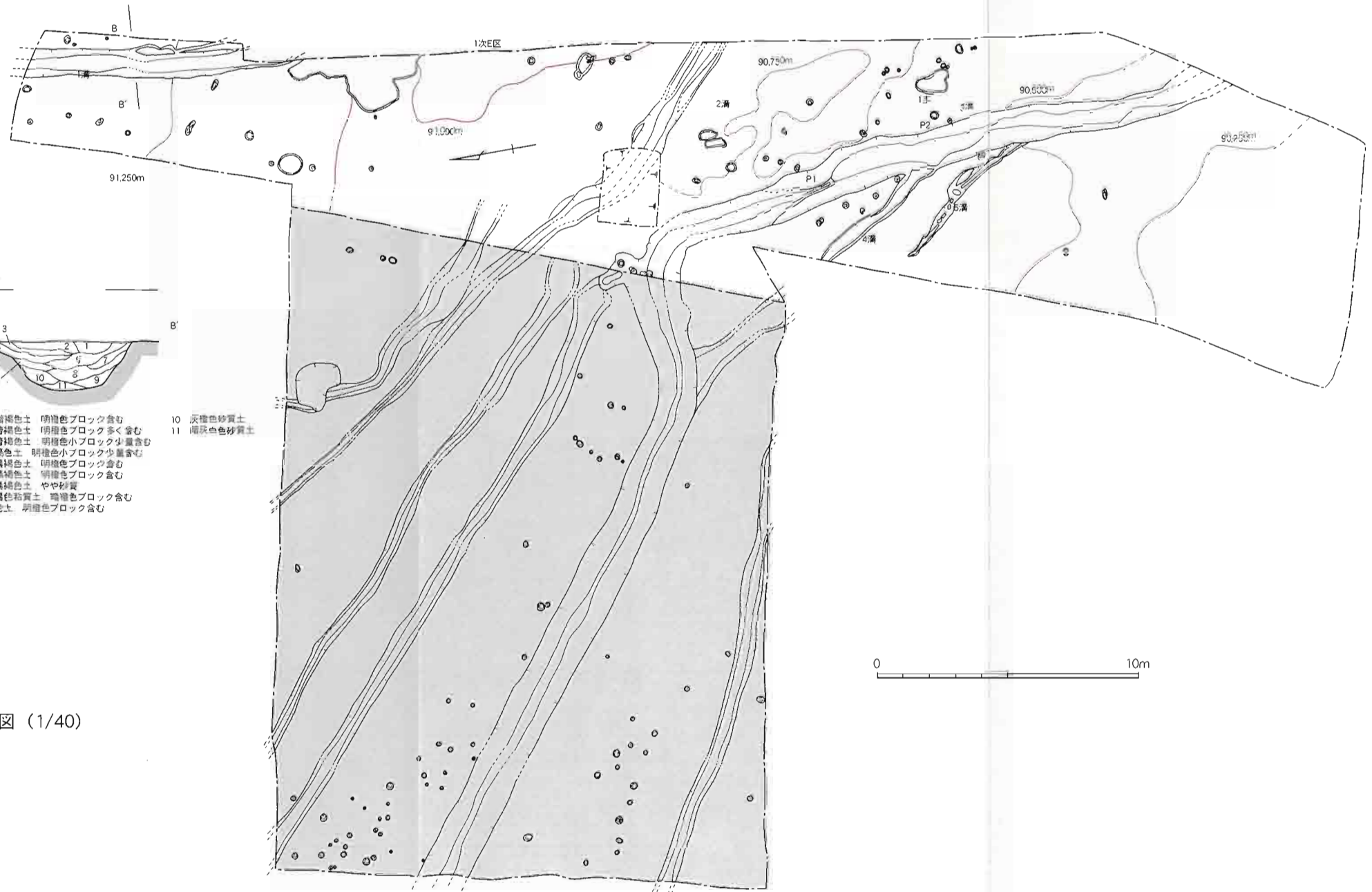
- 10 暗褐色土 黄褐色粘土小ブロック含む
- 11 淡暗褐色土
- 12 灰白色砂質土
- 13 濃褐色土、灰白色砂質土混
- 14 灰白色砂質土

- 1 淡暗褐色土 暗褐色ブロック含む
- 2 淡暗褐色土 明褐色ブロック多く含む
- 3 淡暗褐色土 明褐色小ブロック少量含む
- 4 黒褐色土 明褐色小ブロック少量含む
- 5 淡黒褐色土 明褐色ブロック含む
- 6 淡黒褐色土 明褐色ブロック含む
- 7 淡黒褐色土 やや砂質
- 8 黒褐色砂質土 暗褐色ブロック含む
- 9 黒色土 明褐色ブロック含む

- 10 灰褐色砂質土
- 11 暗褐色砂質土



第57図 1号溝土層断面図実測図 (1/40)



2次調査区



第56図 E区遺構配置図 (1/200)

第5節 E区の調査

調査区は水田用水路等の問題から、北側と南側に分けて調査を行った。西側には隣接して大分県教育委員会が調査した大波羅遺跡2次調査区がある。調査区内は標高91.5～90.25mの沖積地に位置し、南西側に向かって緩やかに傾斜する。調査区周辺は中世以降水田として利用されていたと考えられ、灰橙色土、灰褐色土が堆積する。検出された地山は淡黄灰色砂質土（8層）であり、この上面に暗灰色土、場所によっては暗褐色土が堆積することから、これが遺構の基本的な埋土になるものと考えられる。

検出された遺構は溝5条、土坑1基、ピット多数である。以下それぞれに説明を加える。

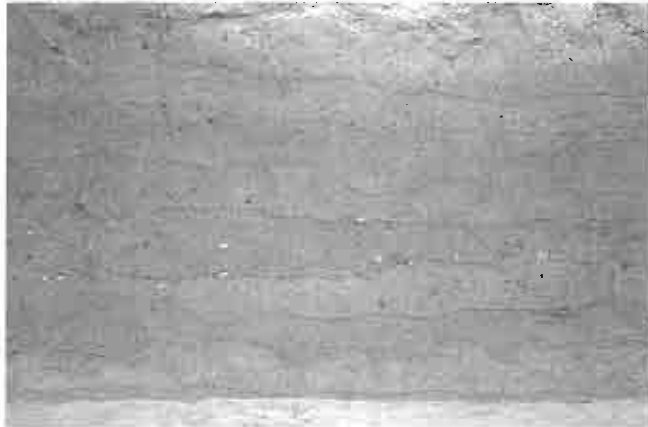
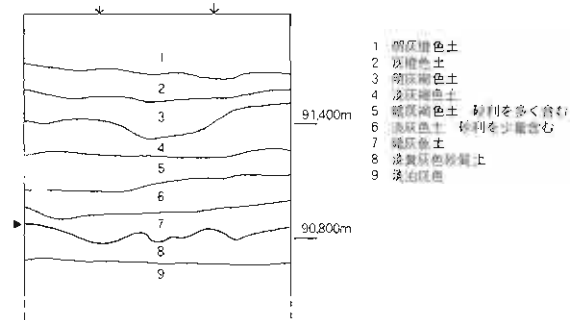


写真7 基本土層



第58図 E区基本土層図(1/40)

1) 溝

北側調査区、南側調査区にまたがって、5条の溝が検出された、1号溝は出土遺物から古代に属し、2～5号溝は弥生時代に属すると考えられる。

1号溝（第56、57図、図版31）

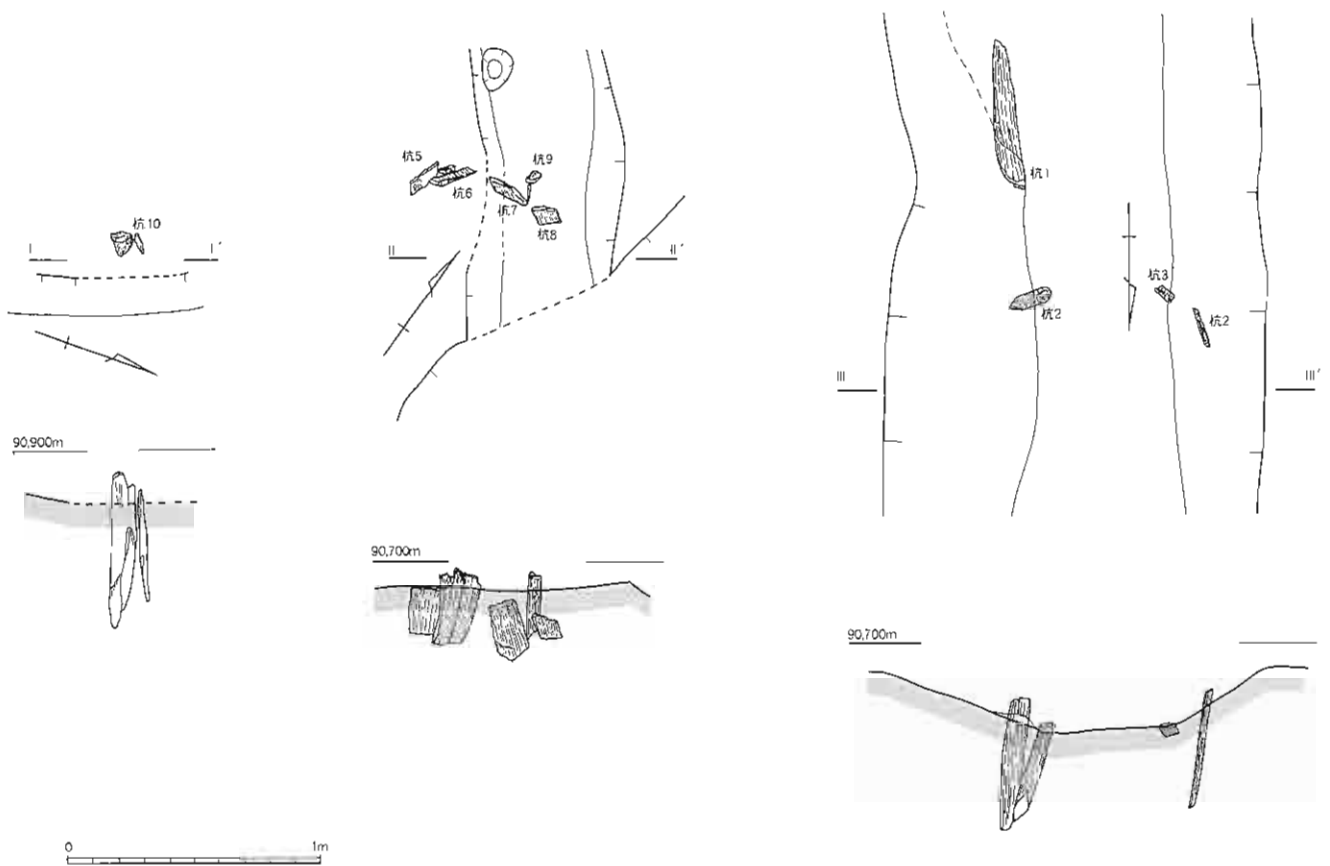
北側調査区、南側調査区北側にまたがり、南北に延びる溝である。南側調査区では東側斜面に向かって延びている。遺跡内での長さは約26m、幅約1m、深さ0.7～0.4mを測る。北側に向かって傾斜している。断面形態は北側で逆台形状、南側で浅いU字状を呈する。埋土中には壁の崩落の痕跡を示す、黄褐色ブロックが混じる土層が堆積することから、本来の形状は崩落により失われているものと考えられる。第65図1の蓋から古代に属するものと考えられる。

2号溝（第59、60、61図、図版31、35）

調査区を南東から北西に横断する溝で、2次調査区へと延びる。調査区内での長さは約10.6m、幅約1.1m、深さ約0.3mを測る。断面形は浅いU字状を呈する。溝内からは流木が検出され、調査区の西側からは杭が検出された。杭は溝の南西側にのみ見られ、長さ約60cm、45cmの杭が2本設置されていた。溝からの出土遺物はないが、埋土や杭を持つ状況などから、3号溝と同時期のものではないかと推測される。

3号溝（第59、60、62図、図版32、35）

調査区を南北に横断する溝で、調査区際で西へと急激に方向を変えて2次調査区へと延びる。調



第59図 杭出土状況実測図 (1/30)

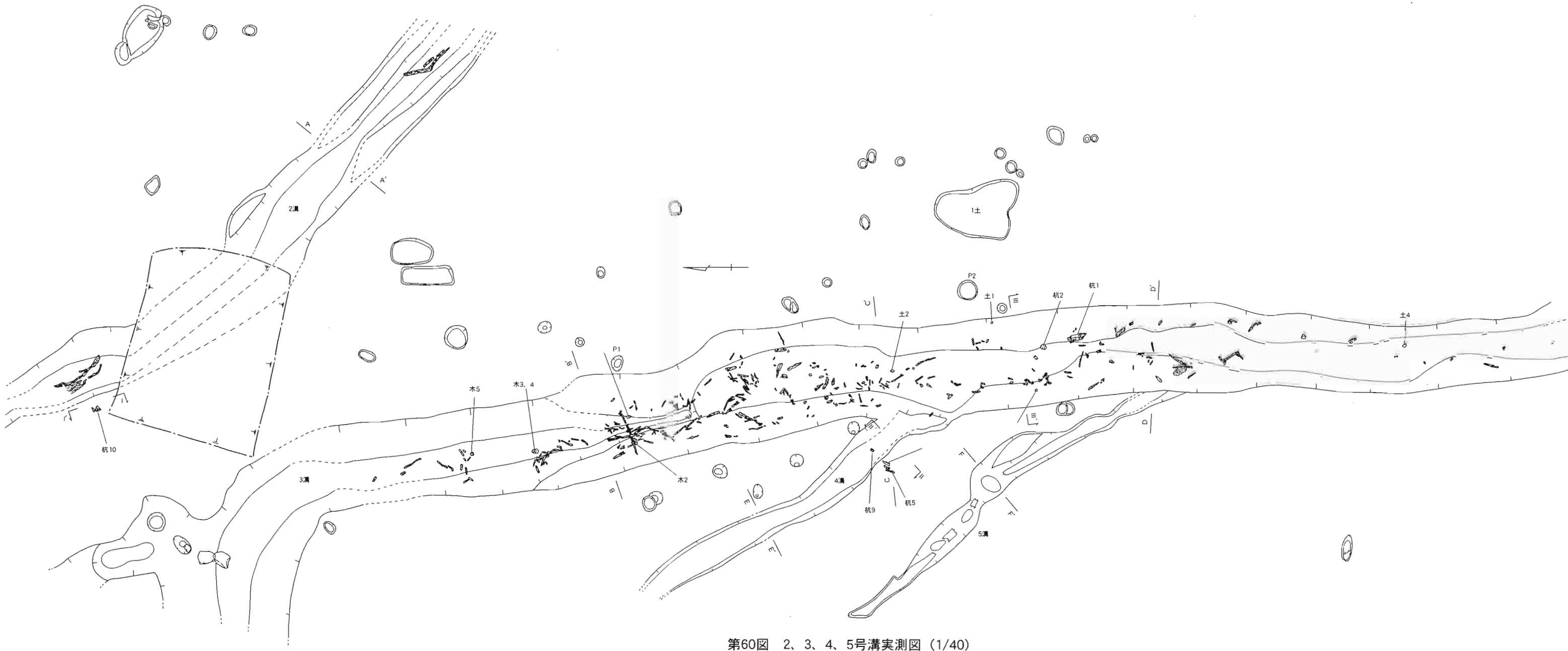
査区内での長さは約23m、幅約1～1.8m、深さ約0.2～0.5mを測る。北側へと向かって傾斜している。溝中ほどには両側に杭が設置されていた。それぞれ2本ずつを両側に配置し、東側には比較的大きな杭を2本、西側には細長い杭を1本、短い杭を1本配置する。何らかの構造物の痕跡と思われるが、現状ではその用途は不明である。溝からは大量の流木、それらに混じって加工木、木の実、土器等が出土した。出土した土器は縄文土器、弥生土器が見られるが、縄文土器は溝に伴うものではなく、流れ込みではないかと考えられる。

4号溝 (第59、60、62図、図版33、35)

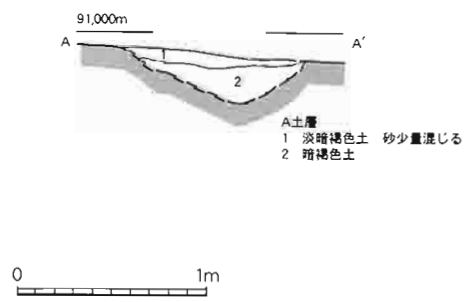
調査区内を南東から北西に流れる溝で、2次調査区へと延びる。土層Cを見る限りでは3号溝を切っているが、検出面での切り合い関係が明瞭ではなかったことから、3号溝を切るもしくは、3号溝から派生する溝であると考えられる。調査区内での長さは約5m、幅約0.5m、深さ約10cmを測る。西側に向かって傾斜している。3号溝との接合部分の南西側に杭が検出された。板状の短い杭を6枚ほど重ねて溝に垂直に設置しており、水利関係の施設が存在が想定される。溝内から遺物の出土はない。

5号溝 (第59、60、62図、図版33)

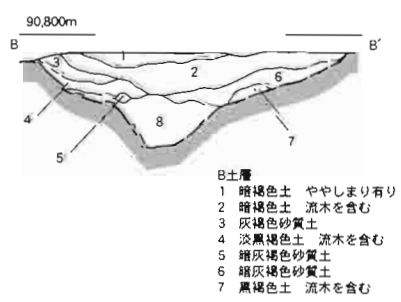
調査区を南東から北西に流れる溝で、2次調査区へと延びる。土層Dから3号溝に切られる溝とおもわれるが、4号溝同様、3号溝から派生する溝の可能性も考えられる。調査区内での長さ約6.5



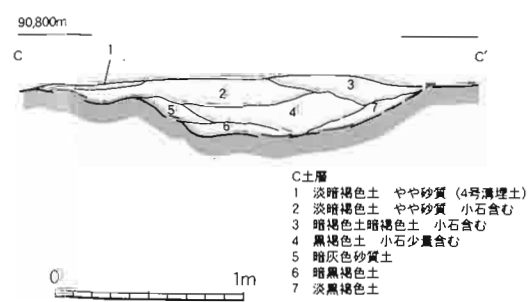
第60图 2、3、4、5号溝実測図 (1/40)



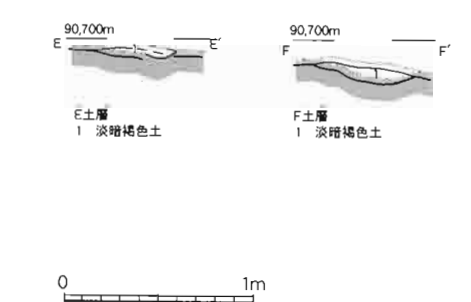
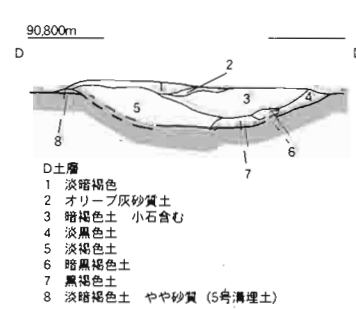
第61图 2号溝土層断面図 (1/40)



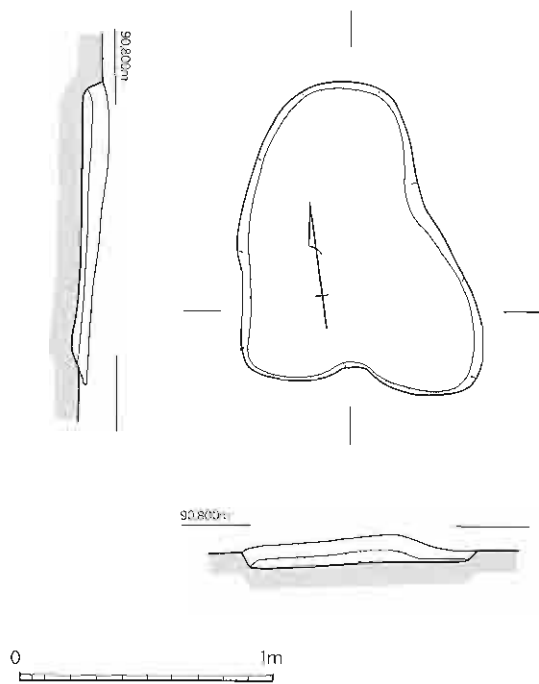
第62图 3号溝土層断面図 (1/40)



第62图 3号溝土層断面図 (1/40)



第63图 4、5号溝土層断面図 (1/40)



第64図 1号土坑実測図 (1/30)

m、幅約0.6m、深さ約9cmを測る。溝内から出土の遺物はない。

2) 土坑

1号土坑 (第64図、図版33)

3号溝に隣接する不定形の土坑である。長軸121cm、短軸97cm、深さ約9cmを測る。不定形であり、掘方もなだらかであることから、落ち込みの可能性も考えられる。出土遺物から弥生時代に属すると考えられる。

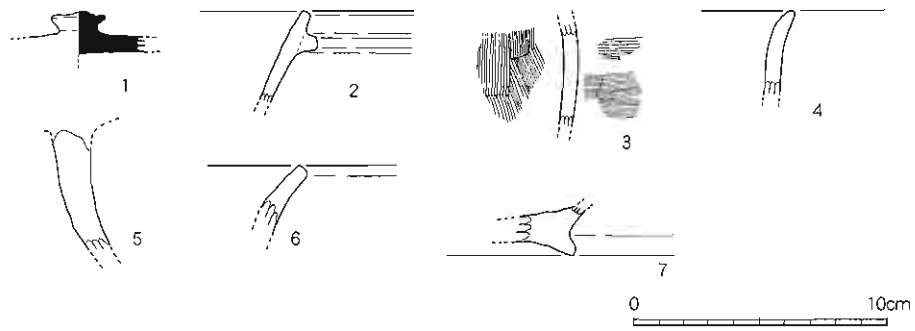
出土遺物 (第65図、図版34)

1は3号溝から出土した須恵器の坏蓋の破片である。ツマミを持つ。2、3は3号溝から出土した。2は甕の口縁部である。口縁下部に突帯を有する。突帯は逆台形状を呈する。突帯文期に属するものか。3は内外にハケを有する甕の胴部破片である。4、5は1号土坑から出土した。4は深鉢の口縁部で、やや外反する。5

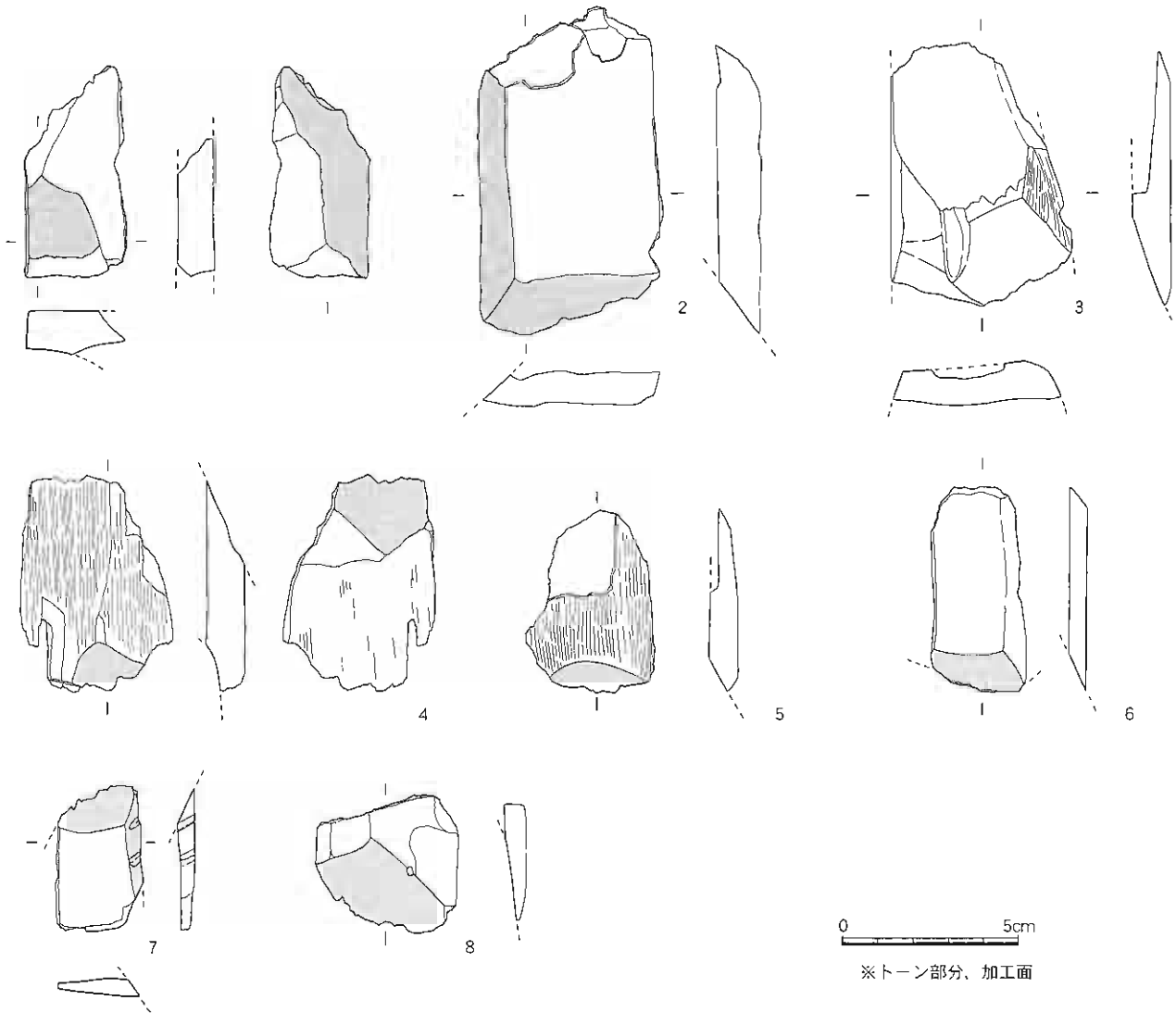
は高杯の脚部でやや外側に開く。6はピット2から出土した甕の口縁部である。端部はやや平坦になる。7はピット1から出土した甕の底部である。やや上げ底を呈し、外に張り出す。突帯文期に属するものか。

出土木器 (第66図、図版34)

全て3号溝からの出土である。1は内外面ともに加工痕が見られ、端部は面取りがなされる。厚さは1.1cmを測り、端部からやや屈曲する。用途は不明であるが、木製の鉢の口縁部の可能性も考えられる。2～8は加工木である。2、3、5、6、8は端部を面取りした跡が見られる。杭のようなものか。4は両端を加工しており、下部の面は抉られたようになる。建築部材の一種であろうか。7は加工された側面に紐で縛られたような痕跡が見られる。



第65図 E区出土土器実測図(1/3)



第66図 3号溝出土木器実測図(1/2)

第3章 まとめ

調査では主に、弥生時代から古代の遺構が検出された。以下、時代ごとにまとめることにするが、各区で個別に遺構番号を振り分けているため、これらの遺構番号の統一を図り、また、各調査区間の遺構のつながりについて触れた上で各時代の説明を加える。

大波羅遺跡の遺構番号および調査区間の遺構のつながりについて（第67図、表1）

大波羅遺跡では主に弥生時代の溝、古墳時代の溝、古代の建物、竪穴状遺構、土坑、包含層、ピットが検出された。各区毎にそれぞれ独立した遺構番号を設定しており、番号が重複している。そこで、今後の調査において混乱が生じないために、大波羅遺跡での遺構番号の統一を図ることにする。各区で検出された流路、不整形の土坑等の遺構として紹介していないものに関しては番号の変更は行わず、各区で遺構として紹介した掘立柱建物、土坑、溝を中心に番号の変更を行う。番号の統一は表1にまとめる。

各区間での遺構のつながりは、特にB区、C区間で見られる。13号溝はB区5号溝、C区1号溝がつながるものである。南西方向に向かって流れており、調査当初18号溝（E区1号溝）につながる溝ではないかと考えられたが、18号溝が南北方向に流れていることから、別の溝と判断した。16号溝はC区2号溝とつながる可能性も考えられたが、C区2号溝はやや埋土に砂粒が含まれること、溝の方向がやや16号溝と異なることから別の溝と判断した。また、17号溝はB区1号溝、C区3号溝がつながるものである。土層より流路と判断した。

掘立柱建物は2棟検出されたが、その他にも等間隔に並ぶ柱穴が幾つか見られた。B区中央に位置するピット群が等間隔に並ぶが、これについてはいくつか柱が欠けることから、掘立柱建物として扱っていない。B区南端、C区北端にも直線的に並ぶ柱穴がいくつか見られる。両調査区間にまたがる場所に建物群が存在する可能性が窺える。

遺構の時期について（第68図）

主に弥生時代から古代の遺構について時代別に説明を加える。また、出土遺物からは縄文時代の遺物が見られ、主に後期後半から晩期の遺物が多く見られる。これらは全て溝などへの流れ込みと判断した。周辺には縄文時代晩期の包含層が確認された赤迫遺跡⁽¹⁾があり、遺跡周辺に縄文時代の集落の存在が想定される。

弥生時代

2号溝と19～22号溝、11号土坑が弥生時代の遺構である。2号溝からは後期の遺物が出土していることから、後期に比定され11号土坑からは高坏片が出土している。19～22号溝は破片資料が多いため時期比定が困難であるが、弥生土器と考えられる土器が出土している。また、19、20、21号溝からは杭が検出された。何らかの水利施設の存在が窺え、遺跡の立地が沖積地であることから水田施設等の存在も考えられる。現在日田市内での水田遺跡の調査例は見られないが、2次調査の際に20号溝からプラントオパールが検出されていることからその可能性は充分考慮される必要がある。今後の調査の課題と言えよう。

古墳時代

1、3、4号溝、及びピットが古墳時代の遺構である。古墳時代中期の遺構が殆どであり、遺跡の北側に集中していることから、北側周辺への展開が考えられる。周辺には古墳時代後期の溝から木器類が出土した赤迫遺跡⁽²⁾がある。また表土中からの出土であるが、C区から古墳時代前期の甕の底部片も出土しており、この地に古墳時代前期～中期の集落の存在が窺える。

古代

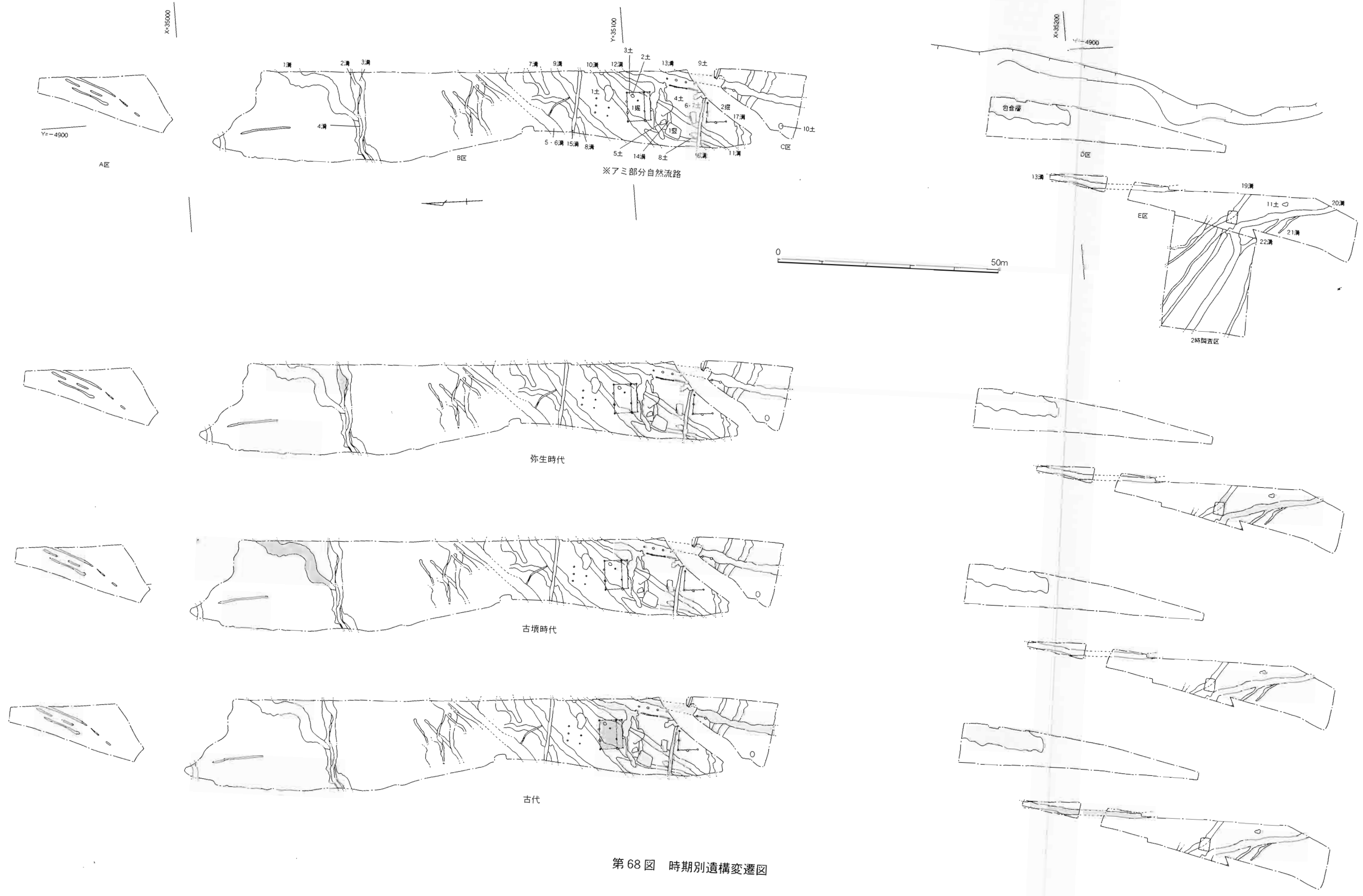
古代の遺構が最も多く、5～7、9～16、18号溝、1～9号土坑、1、2号掘立柱建物、1号竪穴状遺構、D区包含層が該当する。B区の南側に多く見られ、ほかD区、E区にも見られる。遺構の時期は時代幅が長く8～10世紀までに該当するが、8世紀代、9～10世紀代に分けられる。以下、遺構の出現の変遷を追いながら説明を加える。

8世紀代には6、11、14、18号溝が見られる。これらはその殆どが北東から南西方向に向けて流れている。流路ではないかと判断されるが、同一方向に流れる溝はほかに9、10号溝があり、これらも埋土等の類似性などから同時期と判断される。これら溝に関しては破片資料での判断であるが、8世紀中頃～後半の年代が考えられ、この時期には溝に水流が認められ、周辺には集落が存在した可能性が考えられる。このことを示すようにD区遺物包含層の出土土器は8世紀後半を中心としながらも8世紀全般に当てはまる。この包含層に関しては遺跡背後の丘陵上からの流れ込み遺物であると判断され、これだけの大量の遺物を廃棄する集落等の存在が窺える。丘陵上には、大波羅神宮寺跡があったという伝承があり、大波羅八幡社境内より格子目叩文の平瓦が発見されている⁽³⁾。D区の包含層出土遺物と関連する可能性も考えられよう。

9～10世紀代と判断されるのは15、16号溝である。これらはその殆どが前述の溝を切って作られており、遺跡内を東西方向に平行して流れていることから、全く性格の異なる機能を持った溝であると判断される。おそらく区画溝としての機能を有していたと考えられ、そのことを示すように区画内にやや溝との軸方向はズレるが、1号掘立柱建物が存在する。また、2号掘立柱建物等、いくつかの建物群の存在も周辺に指摘され、この区画溝の軸と同一方向の建物が存在していたことを示している。掘立柱建物から時期の決定できる資料は出土していないが、溝と軸方向を同じくすることから、同一時期であると考えられる。また、1～9号土坑、1号竪穴、4、13、18号溝はその多くが8世紀代の溝を切って作られていることや出土遺物から8世紀末～9、10世紀代に当てはまるものと判断される。特に土坑、竪穴状遺構に関してはこの殆どが区画溝である15、16号溝に挟まれた空間内に存在することから、掘立柱建物等に関連した遺構であった可能性は高いと言える。また、13、18号溝に関しては断面形が特異なこと、8世紀代の他の溝とは方向が異なることなどから、流路等とは機能的に異なる溝と考えられる。この時期になると遺跡周辺ではなく、遺跡内に生活施設が存在したことを示していると言える。

この後、中世になるとほとんど遺構は見られず、一部瓦が出土するのみである。中世期に入るとこれら施設の機能は廃絶され、別の場所への移動が行われた可能性が高く、当遺跡は基本層序からも見られたように水田として利用されるものと考えられるのである。

このように大波羅遺跡は時期的変遷をたどるのであるが、特に古代において区画溝を持つ建物群が存在することが興味深い。現在このような建物群と溝の存在は日田市内では確認されておらず、日田市内の古代社会を考える上で重要な資料と言える。



第 68 図 時期別遺構変遷図

D区出土の土器について

D区から大量の須恵器、土師器が出土した。器種は豊富に出土しており、蓋坏、皿、盤、盤蓋、碗、甕、壺、長頸壺、小壺、壺蓋、高坏、鉢、甑、小型土器など生活資料全般である。激しくローリングを受けており、これらはすべて流れ込みと考えられる。しかし、これらのまとまった資料の出土は日田市内では初めてであり、今後の市内での古代遺跡の指標となる有効な資料になると考えられる。時期は、一部弥生時代、古墳時代の遺物も含まれるが、その多くは8世紀代に収まる。なかでも須恵器蓋の口縁部の形態はIからVIIへの時期変遷が考えられ、特に、I、II～IV、VI・VIIの段階に細分され、それぞれIが8世紀前半、II～IVが8世紀中頃、VI・VIIが8世紀後半に位置付けられる。この蓋と同様に坏や皿もこれらの時期に属するものと考えられるが、形態的特徴の変化が乏しく、蓋との相伴関係が明らかではないため時期比定は今後の課題といえるであろう。

墨書土器、瓦について

B区4号溝から土師器皿の底面に「山」の銘、9号土坑から須恵器蓋に「口山」の銘、D区包含層から須恵器の蓋の内面に「田」の銘が入った墨書土器が出土した。「山」銘の入った墨書土器が9～10世紀、「田」銘が入った墨書土器が8世紀後半に属するものと考えられる。日田市内での古代の墨書土器の出土例は少なく、小迫辻原遺跡からは「大領」銘の墨書土器⁽⁴⁾が出土しており、慈眼山丘陵下の瀬戸口遺跡では「門」「林」「大」「三」名の墨書土器⁽⁵⁾が出土しているのみである。また、上野第一遺跡では「豊馬」銘の刻書石製品⁽⁶⁾が出土している。このように文字資料からみると、4例目の出土事例とすることになる。このほか、B区1号堅穴状遺構、D区遺物包含層からは瓦が出土している。日田市内の発掘調査での古代の瓦の出土例は殆どなく、大肥条里吉竹地区⁽⁷⁾で見られるのみである。

最後にこうした文字資料とともにB区での区画溝と1号掘立柱建物で構成される施設は注目される。「山」銘の墨書土器を伴出している点は、単に集落施設とは言えず、ある程度の階級層の施設や官衛・寺院関係施設とも考えられる。今回の調査からは遺構全体像を明らかにするには至らなかったが、今後の調査例を待ってこの遺構や本遺跡の性格は明らかにする必要があるものと考えられる。

おわりに

報告にあたり、時間的な問題から十分な報告ができていない部分が多々ある。これらはすべて渡邊に責任がある。記して謝罪する。

註1) 行時志郎他「赤迫遺跡」『日田市埋蔵文化財年報』平成5～8年度 日田市教育委員会 1995～1998年

註2) 脚注(1)に同じ

註3) 小田富士雄「古代の日田」『九州考古学研究 古墳時代編』1979年

註4) 行時志郎編「小迫辻原遺跡発掘調査概報」日田市教育委員会 1990年

註5) 坂本 嘉弘「慈眼山 瀬戸口遺跡」『平成3年度 国家公務員合同宿舎 日田住宅2号棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』大分県教育委員会 1992年

註6) 田中祐介「上野第一遺跡」『国道210号バイパス関係発掘調査概報』大分県教育委員会 1991年

註7) 平成13年3月現在、市教委が県営園場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査実施中。

表1 遺構番号変更表

区	種別	区での遺構番号	改定遺構番号	区	種別	区での遺構番号	改定遺構番号
B	溝	25	1	E	溝	2	19
B	溝	24	2	E	溝	3	20
B	溝	14	3	E	溝	4	21
B	溝	17	4	E	溝	5	22
B	溝	10	5	B	土坑	10	1
B	溝	13	6	B	土坑	1	2
B	溝	30	7	B	土坑	2	3
B	溝	21	8	B	土坑	5	4
B	溝	9	9	B	土坑	14	5
B	溝	7	10	B	土坑	6	6
B	溝	6	11	B	土坑	7	7
B	溝	4	12	B	土坑	8	8
B	溝	5	13	B	土坑	4	9
C	溝	1	13	C	土坑	1	10
B	溝	11	14	E	土坑	1	11
B	溝	3	15	B	掘立柱建物	1	1
B	溝	2	16	B	掘立柱建物	2	2
B	溝	1	17	B	竪穴状遺構	1	1
C	溝	2	17	D	遺物包含層	-	遺物包含層
E	溝	1	18				

表2 出土遺物観察表①

※表中には略記号を用いる。

種別 縄文・縄文土器、弥生・弥生土器、土師・土師器、須・須恵器

胎土 a 石英、b 長石、c 角閃石、d 雲母、e 赤色粒子、f 黒色粒子、g 白色粒子、h 砂粒

種目番号	番号	区	出土位置	種別	器種	寸法(cm)			調整		胎土	焼成	色調		備考
						口径	底径	器高	外面	内面			外	内	
第5区	1	A	包廂	縄文	深鉢	-	-	-	突帯有り、ナデ?	ナデ?	abd	良	淡褐色	淡黄褐色	
	2	A	包廂	縄文	浅鉢	-	-	-	ナデ、黒色磨研	ナデ?	ace	良	淡褐色	淡褐色	
	3	A	包廂	縄文	浅鉢	-	-	-	不明	不明	acd	良	淡褐色	淡褐色	
	4	A	一括	須	壺	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	cd	良	淡青灰色	淡青灰色	
	5	A	一括	弥生	碗	-	4.9	-	施釉	文様有り	緻密	良	緑灰色	緑灰色	
	6	A	一括	瓦	半瓦	-	-	-	ナデ	ナデ	b	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第10区	1	B	24溝	縄文	鉢	-	-	-	沈線文有り	ナデ?	bd	良	茶灰色	黒灰色	
	2	B	24溝	縄文	鉢	-	-	-	沈線文有り	ナデ?	bcd	良	淡褐色	淡褐色	
	3	B	24溝	縄文	浅鉢	-	-	-	ナデ	ナデ、条痕	abcd	良	淡黄褐色	暗褐色	
	4	B	24溝	縄文	浅鉢	-	-	-	ナデ?黒色磨研	ナデ	bcd	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	5	B	24溝	縄文	浅鉢	-	-	-	ナデ?黒色磨研	ナデ、条痕	abd	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	6	B	24溝	縄文	浅鉢	-	-	-	黒色磨研	黒色磨研	bd	良	灰褐色	灰褐色	
	7	B	24溝	縄文	浅鉢	-	-	-	黒色磨研	黒色磨研	h	良	黒灰色	黒灰色	
	8	B	24溝	縄文	深鉢	-	(10.4)	-	ナデ	ナデ	bcd	良	白黄色	黒褐色	
	9	B	24溝	土師	壺	-	-	-	ハケ	ハケ、ナデ	bd	良	白黄色	白黄色	
	10	B	24溝	弥生	壺	-	-	-	ハケ後ナデ	ハケ	d	良	白褐色	白褐色	
	11	B	24溝	弥生	壺	-	-	-	ナデ	ナデ	bcd	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	12	B	24溝	弥生	壺	-	-	-	ハケ後ナデ	ナデ	bd	良	灰色	灰色	
第11区	1	B	14溝	土師	壺	(16.4)	-	-	ナデ	ケズリ、ナデ	dh	良	茶褐色	茶褐色	
	2	B	25溝	土師	壺	(14.2)	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、指頭(1.5)	abcdg	良	淡褐色	淡褐色	
	3	B	25溝	土師	壺	-	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	bd	やや不良	灰褐色	灰褐色	
	4	B	25溝	土師	壺	-	(11.5)	-	ハケ、ナデ	ケズリ	abc	良	淡褐色	淡褐色	
	5	B	25溝	土師	高坏	(18.4)	-	-	ハケ後ナデ	ナデ	bdg	良	赤褐色	赤褐色	
	6	B	25溝	土師	高坏	(18.2)	(12.0)	(11.4.2)	ハケ後ナデ	ケズリ、ハケ後ナデ	bcdg	良	明茶褐色	淡褐色	

表3 出土遺物観察表②

神田番号	番号	区	出土位置	種別	器種	法量(cm) ()は最大径・残存径			調整		胎土	焼成	色調		備考
						口径	底径	器高	外面	内面			外	内	
第12区	1	B	ビツ46	土師	甕	(33.4)	-	-	回転ナデ	回転ナデ、ハケ	bcd	良	白黄褐色	白黄褐色	
	2	B	ビツ30	土師	鉢	-	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	cde	やや不良	暗黄褐色	暗黄褐色	
	3	B	ビツ37	土師	高坏	(15.4)	-	-	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	abcfg	良	淡灰褐色	淡灰褐色	
	4	B	36ビツ	土師	高坏	-	(13.0)	-	ナデ	ケズリ	abcg	良	淡褐色	淡褐色	
	5	B	5ビツ	土師	高坏	-	12.5	-	ナデ	ケズリ	abcg	良	淡褐色	淡褐色	
第13区	1	B	包壺	土師	甕	(15.6)	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ	abcg	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	2	B	包壺	土師	高坏	(15.0)	-	-	回転ナデ、ミガキ	ケズリ、ハケ、ナデ	bde	良	淡白黄色	淡白黄色	
	3	B	包壺	土師	坏	-	-	-	ナデ、シボリ	回転ナデ	abd	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
	4	B	包壺	土師	高坏	(25.2)	-	-	回転ナデ	ケズリ	bcg	良	淡褐色	淡褐色	
	5	B	包壺	土師	高坏	(19.4)	-	-	ハケ、ナデ	回転ナデ	aef	良	赤褐色	赤褐色	
	6	B	包壺	土師	高坏	14.7	-	-	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	abce	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第14区	1	B	14溝	縄文	深鉢	-	-	-	ナデ、奥帯有り	ナデ、ナデ	dh	良	茶褐色	茶褐色	
	2	B	包壺	縄文	鉢	-	-	-	奥帯縄文	条痕	bd	良	白黄色	白黄色	
	3	B	25溝	縄文	深鉢	-	-	-	ナデ	ミガキ	bd	良	暗灰褐色	暗灰褐色	
	4	B	14溝	縄文	浅鉢	-	-	-	ナデ、斜突文	ナデ	abv	良	淡暗褐色	淡暗褐色	波状口縁
	5	B	14溝	縄文	浅鉢	-	-	-	ナデ、黒色磨研	ナデ	hcd	良	淡灰褐色	黒褐色	
	6	B	25溝	縄文	浅鉢	-	-	-	黒色磨研、波状文	ナデ、黒色磨研	hd	良	灰褐色	灰褐色	
	7	B	17溝	縄文	碗	(11.6)	(3.6)	4.7	ナデ	黒色磨研	bc	良	灰白色	灰白色	
	8	B	14溝	弥生	高坏	-	-	-	ナデ	ナデ	bd	良	灰黄色	灰黄色	
	9	B	包壺	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ハケ、ナデ	cddeg	良	白黄褐色	白黄褐色	焼痕?
第21区	1	B	2溝	土師	坏	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	bcde	良	白黄色	赤褐色	
	2	B	2溝	土師	坏	-	(8.7)	-	回転ナデ	回転ナデ	ab	良	淡褐色	淡褐色	
	3	B	3溝	土師	甕	-	(13.0)	-	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ、奥帯有り	bce	良	灰白色	淡褐色	
第23区	1	B	1壺穴	土師	坏	(14.0)	(8.8)	3.6	回転ナデ、奥帯不明	回転ナデ	h	良	淡褐色	淡褐色	
	2	B	1壺穴	土師	坏	12.6	7.7	4.2	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	bce	良	淡褐色	淡褐色	
	3	B	1壺穴	土師	甕	-	-	-	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	cde	良	赤褐色	赤褐色	
	4	B	1壺穴	土師	甕	(17.7)	(11.6)	3.2	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	bd	良	明黄褐色	明黄褐色	
	5	B	1壺穴	土師	甕	17.0	13.8	2.2	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	bcg	良	黄褐色	淡褐色	
	6	B	1壺穴	瓦葺	甕	(17.8)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	abch	良	灰白色	灰白色	
	7	B	1壺穴	瓦葺	平瓦	-	-	-	凹面、布目	凸面、布目、タタキ	bcde	良	茶褐色	茶褐色	
第26区	1	B	1土坑	土師	甕	(29.2)	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ	abcd	良	淡黄褐色	暗赤褐色	
	2	B	1土坑	七師	甕?	-	-	-	ナデ、奥帯有り	ケズリ	hde	良	明赤褐色	明赤褐色	
	3	B	1土坑	七師	甕	-	-	-	ケズリ	ケズリ、ナデ	bdc	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	4	B	1土坑	土師	甕	15.6	-	-	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ、奥帯有り	a	良	暗青灰色	淡青灰色	
	5	B	1土坑	土師	甕	-	-	1.6	ナデ?	ケズリ	abcd	良	淡黄褐色	淡褐色	
	6	B	1壺穴	土師	甕	(9.4)	-	-	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	h	良	灰白色	灰白色	口縁山型、奥帯有り
	7	B	5土坑	土師	坏	18.5	7.7	-	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	bch	良	淡褐色	淡褐色	
	8	B	5土坑	土師	坏	-	-	3.3	ナデ、シボリ	シボリ、杯底、ナデ	ab	良	淡青灰色	淡青灰色	
	9	B	1壺穴	土師	甕	(12.0)	(7.8)	-	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	bce	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	10	B	8土坑	土師	坏	-	(7.4)	3.7	回転ナデ	回転ナデ	bce	良	赤褐色	赤褐色	
	11	B	8土坑	土師	坏	-	7.1	-	回転ナデ	回転ナデ	bceg	良	赤褐色	赤褐色	
	12	B	10土坑	土師	甕	(15.6)	-	-	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	abc	良	灰白色	灰白色	
	13	B	14土坑	土師	甕	(18.4)	(15.0)	1.9	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	h	良	灰白色	灰白色	
	14	B	14土坑	土師	坏	-	-	-	ナデ	ナデ	h	良	赤褐色	赤褐色	
第30区	1	B	4溝	土師	甕	(17.8)	-	-	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	h	良	灰白色	灰白色	
	2	B	4溝	土師	甕	(15.0)	-	-	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	h	良	青灰色	青灰色	
	3	B	4溝	土師	甕	(15.0)	-	-	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	h	良	暗褐色	暗褐色	
	4	B	4溝	土師	甕	(14.4)	-	-	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	h	良	暗褐色	暗褐色	
	5	B	4溝	土師	甕	-	-	-	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	h	良	青灰色	青灰色	
	6	B	4溝	土師	甕	-	-	-	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	h	良	灰白色	灰白色	
	7	B	4溝	土師	甕	(12.0)	(9.0)	4.0	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ、奥帯有り	h	良	暗褐色	暗褐色	
	8	B	4溝	土師	甕	-	-	-	回転ナデ	ナデ	eg	良	赤褐色	赤褐色	
	9	B	4溝	土師	甕	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	bde	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	10	B	4溝	土師	坏	(13.0)	(7.4)	4.2	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	abce	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	11	B	4溝	土師	坏	12.8	7.8	3.8	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ	bc	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	12	B	4溝	土師	坏	(15.2)	(8.6)	4.4	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ、奥帯有り	bcg	良	淡褐色	淡褐色	
	13	B	17溝	土師	坏	(13.0)	(7.8)	3.6	回転ナデ、奥帯有り	回転ナデ、奥帯有り	bc	良	淡褐色	淡褐色	

表4 出土遺物観察表③

挿図番号	番号	区	出土位置	種別	器種	法量(cm) (14種元体残存高)			調整		胎土	焼成	色調		備考
						口径	底径	器高	外面	内面			外	内	
第30図	14	B	4溝	土師	坏	(12.4)	(8.8)	3.4	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	e	良	黄褐色	黄褐色	
	15	B	4溝	土師	皿	(15.0)	(9.8)	1.9	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	bc	良	淡褐色	淡褐色	
	16	B	4溝	土師	皿	(15.8)	(11.8)	2.0	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	abd	良	赤褐色	赤褐色	
	17	B	4溝	土師	皿	15.0	11.0	2.0	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	bd	良	黄茶褐色	黄茶褐色	「山」型土器
	18	B	4溝	須	甕	-	-	-	タタキ	タタキ	h	良	暗灰黒色	暗灰黒色	
	19	B	4溝	須	甕	-	-	-	タタキ	タタキ	h	良	暗灰色	暗灰色	
	20	B	4溝	土師	甕	-	-	-	ナデ	ケズリ、ナデ	bce	良	白黄褐色	白黄褐色	
	21	B	4溝	土師	甕	-	-	-	ナデ	ケズリ、ナデ	beg	良	黄茶褐色	黄茶褐色	
	22	B	4溝	土師	甕	-	-	-	ナデ	ケズリ、ナデ	cag	良	黄茶褐色	黄茶褐色	
	23	B	4溝	土師	甕	-	-	-	ナデ	ケズリ、ナデ	beg	良	黄褐色	黄褐色	
	24	B	4溝	土師	甕	-	-	-	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	cde	良	白黄褐色	白黄褐色	
	25	B	5溝	須	蓋	-	-	-	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	h	良	暗灰色	暗灰色	
	26	B	5溝	土師	坏	(14.0)	(8.4)	3.8	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	ab	良	淡橙褐色	淡橙褐色	
	27	B	6溝	須	坏	-	(8.8)	-	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	h	良	青灰色	青灰色	
	28	B	11溝	須	蓋	(13.4)	-	3.0	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	b	良	濃青灰色	淡青灰色	
	29	B	11溝	須	坏	-	-	-	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	h	良	青灰色	青灰色	
30	B	13溝	土師	坏	-	-	-	ケズリ、底面ヘラ削	ケズリ	bce	良	白黄色	赤褐色		
31	B	13溝	須	蓋	14.6	-	2.8	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	b	良	青灰色	青灰色		
32	B	13溝	土師	鉢	(16.5)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	bc	良	白黄色	白黄色		
第32図	1	B	18-23溝	土師	坏	(13.4)	(8.0)	(3.5)	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	bch	良	淡橙褐色	淡橙褐色	
第33図	1	B	ピット1	須	蓋	-	-	-	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	h	良	青灰色	青灰色	
	2	B	ピット19	土師	皿	(15.0)	(11.4)	2.2	回転ナデ	回転ナデ	bce	良	淡褐色	淡褐色	
	3	B	ピット20	須	皿	(19.29)	(15.6)	2.4	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	ab	良	青灰色	青灰色	
	4	B	ピット21	須	坏	-	(8.3)	-	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	h	良	灰褐色	灰褐色	
	5	B	ピット22	須	蓋	-	-	-	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	h	良	灰白色	灰白色	
	6	B	ピット34	須	坏	-	-	-	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	h	良	暗灰色	暗灰色	
	7	B	ピット11	須	坏	-	-	-	回転ナデ	ナデ	dh	不良	黄白色	黄白色	
第34図	1	B	包層	須	坏	(12.2)	(7.19)	4.9	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	ah	良	淡青灰色	淡青灰色	
	2	B	包層	須	坏	13.9	8.6	4.6	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	ab	良	淡青灰色	淡青灰色	
	3	B	包層	須	碗	-	(8.4)	-	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	h	良	灰白色	灰白色	
	4	B	包層	土師	碗	-	(8.6)	-	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	bef	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
	5	B	包層	土師	坏	(14.2)	(9.6)	3.9	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	abc	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
	6	B	包層	須	甕	-	-	-	ナデ、裏面有り	回転ナデ	h	良	暗灰色	暗灰色	
	7	B	包層	瓦	平瓦	-	-	-	凹面：布目	凸面：粗面	bcdg	良	暗灰褐色	暗灰褐色	
第35図	1	B	1竪穴	縄文	深鉢	-	-	-	不明、突帯有り	不明	bcd	良	灰黒色	灰黒色	
	2	B	7溝	縄文	深鉢	-	7.0	-	ナデ、沈線文	ナデ	bd	やや不良	白黄色	暗灰褐色	
	3	B	9溝	土師	甕	-	-	-	ケズリ?	ハケ	bde	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	4	B	ピット40	瓦	平瓦	-	-	-	凹面：粗面あり	凸面：粗面	b	良	赤褐色	淡赤褐色	
第42図	1	C	1溝	土師	坏	-	(7.6)	-	回転ナデ	回転ナデ	ab	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	2	C	1溝	弥生	甕	-	(9.0)	-	ナデ	ナデ	abc	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	3	C	1溝	弥生	甕	-	-	-	ハケ	棒状タタキ後ハケ	abc	良	淡褐色	淡褐色	
	4	C	1土坑	陶器	碗	-	-	-	回転ナデ	施釉	精良	良	淡灰白色	淡灰白色	
	5	C	包層	土師	甕	-	3.9	-	タタキ	ナデ	abc	良	淡灰褐色	淡灰褐色	
	6	C	ピット1	須	甕	-	-	-	棒状タタキ	青海波状タタキ	b	良	青灰色	青灰色	
第47図	1	D	一括	須	蓋	15.6	-	2.7	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ、底面ヘラ削	h	良	灰白色	灰白色	
	2	D	一括	須	蓋	(15.9)	-	2.1+α	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ、底面ヘラ削	b	良	青灰色	灰白色	
	3	D	一括	須	蓋	(16.0)	-	-	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	a	良	暗灰色	暗灰色	
	4	D	一括	須	蓋	15.6	-	2.6	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ、底面ヘラ削	h	良	灰黒色	灰黒色	
	5	D	2竪	須	蓋	(14.6)	-	2.5	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ、底面ヘラ削	ab	良	白灰色	白灰色	
	6	D	一括	須	蓋	(14.0)	-	2.4	回転ナデ	回転ナデ、底面ヘラ削	b	良	青灰色	青灰色	
	7	D	一括	須	蓋	(13.6)	-	2.7	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	ab	良	灰白色	灰白色	
	8	D	一括	須	蓋	(14.8)	-	2.6	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	a	良	青灰色	青灰色	
	9	D	一括	須	蓋	(13.5)	-	-	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ、底面ヘラ削	ag	良	青灰色	青灰色	
	10	D	一括	須	蓋	(14.8)	-	2.4+α	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ	b	良	暗灰色	暗灰色	
	11	D	1竪	須	蓋	14.4	-	-	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ、底面ヘラ削	h	良	灰黒色	灰黒色	
	12	D	一括	須	蓋	(14.2)	-	2.0	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ、底面ヘラ削	h	良	灰白色	灰白色	
	13	D	一括	須	蓋	14.8	-	-	回転ナデ、底面ヘラ削	回転ナデ、底面ヘラ削	h	良	淡緑灰色	淡緑灰色	

表5 出土遺物観察表④

種別番号	番号	区	出土位置	植物	器械	寸法(cm) (川原光徳氏測定)			調整		胎土	焼成	色澤		備考	
						口径	底径	器高	外面	内面			外	内		
第47図	14	D	1-2層	須	蓋	(16.8)	-	2.4	回転ナデ	回転ナデ	b	良				
	15	D	一括	須	蓋	(13.6)	-	2.7	回転ナデ	回転ナデ	ab	良	淡青灰色	淡青灰色		
	16	D	一括	須	蓋	14.8	-	2.2	回転ナデ	調整ナデ	h	良	淡青灰色	淡青灰色		
	17	D	一括	須	蓋	17	2.65	-	回転ナデ	調整ナデ	ab	やや不良	灰白色	灰白色		
	18	D	一括	須	蓋	15.0	-	-	回転ナデ	調整ナデ	h	良	灰黑色	灰黑色		
	19	D	一括	須	蓋	(13.8)	-	-	回転ナデ	調整ナデ	h	良	灰黑色	灰黑色		
	20	D	一括	須	蓋	(15.2)	-	1.8	回転ナデ	調整ナデ	h	良	灰黑色	灰黑色		
	21	D	一括	須	蓋	15.0	-	-	回転ナデ	調整ナデ	h	良	淡灰褐色	淡灰褐色		
	22	D	一括	須	蓋	(13.8)	-	2.4	回転ナデ	調整ナデ	b	不良	灰白色	灰白色		
	23	D	一括	須	蓋	(15.6)	-	2.4	回転ナデ	調整ナデ	a	良	青灰色	青灰色		
	24	D	一括	須	蓋	14.8	-	-	回転ナデ	調整ナデ	h	良	灰白色	灰白色		
	25	D	一括	須	蓋	(14.6)	-	2.1	回転ナデ	調整ナデ	h	良	灰黑色	灰黑色		
	26	D	一括	須	蓋	16.4	-	2.2	回転ナデ	調整ナデ	h	良	青灰色	青灰色		
	27	D	1層	須	蓋	(16.8)	-	1.5+ε	回転ナデ	調整ナデ	b	良	青灰色	青灰色		
	28	D	一括	須	蓋	(16.2)	-	-	回転ナデ	調整ナデ	af	良	淡青灰色	淡青灰色		
	29	D	一括	須	蓋	16.6	-	1.9	回転ナデ	調整ナデ	h	やや不良	灰白色	灰白色		
	30	D	2層	須	蓋	(14.6)	-	2.7	回転ナデ	調整ナデ	ab	やや不良	淡青灰色	灰白色		
	31	D	2層	須	蓋	15.3	-	-			ag	良	淡灰色	淡灰色		
	32	D	一括	須	蓋	16.1	-	2.4	回転ナデ	調整ナデ	ab	良	淡青灰色	淡青灰色		
	33	D	一括	須	蓋	(14.1)	-	1.4	回転ナデ	調整ナデ	a	良	青灰色	青灰色		
	34	D	一括	須	蓋	16.0	-	1.1	回転ナデ	調整ナデ	h	良	灰黑色	灰黑色		
	35	D	1層	須	蓋	14.8	-	1.8	回転ナデ	調整ナデ	h	良	灰黑色	灰黑色		
	36	D	一括	須	蓋	15.0	-	-	回転ナデ	調整ナデ	hd	良	灰白色	灰白色		
	37	D	一括	須	蓋	(13.2)	-	1.4	回転ナデ	調整ナデ	h	良	灰白色	灰白色		
	38	D	2層	須	蓋	(13.3)	-	1.4	回転ナデ	調整ナデ	b	良	青灰色	青灰色		
	39	D	一括	須	蓋	12.4	-	1.4	回転ナデ	調整ナデ	ab	良	青灰色	青灰色		
	40	D	一括	須	蓋	(15.2)	-	1.6	回転ナデ	調整ナデ	h	やや不良	灰白色	灰白色		
	41	D	一括	須	蓋	16.4	-	1.2	回転ナデ	調整ナデ	dh	良	茶灰色	茶灰色		
	42	D	1層	須	蓋	-	-	-			ah	良	青灰色	青灰色		
	43	D	1層	須	蓋	-	-	-	回転ナデ	調整ナデ	a	良	青灰色	青灰色		
	44	D	一括	須	蓋	-	-	-	回転ナデ	調整ナデ	ah	良	灰白色	灰白色		
	45	D	一括	須	蓋	-	-	-	回転ナデ	調整ナデ	h	良	灰黑色	灰黑色		
	46	D	1層	須	蓋	-	-	-	回転ナデ	調整ナデ	bh	良	灰白色	灰白色		
	47	D	一括	須	蓋	(18.6)	-	1.7	回転ナデ	調整ナデ	h	やや不良	灰白色	灰白色		
	48	D	一括	須	蓋	(17.8)	-	1.6	回転ナデ	調整ナデ	h	良	灰褐色	灰褐色		
	49	D	1層	須	蓋	21.0	-	1.9	回転ナデ	調整ナデ	h	良	灰黑色	灰黑色		
	第48図	50	D	2層	須	坏	12.3	8.2	4.1	回転ナデ	調整ナデ	ag	良	暗青灰色	暗青灰色	
		51	D	1層	須	坏	11.6	7.8	3.3	回転ナデ	調整ナデ	ab	良	青灰色	青灰色	
		52	D	2層	須	坏	11.9	9.1	4.2	回転ナデ	調整ナデ	c	良	青灰色	青灰色	
		53	D	一括	須	坏	(11.8)	(8.0)	4.4	回転ナデ	調整ナデ	ag	良	青灰色	青灰色	
		54	D	一括	須	坏	(12.4)	(8.2)	4.5	回転ナデ	調整ナデ	a	やや不良	淡青灰色	淡青灰色	
		55	D	2層	須	坏	(14.1)	(9.6)	4.2	回転ナデ	調整ナデ	ag	良	淡灰色	淡灰色	
		56	D	一括	須	坏	(14.1)	(9.4)	4.9	回転ナデ	調整ナデ	hb	良	灰黑色	灰黑色	
		57	D	一括	須	坏	-	(8.4)	-	回転ナデ	調整ナデ	h	良	灰黑色	灰黑色	
		58	D	一括	須	坏	12.9	(8.6)	-	回転ナデ	調整ナデ	dh	不良	灰白色	灰白色	
		59	D	一括	須	坏	13.3	8.4	4.0~4.3	回転ナデ	調整ナデ	ag	良	青灰色	青灰色	
		60	D	1-2層	須	坏	(13.5)	9.0	3.9	回転ナデ	調整ナデ	af	良			
		61	D	一括	須	坏	13.4	8.0	4.0	回転ナデ	調整ナデ	ac	良	淡灰色	淡灰色	
		62	D	一括	須	坏	12.8	7.8	4.0	回転ナデ	調整ナデ	b	良	暗青灰色	暗青灰色	
63		D	一括	須	坏	13.1	8.0	4.4	回転ナデ	調整ナデ	ab	良	淡青灰色	淡青灰色		
64		D	1層	須	坏	12.0	7.8	3.9	回転ナデ	調整ナデ	a	良	暗灰色	暗灰色		
65		D	一括	須	坏	12.9	7.3	4.0	回転ナデ	調整ナデ	ab	良	青灰色	青灰色		
66		D	一括	須	坏	13.0	7.4	3.6~3.8	回転ナデ	調整ナデ	af	良	淡青灰色	淡青灰色		
67		D	一括	須	坏	(13.4)	8.2	4.3	回転ナデ	調整ナデ	ab	良	青灰色	青灰色		
68		D	1層	須	坏	(14.0)	(9.5)	4.1	回転ナデ	調整ナデ	h	良	青灰色	青灰色		
69		D	1層	須	坏	13.3	(8.8)	3.9	回転ナデ	調整ナデ	b	良	青灰色	青灰色		
70		D	1層	須	坏		28.4	3.8~4.1	回転ナデ	調整ナデ	a	良	暗灰色	暗灰色		

表6 出土遺物観察表⑤

埴田番号	番号	区	出土位置	種別	器種	法量(cm) ()は復元径・残存高			調整		胎土	焼成	色調		備考
						口径	底径	器高	外面	内面			外	内	
第48区	71	D	1層	須	坏	(13.1)	9.0	4.1	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ	a	良	暗灰色	暗灰色	
	72	D	一括	須	坏	(12.6)	8.1	3.8	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ	a	良	青灰色	青灰色	
	73	D	一括	須	坏	(13.6)	9.0	4.1	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ	ac	良	淡灰色	淡灰色	
	74	D	一括	須	坏	-	9.4	-	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ	af	良	暗灰色	暗灰色	
	75	D	一括	須	坏	-	9.5	-	ヘラ切り	ナデ	af	良	淡青灰色	淡青灰色	
	76	D	一括	須	坏	-	8.3	-	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ	a	良	青灰色	青灰色	
	77	D	1層	須	坏	13.4	8.2	4.2	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ	ab	良	青灰色	青灰色	
	78	D	一括	須	坏	13.0	7.0	3.7	回転ナデ,底未調整	回転ナデ	b	良	青灰色	青灰色	
	79	D	一括	須	坏	(13.5)	(8.2)	4.3	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ,内底不定ナデ	a	良	暗灰色	暗灰色	
	80	D	一括	須	坏	(12.2)	(7.6)	4.8	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ	bh	不良	灰白色	灰白色	
	81	D	一括	須	坏	(12.0)	6.0	3.1	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ,内底不定ナデ	h	やや不良	明灰色	明灰色	
	82	D	1層	須	坏	(16.6)	10.1	4.8	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ,内底不定ナデ	h	良	暗青灰色	暗青灰色	
	83	D	1層	須	坏	15.6	10.2	5.2	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ,内底未調整ナデ	h	やや不良	青灰色	淡灰白色	
	84	D	1層	須	坏	(16.4)	9.4	5.3	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ	h	良	暗青灰色	暗青灰色	
85	D	一括	須	坏	(17.0)	10.4	4.9	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ	ac	良	暗灰色	暗灰色		
86	D	1層	須	坏	16.7	9.7	5.5	回転ナデ,底ナデ	回転ナデ	a	良好	淡青灰色	淡青灰色		
第49区	87	D	2層	須	坏	16.4	10.3	4.9~5.2	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ	ac	やや不良	淡灰色	淡灰色	
	88	D	一括	須	坏	(16.5)	10.5	5.2	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ,底ヘラ切	af	やや不良	淡灰色	淡灰色	
	89	D	一括	須	坏	-	9.4	-	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ,内底不定ナデ	h	不良	灰白色	灰白色	
	90	D	3,4層	須	坏	-	-	4.1	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ	dh	良	暗青灰色	暗青灰色	
	91	D	一括	須	坏	-	-	4.0	回転ナデ	回転ナデ	a	やや不良	淡灰色	暗灰色	
	92	D	一括	須	坏	13.4	8.9	4.1	回転ナデ	回転ナデ	b	良	淡灰白色	淡灰白色	
	93	D	一括	須	坏	13.1	9.6	3.7~3.9	回転ナデ,底ナデ	回転ナデ,内底不定ナデ	ag	良	淡灰色	淡灰色	
	94	D	1層	須	坏	(13.6)	(9.6)	4.1	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ	bh	やや不良	黄灰色	黄灰色	
	95	D	一括	須	坏	13.4	8.5	3.8	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ	ab	やや不良	淡灰色	淡灰色	
	96	D	一括	須	坏	12.4	8.8	2.7	回転ナデ,底未調整	回転ナデ	b	やや不良	淡灰色	暗灰色	
	97	D	一括	須	坏	(12.4)	(8.0)	3.6	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ,内底不定ナデ	a	良	暗灰色	暗灰色	
	98	D	一括	須	坏	11.8	8.2	3.3	回転ナデ,底未調整	回転ナデ	ab	良	淡青灰色	淡青灰色	
	99	D	1層	須	坏	(12.3)	(8.1)	3.2	回転ナデ,底未調整	回転ナデ	a	良	青灰色	青灰色	
	100	D	一括	須	坏	13.2	8.8	3.4	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ,内底未調整ナデ	dh	不良	灰白色	灰白色	
	101	D	一括	須	坏	(13.1)	8.8	3.7	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ,内底未調整ナデ	bh	良	青灰色	青灰色	
	102	D	一括	須	坏	13.8	9.6	3.3	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ,内底未調整ナデ	h	不良	灰白色	灰白色	
	103	D	一括	須	坏	(10.8)	-	1.8	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ,内底未調整ナデ	h	やや不良	淡青灰色	淡青灰色	
	104	D	一括	須	皿	-	-	-	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ,内底未調整ナデ	ab	良	青灰色	青灰色	
	105	D	一括	須	皿	-	-	-	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ	ab	良	淡青灰色	淡青灰色	
	106	D	一括	須	皿	(14.6)	(11.1)	2.1	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ	ab	やや不良	灰褐色	灰褐色	
	107	D	一括	須	皿	(17.6)	(14.0)	2.2	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ,内底未調整ナデ	bh	やや不良	淡青灰色	淡青灰色	
	108	D	一括	須	皿	17.5	-	3.0	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ,内底未調整ナデ	ah	不良	灰白色	灰白色	
	109	D	一括	須	皿	(19.1)	15.2	2.7	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ	ab	やや不良	淡灰色	淡灰色	
	110	D	一括	須	皿	-	(14.0)	-	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ	ab	良	淡青灰色	淡青灰色	粘上紐状痕有
	111	D	一括	須	皿	(15.8)	(12.4)	1.6	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ	bh	やや不良	暗灰白色	暗灰白色	
	112	D	一括	須	皿	(16.8)	(13.2)	1.8	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ,内底未調整ナデ	b	良	青灰色	青灰色	
	113	D	一括	須	皿	(16.6)	(12.8)	2.1	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ	ag	良	暗灰色	暗灰色	
	114	D	1層	須	皿	(16.9)	(12.3)	1.8	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ	ab	良	青灰色	青灰色	
115	D	一括	須	皿	(18.4)	(14.6)	1.8	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ	bh	良	灰白色	灰白色		
116	D	一括	須	皿	(19.8)	(14.4)	1.7	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ	bh	良	青灰色	青灰色		
117	D	一括	須	皿	(19.6)	(14.4)	2.2	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ	bh	不良	灰白色	灰白色		
118	D	一括	須	皿	(18.4)	(15.0)	2.4	回転ナデ,底面ヘラ切	回転ナデ	ag	良	淡青灰色	淡青灰色		
119	D	一括	須	壺	-	(12.2)	-	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ	ag	良	淡灰色	淡灰色		
120	D	1層	須	坏	-	-	8.8	回転ナデ,底ヘラ切	手持ちヘラ	a	良	青灰色	青灰色	高台:板状痕有	
121	D	一括	須	盤	-	(16.8)	-	底:ヘラ切り	内底:不定ナデ	ag	良	暗灰色	暗灰色		
122	D	一括	須	坏	-	9.4	-	回転ナデ,底未調整	回転ナデ	a	やや不良	灰白色	灰白色		
123	D	一括	須	坏	-	9.6	-	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ,内底不定ナデ	ag	良	青灰色	青灰色		
第50区	124	D	1層	須	壺	(30.6)	-	-	楷間瓦葺,不定ナデ	楷間瓦葺,不定ナデ	a	良	暗青灰色	暗青灰色	
	125	D	2層	須	壺	-	-	-	平行タタキ	青銅製タタキナデ	bh	良	灰黒色	灰黒色	
	126	D	1層	須	壺	-	-	-	ケズリ,ナデ	ナデ	abh	良	灰黒色	灰黒色	
	127	D	一括	須	蓋	-	-	-	回転ナデ,底ヘラ切	回転ナデ	ag	良	淡青灰色	淡青灰色	

表7 出土遺物観察表⑥

障目番号	番号	区	出土位置	種別	器種	注量(cm) ()は復元径・残存高			調整		胎土	焼成	色調		備考
						口径	底径	器高	外面	内面			外	内	
第50区	128	D	2層	須	甕	(11.6)	-	-	回転ナデ	回転ナデ、指頭残	a	良	暗紫褐色	暗紫褐色	
	129	D	一括	須	短頸甕 (須部8.0)	-	-	-	平行タタキナデ	青赤淡タタキナデ	bh	良	灰黒色	灰黒色	
	130	D	一括	須	甕	-	-	-	平行タタキ	青赤淡タタキナデ	b	良	青灰色	青灰色	
	131	D	1層	須	長頸甕 (8.8)	-	-	-	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ	bh	良	灰黒色	灰黒色	
	132	D	一括	須	甕	-	-	-	平行タタキナデ	青赤淡タタキ後ナデ	ab	良	灰黒色	灰黒色	
	133	D	1層	須	甕	-	-	-	回転ナデ、調整	回転ナデ	ab	良	青灰色	青灰色	
	134	D	1層	須	長頸甕	-	-	-	シクリ後回転ナデ	シクリ後回転ナデ	f	良	青灰色	青灰色	
	135	D	1・2層	須	長頸甕	-	-	-	回転ナデ、シクリ後回転ナデ	回転ナデ	ab	良	青灰色	青灰色	
	136	D	2層	須	高坏	-	-	-	回転ナデ、口縁	回転ナデ、口縁	a	良	灰白色	灰白色	
	137	D	一括	須	高坏	-	(9.6)	-	回転ナデ	回転ナデ	b	良	淡緑灰色	淡緑灰色	
	138	D	一括	須	高坏	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	f	良	黒色	暗青灰色	
	139	D	一括	須	甕	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	h	良	暗褐色	青灰色	
	140	D	一括	須	坏	(10.8)	(受部3.0)	3.9	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ	bh	良	黄褐色	黄褐色	
	第51区	141	D	一括	土師	蓋	(16.2)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	ab	不良	明黄褐色	明黄褐色
142		D	一括	土師	蓋	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	abc	良	赤褐色	赤褐色	
143		D	一括	土師	蓋	(17.0)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	ab	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
144		D	一括	土師	蓋	(13.8)	-	1.0	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ	bc	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
145		D	1層	土師	蓋	(14.9)	-	1.4	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ	ab	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
146		D	1層	土師	坏	(12.3)	(7.4)	(3.8)	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ	b	やや不良	淡赤褐色	淡赤褐色	
147		D	一括	土師	坏	14.2	10.2	3.9	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ	ab	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
148		D	1層	土師	坏	(13.4)	(9.2)	4.7	不明、底面ヘラ切	回転ナデ、内底調整ナデ	bd	良	明赤褐色	明赤褐色	
149		D	一括	土師	坏	(15.6)	(9.0)	4.8	指頭残、回転ナデ	回転ナデ	ab	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
150		D	1層	土師	坏	(15.0)	(8.3)	4.0	回転ナデ	回転ナデ	ab	良	赤褐色	赤褐色	
151		D	一括	土師	坏	(11.8)	6.4	3.4	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ	ab	不良	淡褐色	淡褐色	
152		D	一括	土師	坏	13.6	8.1	3.4	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ、内底調整ナデ	b	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
153		D	一括	土師	小壺	(7.2)	(須部9.1)	-	回転ヘラケズリ	回転ナデ	abc	良	明黄褐色	明黄褐色	
154		D	1層	土師	小壺	(7.6)	(須部9.6)	-	不明	不明	b	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
155		D	1層	土師	坏	16.0	8.1	4.2	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ	b	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
156		D	1層	土師	坏	-	-	-	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ	ab	良	明赤褐色	明赤褐色	
157		D	1層	土師	坏	-	-	-	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ	ab	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
158		D	1層	土師	坏	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
159		D	1層	土師	皿	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	d	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
160		D	一括	土師	皿	-	-	-	指頭残、底面ヘラ切	ナデ	bd	良	暗褐色	暗褐色	
161		D	1層	土師	皿	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
162		D	一括	土師	皿	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	bd	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
163		D	一括	土師	皿	(11.6)	-	3.3	指頭残、ナデ	ナデ	bd	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
164		D	一括	土師	皿	(12.8)	(6.8)	3.1	ナデ、指頭残	回転ナデ、調整ナデ	bd	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
165		D	1層	土師	皿	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	d	不良	黄褐色	黄褐色	
166		D	一括	土師	皿	(13.3)	(12.1)	2.6	回転ナデ	回転ナデ	bd	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
167		D	3.4層	土師	皿	(14.2)	-	-	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ	abd	やや不良	暗褐色	暗褐色	
168		D	1層	土師	鉢	-	-	-	ハケ?	ケズリ	ad	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
169		D	一括	土師	鉢	(17.2)	-	-	ナデ?	ナデ?	b	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
170		D	一括	土師	皿	-	-	-	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ	ab	良	黄褐色	黄褐色	
171		D	一括	土師	皿	-	-	-	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ	abc	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
172		D	1層	土師	皿	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	ab	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
173		D	一括	土師	皿	-	-	-	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ	ab	良	明赤褐色	明赤褐色	
174		D	1層	土師	皿	(17.1)	(11.4)	(2.5)	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ	ab	良	明赤褐色	明赤褐色	
175	D	1層	土師	坏	-	-	-	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ、内底調整ナデ	abc	良	淡黄褐色	淡黄褐色		
176	D	一括	土師	小壺	-	(5.4)	-	回転ナデ、底面ヘラ切	調整ナデ	ab	良	明黄褐色	明黄褐色		
177	D	1層	土師	坏	16.2	7.3	4.2	回転ナデ、底面ヘラ切	回転ナデ、内底調整ナデ	b	良	明赤褐色	明赤褐色		
178	D	1層	土師	甕	-	(6.3)	-	回転ナデ、底面ヘラ切	調整ナデ	bc	良	淡黄褐色	淡黄褐色		
179	D	一括	土師	小壺	-	(6.2)	-	ナデ、底面ヘラ切	ケズリ、ナデ	ab	良	淡黄褐色	淡黄褐色		
180	D	2層	土師	甕	-	(4.1)	-	指頭残、ナデ	ナデ	abc	良	淡赤褐色	淡赤褐色		
181	D	一括	土師	高坏	-	-	-	ナデ	ナデ	ab	不良	黄褐色	黄褐色		
182	D	一括	土師	高坏	-	-	-	ナデ	ナデ	ab	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		
183	D	1層	土師	高坏	-	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	ab	良	淡黄褐色	淡黄褐色		
184	D	一括	土師	高坏	-	-	-	ナデ	ナデ	ab	良	淡黄褐色	淡黄褐色		

表 8 出土遺物観察表⑦

標本番号	番号	区	出土位置	種別	器種	法量(cm) ()は復元径・残存高			調整		胎土	焼成	色調		備考
						口径	底径	器高	外面	内面			外	内	
第51図	185	D	一括	土師	高坏	-	-	-	不明	不明	ab	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
	186	D	一括	土師	壺	-	(13.4)	-	回転ナデ、底面ハケ切	ケズリ、ナデ	ab	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第52図	187	D	一括	土師	壺	(22.3)	-	-	ハケ後ナデ	ケズリ、ナデ	abce	良	淡茶褐色	淡茶褐色	
	188	D	一括	土師	壺	(23.6)	-	-	ハケ後ナデ	ケズリ	abc	良	淡灰茶色	淡灰茶色	
	189	D	1層	土師	壺	(19.0)	-	-	ハケ	ケズリ、ナデ	abc	やや不良	淡褐色	淡褐色	
	190	D	一括	土師	壺	(23.8)	-	-	ハケ、指頭圧痕、ナデ	ナデ、ケズリ	abc	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
	191	D	一括	土師	壺	(21.6)	-	-	ハケ後ナデ	ケズリ	ab	良好	赤褐色	赤褐色	
	192	D	一括	土師	壺	-	-	-	ハケ	ケズリ、ハケ	abc	良	暗赤褐色	赤褐色	
	193	D	一括	土師	壺	-	-	-	ハケ	ケズリ、ハケ	abc	良	暗黄褐色	暗赤褐色	
	194	D	1層	土師	壺	-	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	abc	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
	195	D	3.4層	土師	壺	-	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	abc	良	淡暗黄褐色	淡暗赤褐色	
	196	D	3.4層	土師	壺	-	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	abc	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	197	D	1層	土師	壺	-	-	-	ハケ	ケズリ、ハケ	abc	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	198	D	2層	土師	壺	-	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	abc	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	199	D	2層	土師	壺	-	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	abc	良	黄褐色	黄褐色	
	200	D	一括	土師	壺	-	-	-	ハケ?	ケズリ、ハケ、ナデ	ab	良	明赤褐色	明赤褐色	
	201	D	一括	土師	壺	-	-	-	ハケ?	ケズリ、ハケ、ナデ	abc	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
	202	D	2層	土師	壺	-	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	abd	良	赤褐色	赤褐色	
	203	D	2層	土師	壺	-	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	bc	良	淡暗黄褐色	淡暗黄褐色	
	204	D	1層	土師	壺	-	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	abc	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	205	D	一括	土師	壺	-	-	-	ナデ?	ケズリ	ab	良	明赤褐色	暗褐色	
	206	D	3.4層	土師	壺	-	-	-	ナデ	ケズリ、ナデ	abc	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	207	D	2層	土師	壺	-	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	bc	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
	208	D	2層	土師	壺	-	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	abc	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
	209	D	一括	土師	壺	(14.4)	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	abd	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	210	D	一括	土師	壺	(18.0)	-	-	ハケ	ケズリ	abc	良	淡茶褐色	淡茶褐色	
	211	D	1層	土師	壺	(18.4)	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	abd	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	212	D	2層	土師	壺	(19.4)	-	-	ナデ	ナデ	bd	良	淡暗赤褐色	淡暗赤褐色	
	213	D	一括	土師	壺	-	-	-	指頭圧痕、ナデ	指頭圧痕、ナデ	b	やや不良	明黄褐色	明黄褐色	
	214	D	2層	土師	壺	-	-	-	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	abc	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	215	D	3.4層	土師	壺	-	-	-	指頭圧痕、ナデ	ケズリ、ナデ	bd	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	216	D	一括	土師	壺	-	-	-	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	abd	やや不良	淡赤褐色	淡赤褐色	
217	D	2層	土師	壺	-	-	-	ナデ	ナデ	bd	やや不良	淡赤褐色	淡赤褐色		
218	D	一括	土師	壺	-	-	-	不明	不明	ab	やや不良	明黄褐色	明黄褐色		
219	D	一括	土師	甌	-	-	-	ハケ?	ハケ?	abc	良好	暗赤褐色	暗赤褐色		
220	D	1層	土師	把手	-	-	-	ケズリ	ケズリ	d	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色		
221	D	一括	土師	把手	-	-	-	ケズリ	ケズリ	abc	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色		
222	D	一括	土師	把手	-	-	-	ケズリ	ナデ	bd	良	淡黄褐色	淡黄褐色		
223	D	一括	土師	鉢?	-	-	-	指頭圧痕	ナデ	ab	良	淡赤褐色	淡赤褐色		
224	D	一括	土師	鉢?	-	-	-	指頭圧痕	ナデ	ab	良	淡黄褐色	淡黄褐色		
225	D	一括	土師	鉢?	-	-	-	指頭圧痕、ナデ	ナデ	ah	良	淡褐色	淡褐色		
226	D	2層	土師	壺	-	-	-	ナデ	ナデ	and	良	淡赤褐色	淡赤褐色		
227	D	一括	土師	壺	-	-	-	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	abd	良	淡黄褐色	淡黄褐色		
228	D	一括	須	釜	-	-	-	指目痕	格子目タタキ	ab	不良	淡黄褐色	淡黄褐色		
229	D	一括	瓦	平瓦	-	-	-	布目痕	格子目タタキ	abc	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色		
第54図	230	D	一括	瓦	平瓦	14.8	-	2.9	回転ナデ、底面ハケ切	回転ナデ	h	不良	灰白色	灰白色	「田」黒書土器
231	D	1層	土師	坏	-	(9.4)	-	回転ナデ、底面ハケ切	回転ナデ	ab	良	淡黄褐色	淡黄褐色	黒書土器?	
第55図	1	E	1溝	須	釜	-	-	-	回転ナデ	ナデ	b	良	淡青灰色	淡青灰色	
	2	E	3溝	縄文	深鉢	-	-	-	ナデ	ナデ	abc	良	淡黄褐色	淡灰褐色	突帯有
	3	E	3溝	弥生	鉢	-	-	-	ハケ	ハケ	b	良	淡灰色	淡灰色	
	4	E	3溝	縄文	深鉢	-	-	-	ナデ	ナデ	abc	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
	5	E	1土坑	弥生	高杯	-	-	-	ナデ	ナデ	abc	良	淡灰褐色	淡灰褐色	
	6	E	ピット1	縄文	深鉢	-	-	-	ナデ	ナデ	ab	良	淡白褐色	淡白褐色	
	7	E	ピット2	弥生	壺	-	-	-	ナデ	ナデ	abc	良	淡黄褐色	淡黄褐色	



①大波羅遺跡全景-市内を望む（空撮）



②大波羅遺跡全景-佐寺原台地を望む（空撮）



①B区全景（南から）



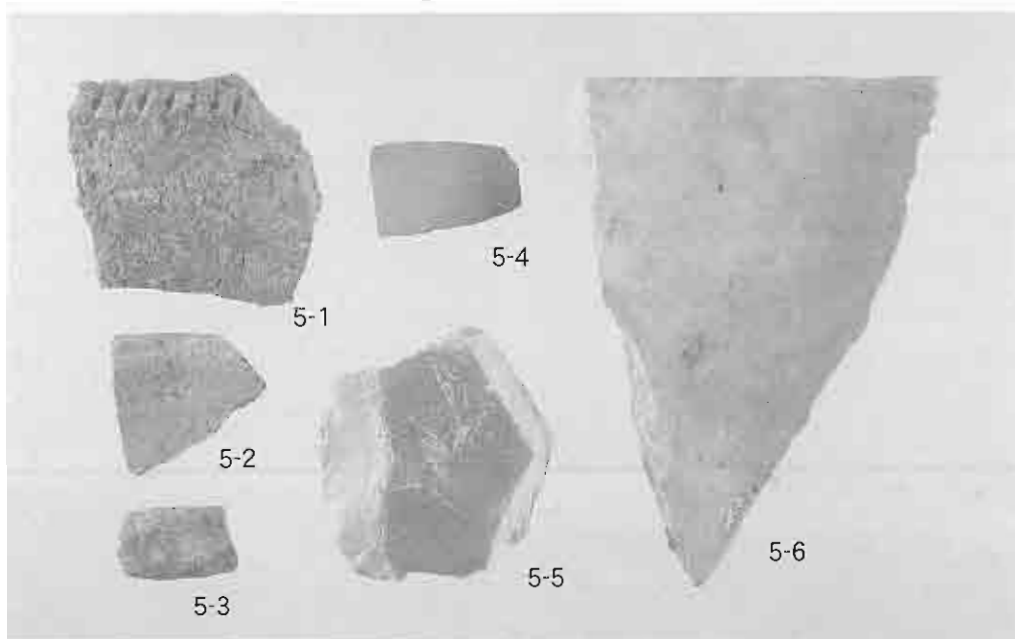
②C・D・E区全景（真上から）



①A区全景（南西から）



②トレンチ土層



②A区出土遺物



①B区全景 (真上から)



②古墳時代の溝 (真上から)



① 14・17・24・25号溝土層断面



② 25号溝土層断面



③ 25号溝遺物出土状況



④ 35号ピット遺物出土状況



⑤ 36号ピット遺物出土状況



⑥ 37号ピット遺物出土状況



①古代の溝（真上から）



②1号掘立柱建物（真上から）



①ピット1土層断面



②ピット2土層断面



③ピット3土層断面



④ピット4土層断面



⑤ピット6土層断面



⑥ピット7土層断面



⑦ピット7断割り断面



⑧ピット8土層断面



① 1号掘立柱建物に人を配置（北東から）



② 2号掘立柱建物（西から）



③ 2号溝土層断面



④ 3号溝土層断面



⑤ 1号竪穴状遺構(南西から)



⑥ 1号土坑（西から）



⑦ 1号土坑土層断面



⑧ 5号土坑(南西から)



① 6・7号土坑(南から)



② 8号土坑(西から)



③ 10号土坑(西から)



④ 14号土坑(南西から)



⑤ 4号溝土層断面1



⑥ 4号溝土層断面2



⑦ 4号溝墨書土器出土状況



⑧ 4号溝土器出土状況



① 5号溝土層断面



② 6号溝土層断面



② 7号溝土層断面 1



④ 7号溝土層断面 2



⑤ 7号溝繩文土器出土狀況



⑥ 9号溝土層断面



⑦ 10・13号溝土層断面



⑧ 13号溝土器出土狀況



① 11号溝土層断面



② 30号溝土層断面



③ トレンチ土層断面



④ トレンチ土層断面 1



⑤ トレンチ土層断面 2



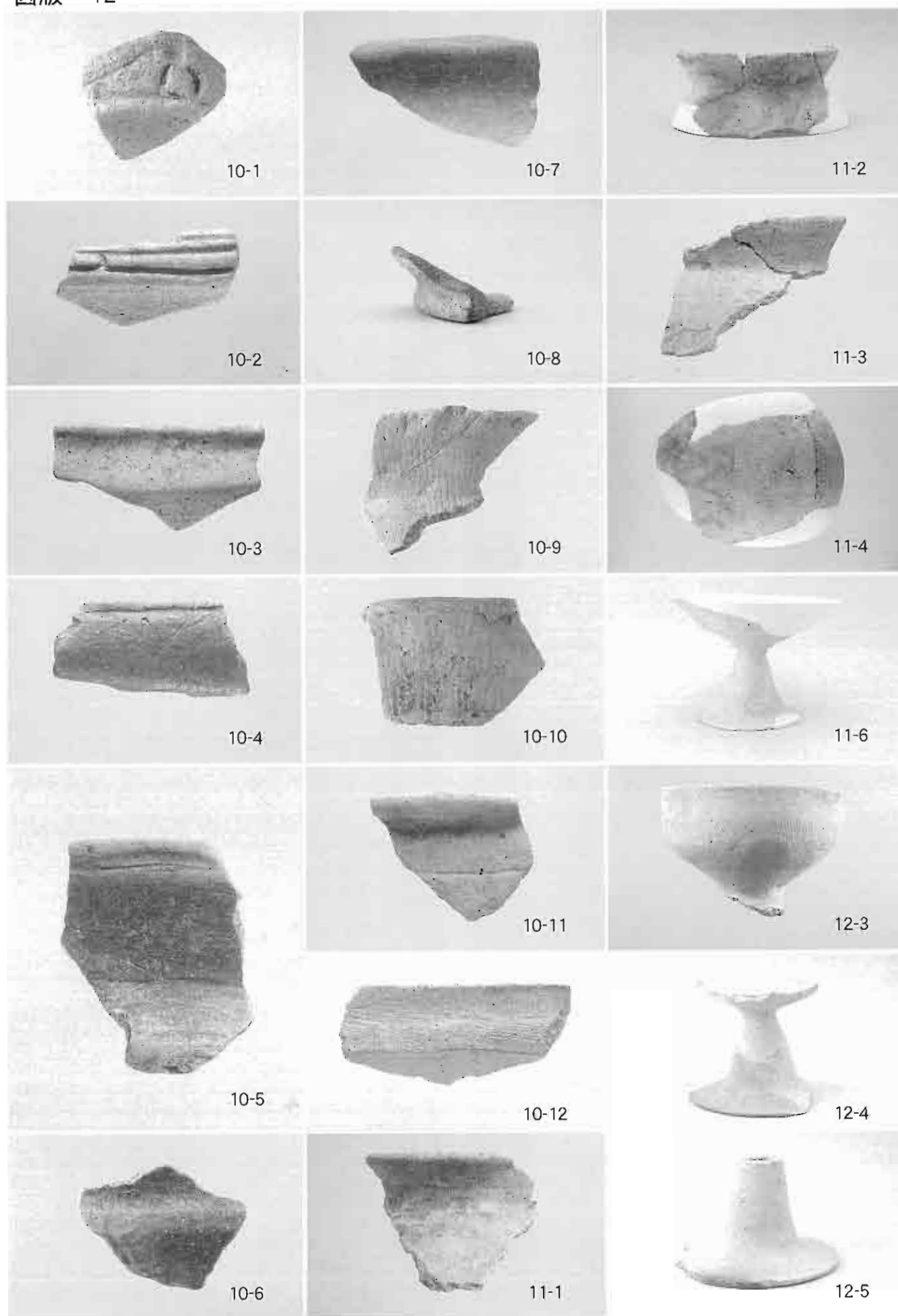
⑥ トレンチ土層断面 3



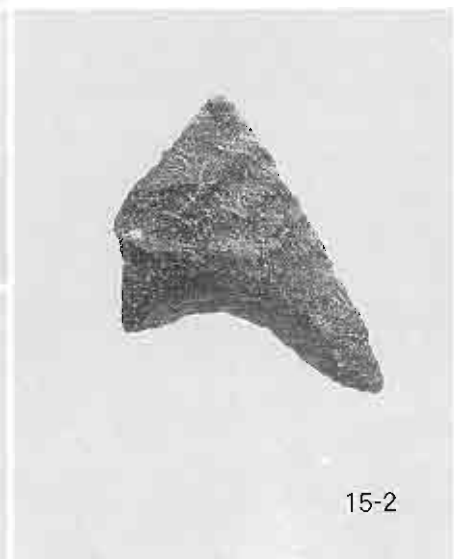
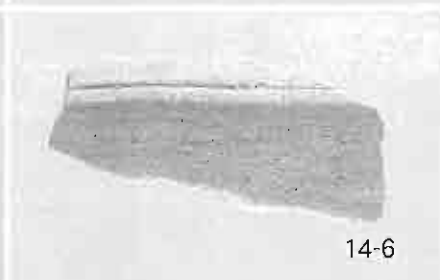
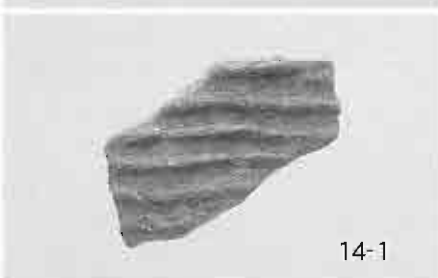
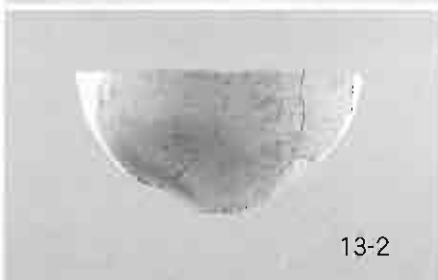
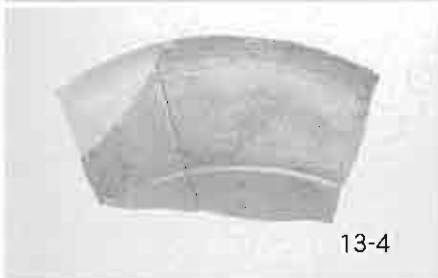
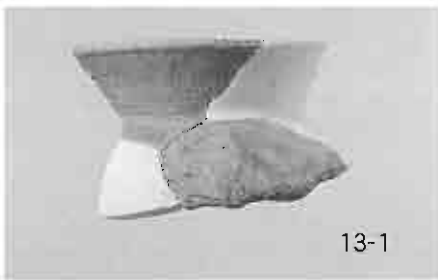
⑦ トレンチ土層断面 4



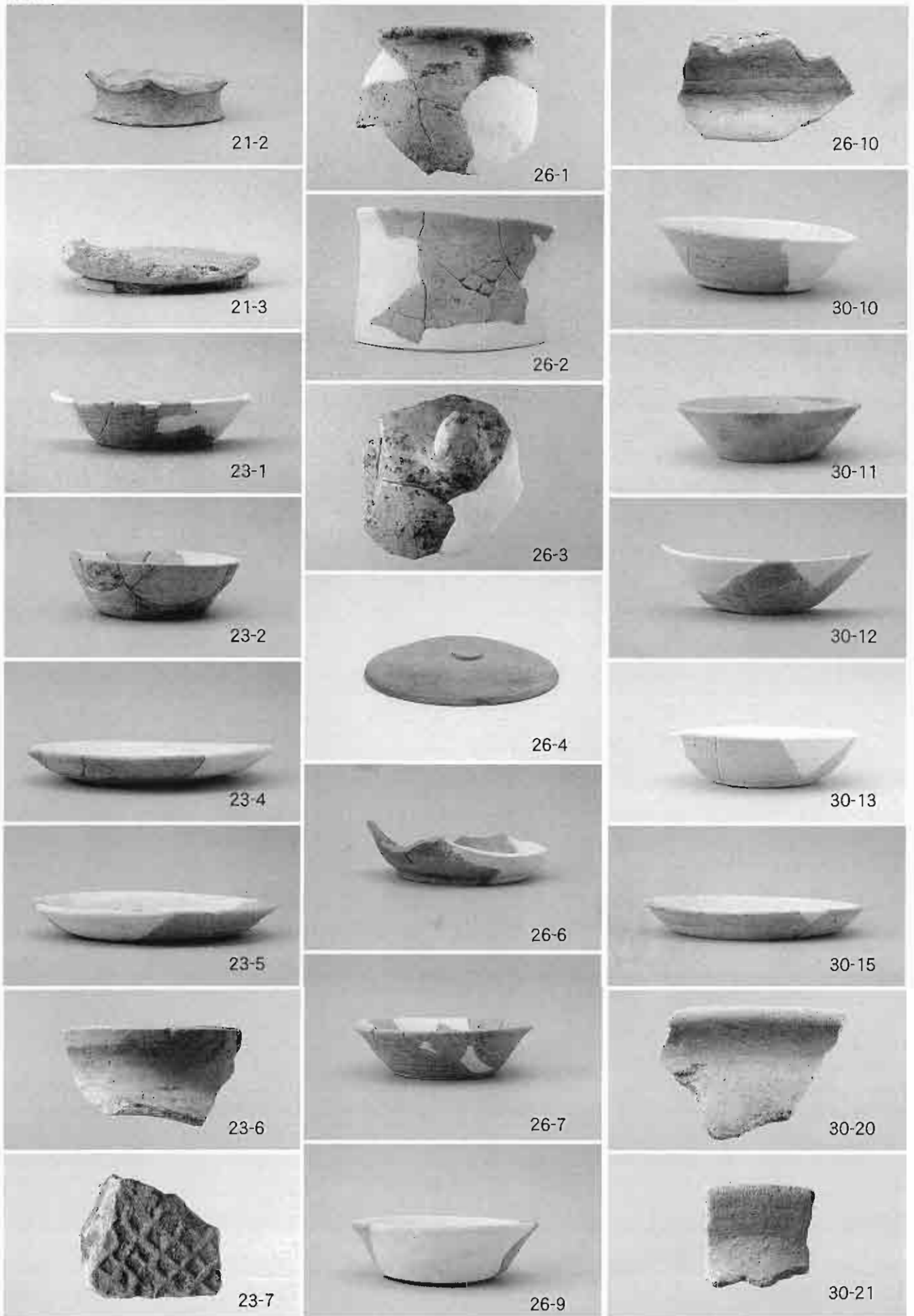
⑧ 21号溝土層断面



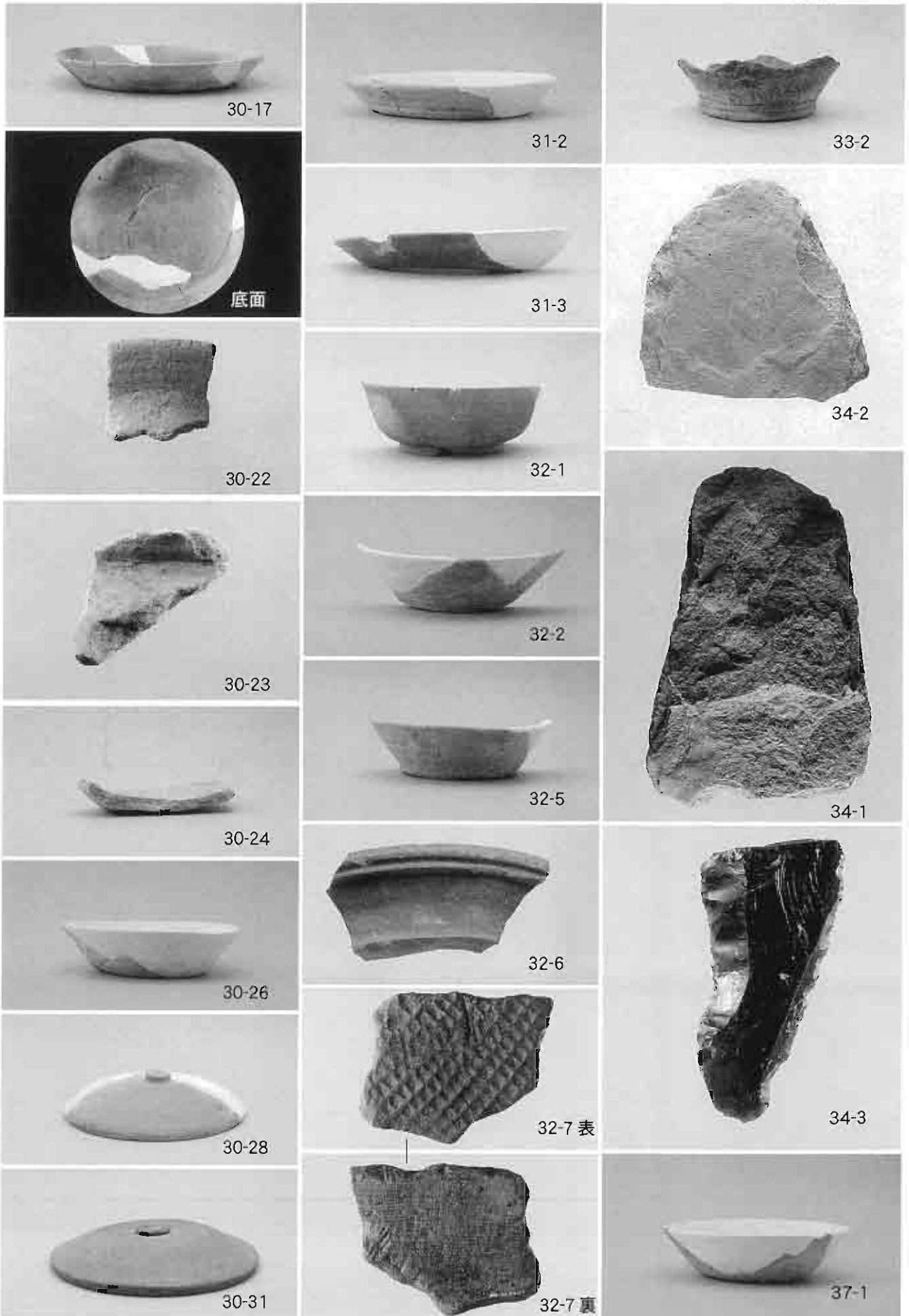
※番号はすべて挿図と対応



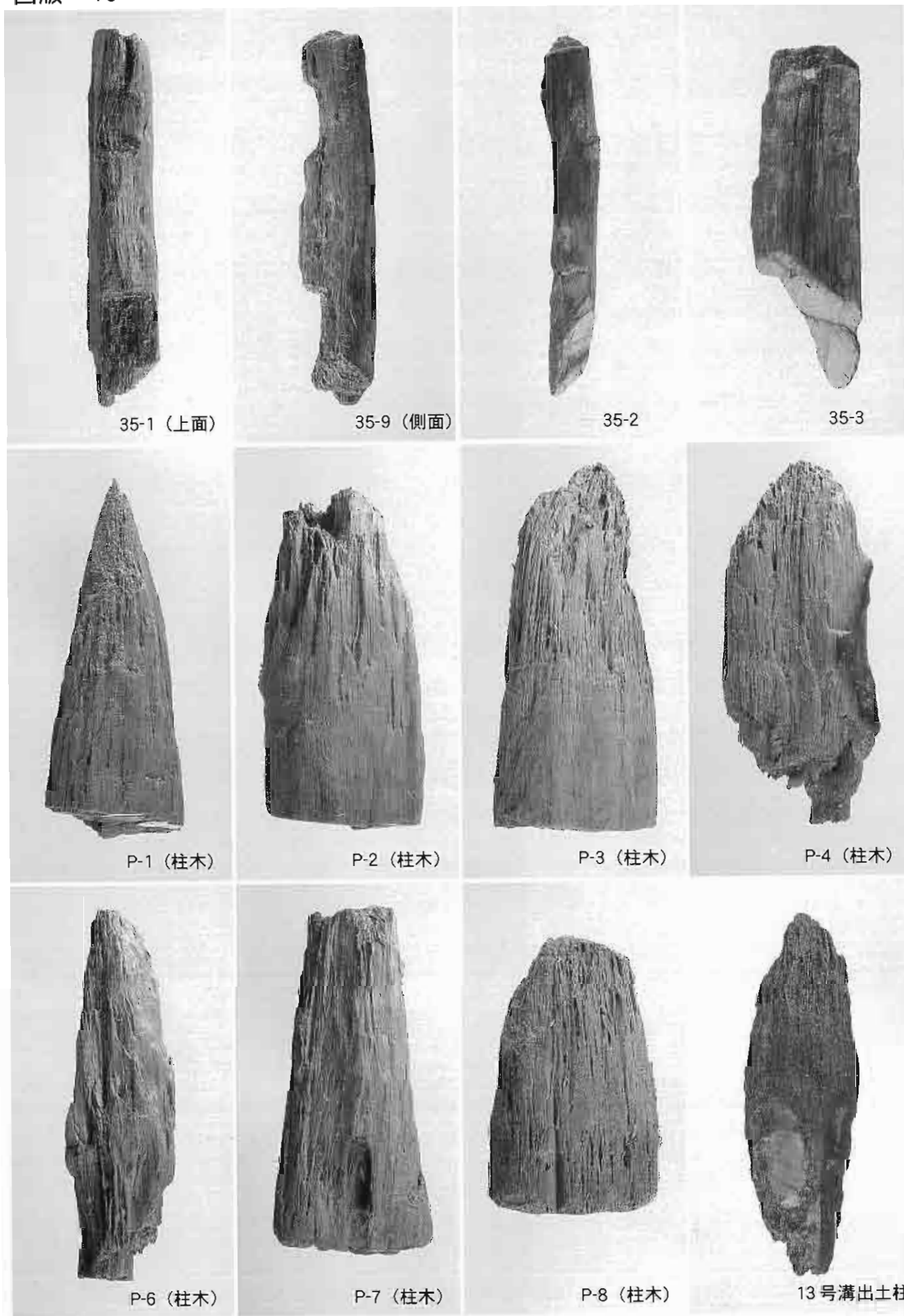
※番号はすべて挿図と対応



※番号はすべて挿図と対応



※番号はすべて挿図と対応





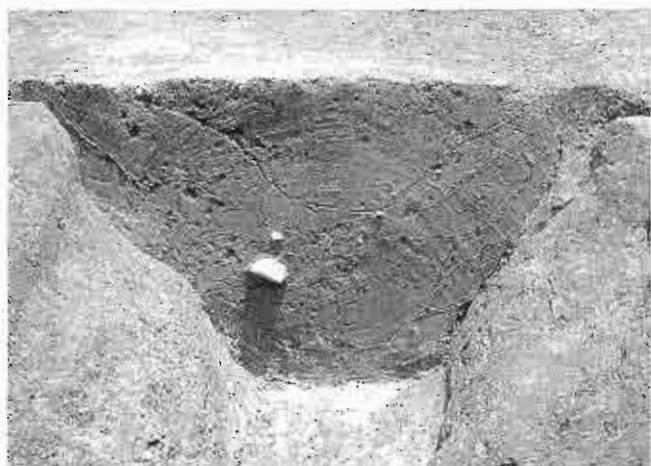
① C区全景（真上から）



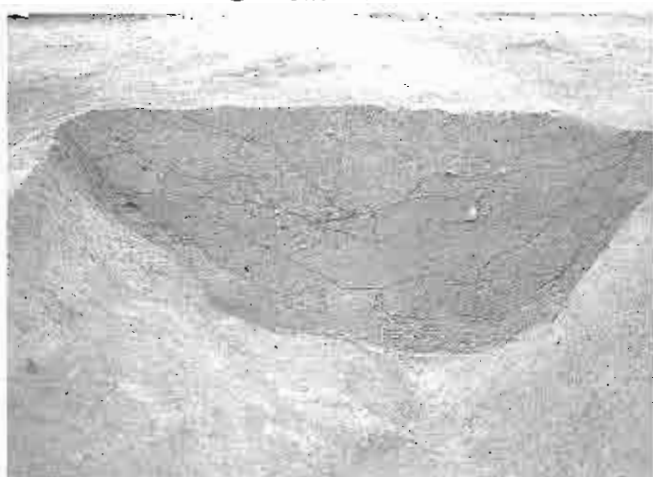
② C区完掘（南から）



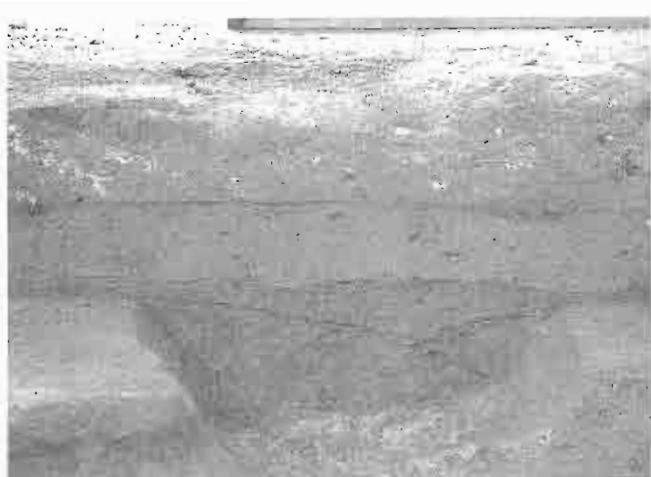
① 1号溝 (北から)



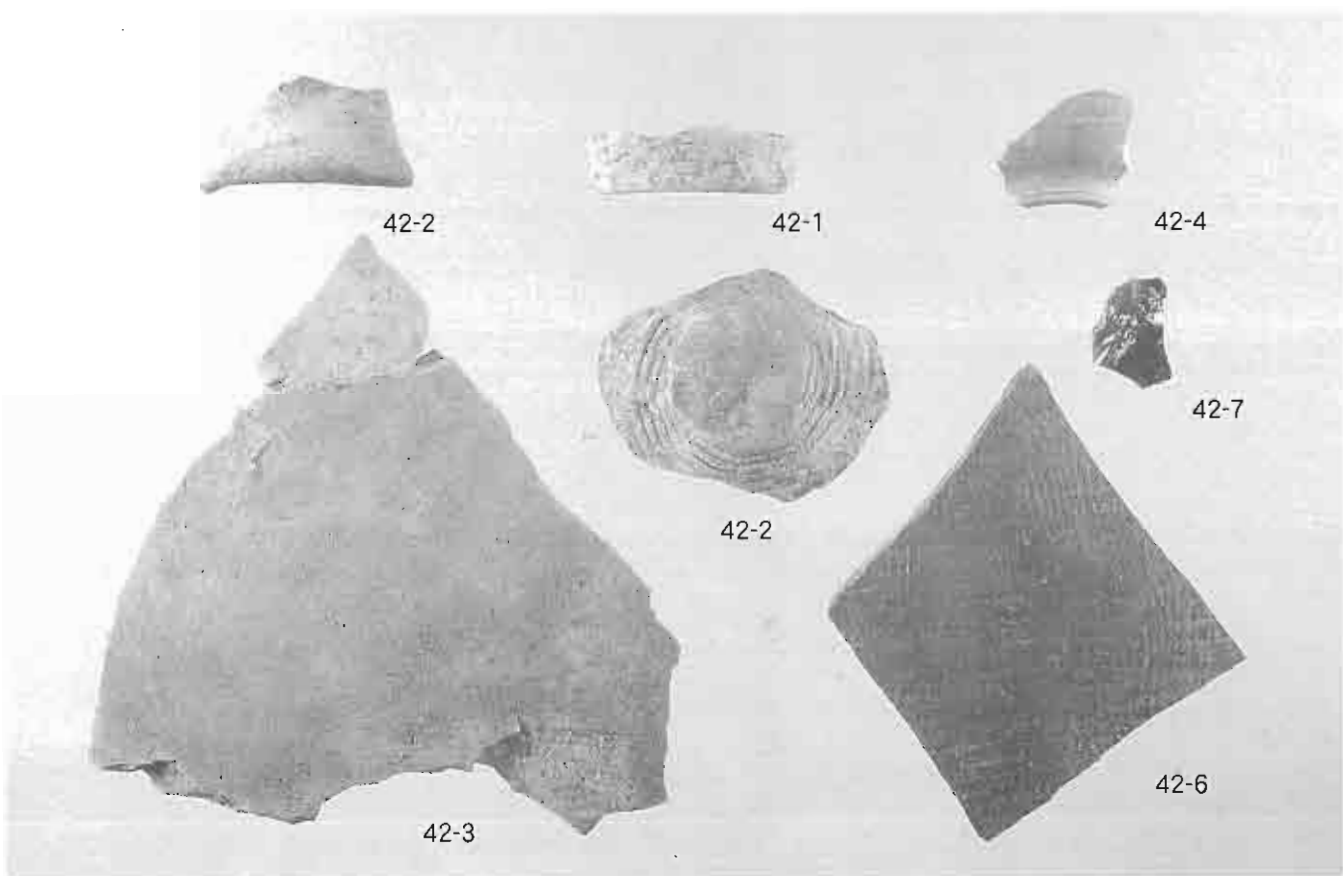
② 1号溝土層断面 1



③ 1号溝土層断面 2



④ 3号溝土層断面



⑤ C区出土遺物



①D区全景（真上から）



②D区完掘状況（北から）



③遺物包含層土層断面 1



④遺物包含層土層断面 2



⑤遺物包含層土層断面 3



①包含層遺物出土狀況 1



②包含層遺物出土狀況 2



③包含層遺物出土狀況 3



④包含層遺物出土狀況 4



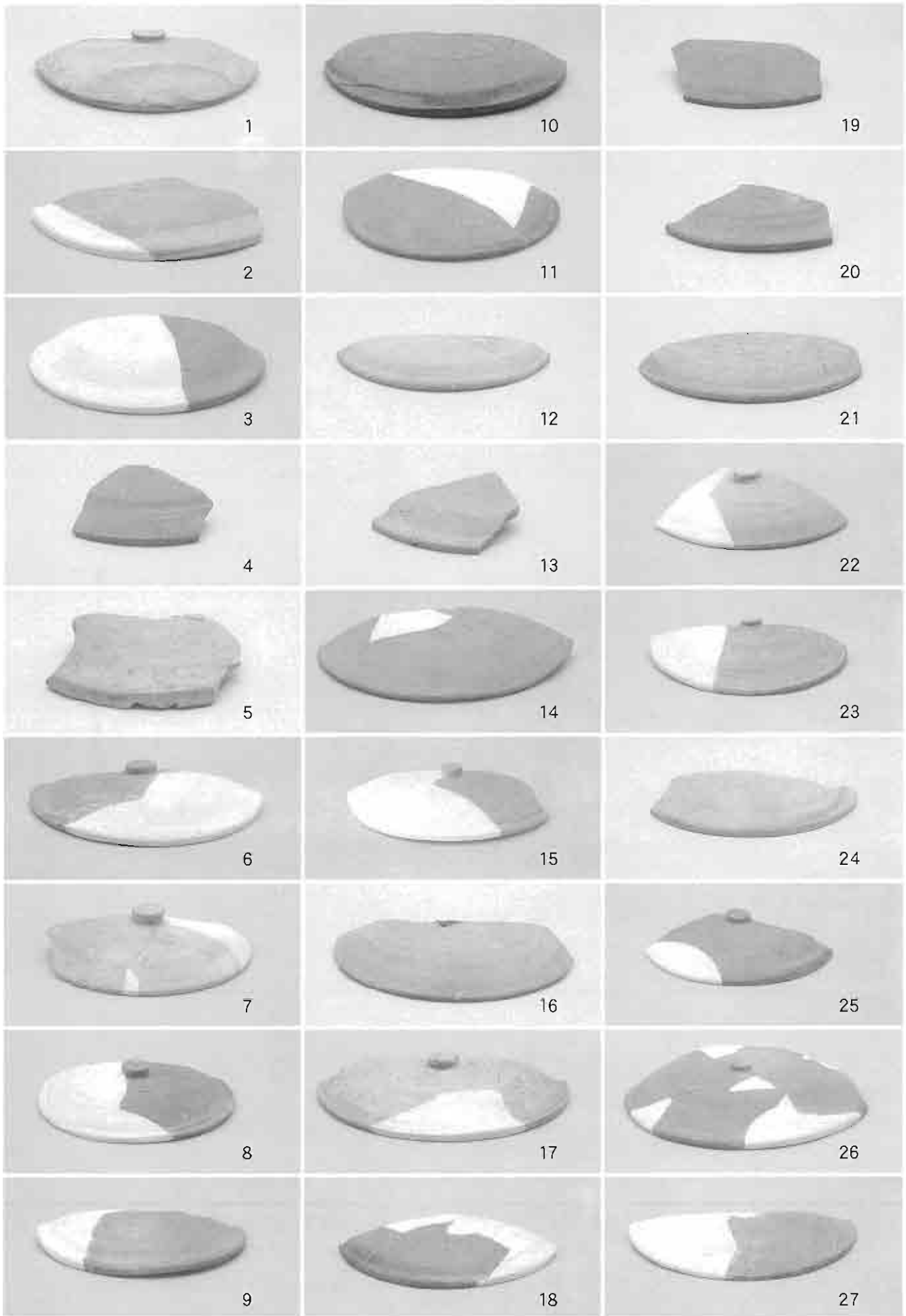
⑤包含層土層断面 1

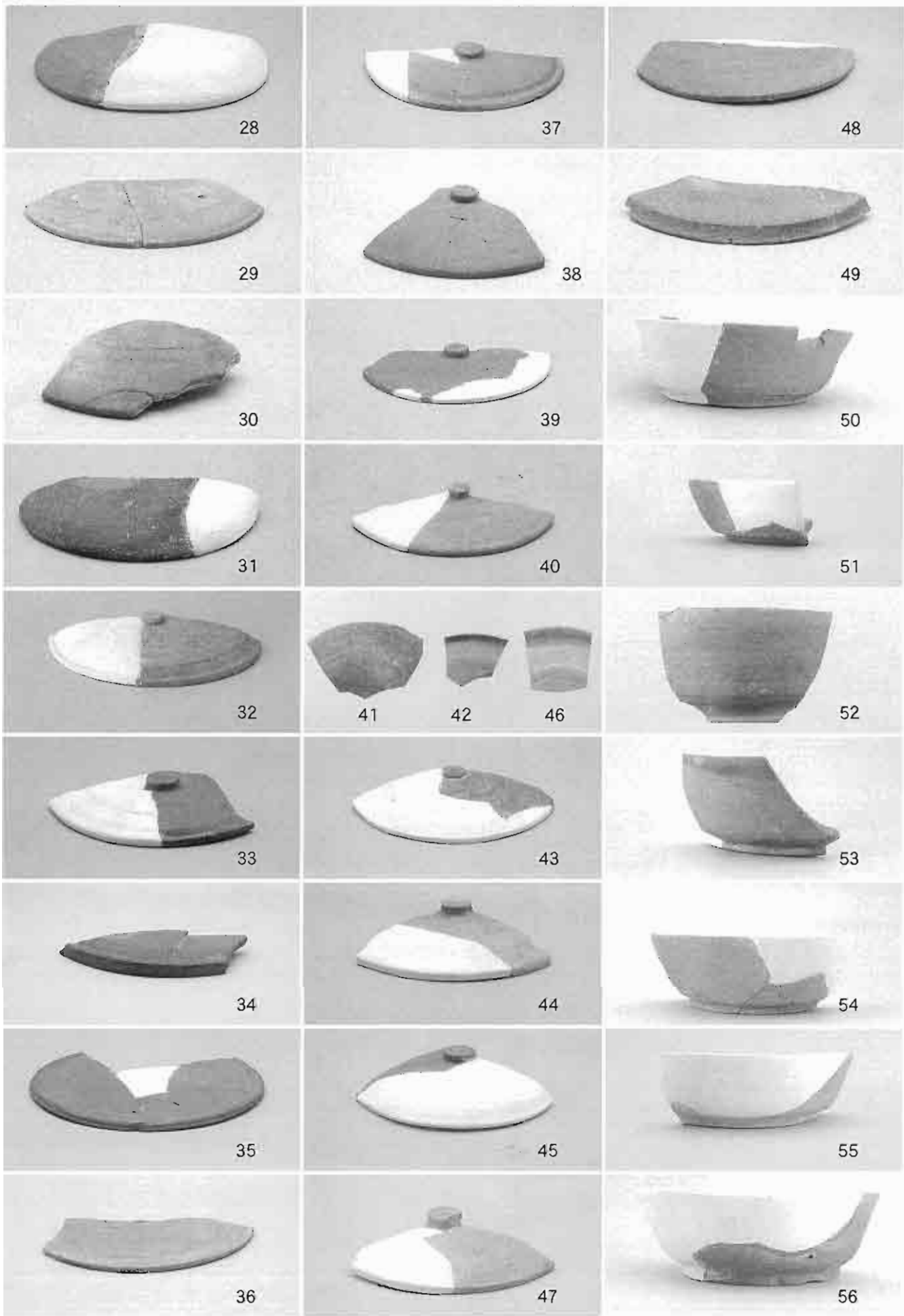


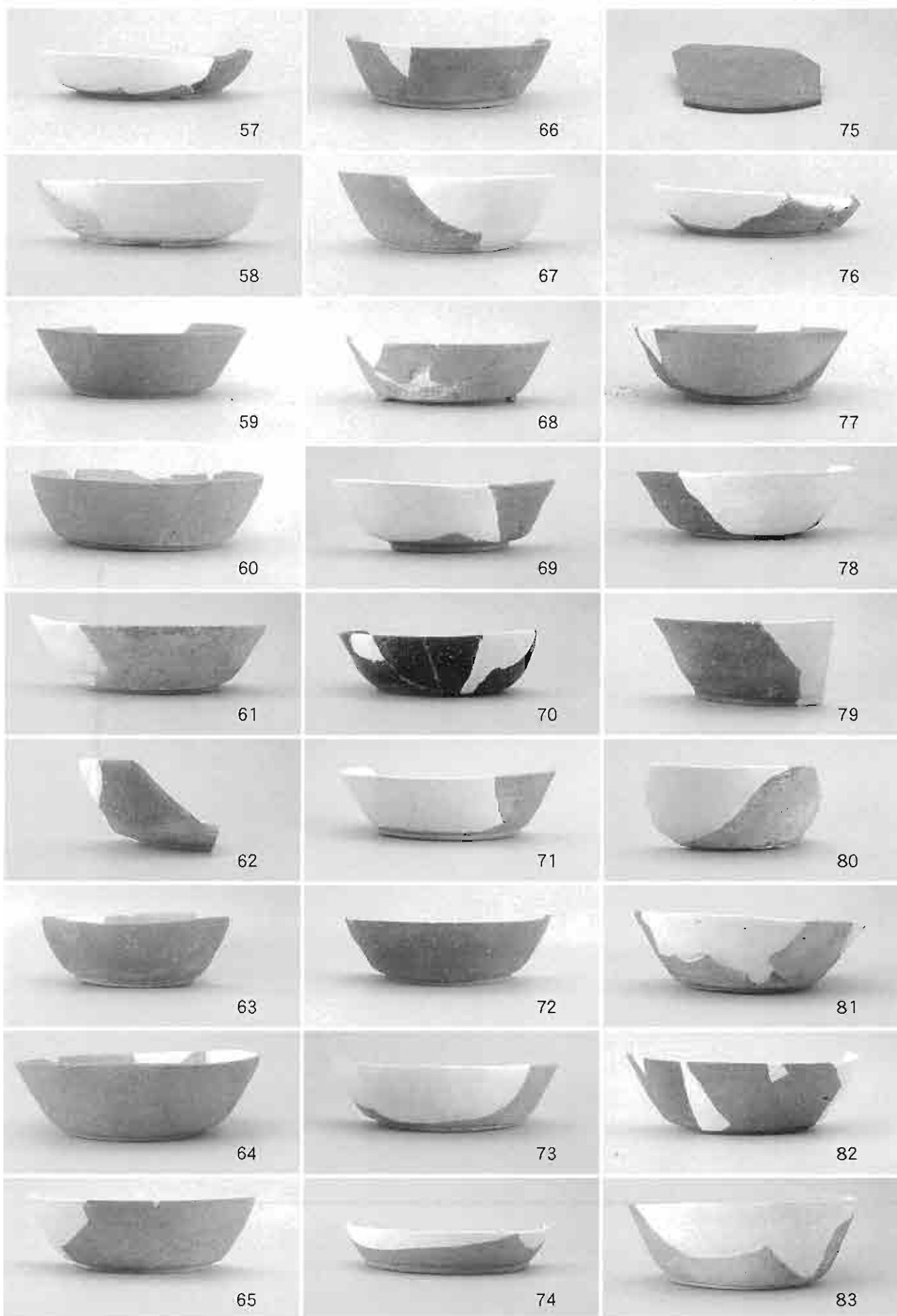
⑥包含層土層断面 2

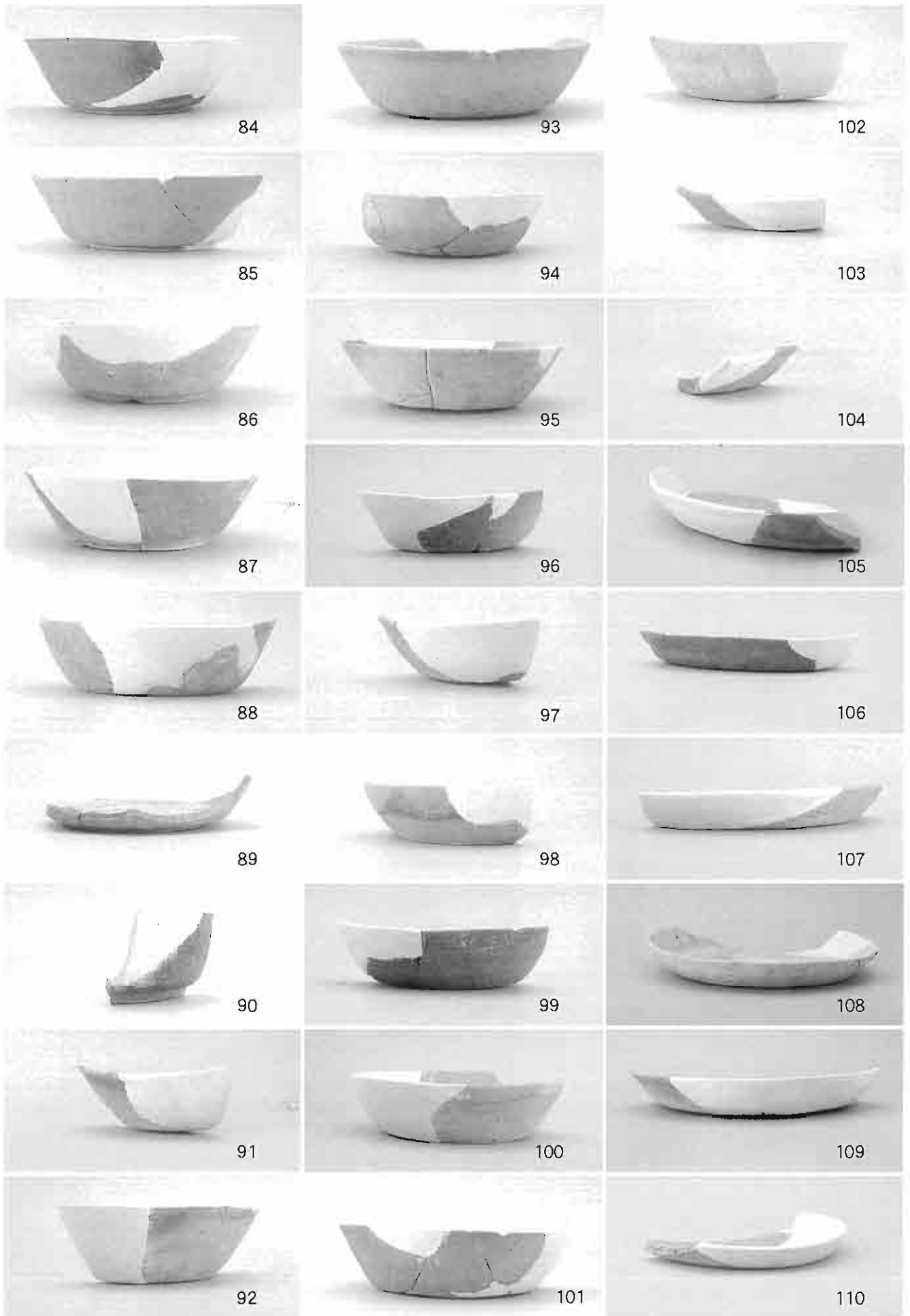


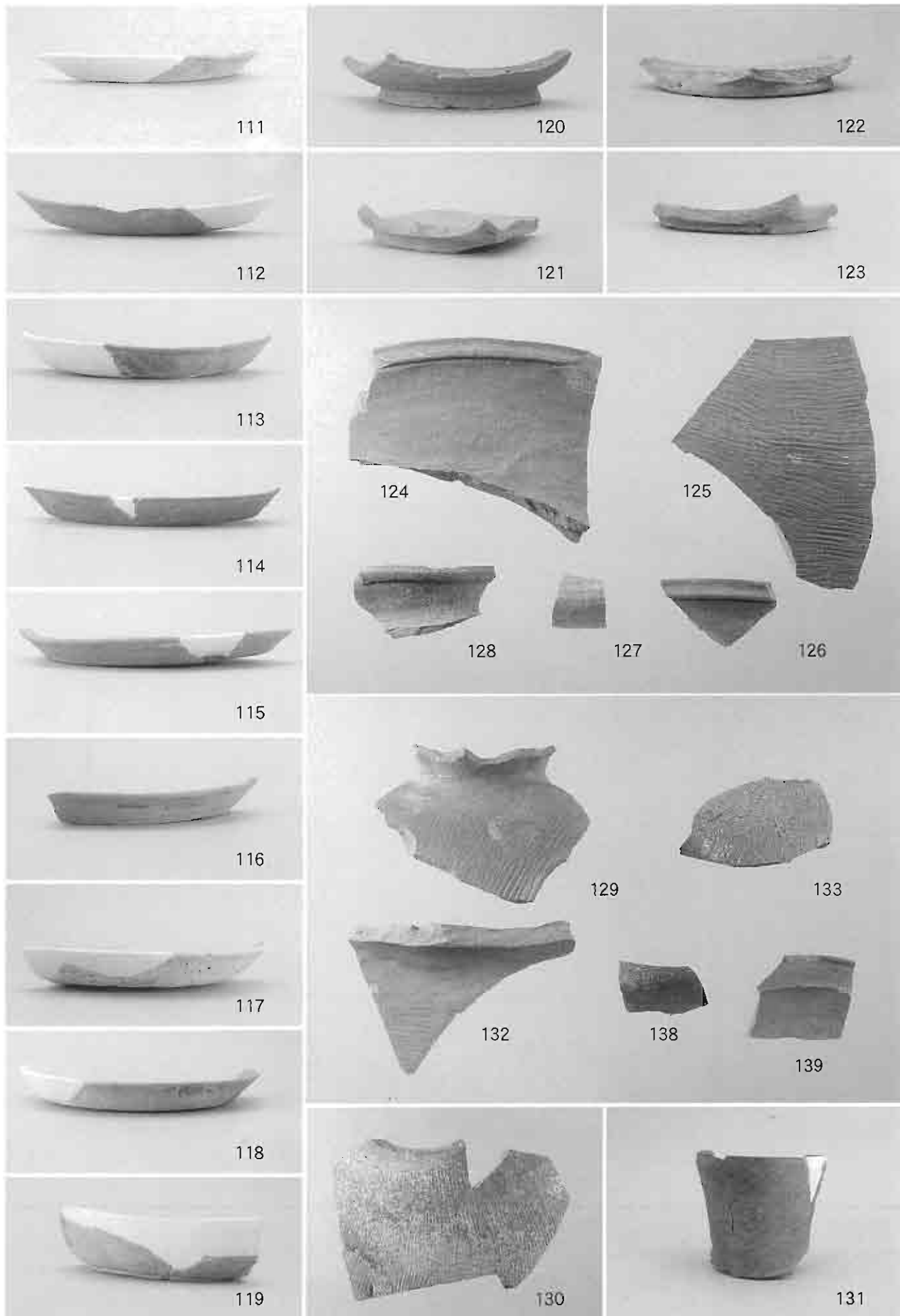
⑦包含層土層断面 3

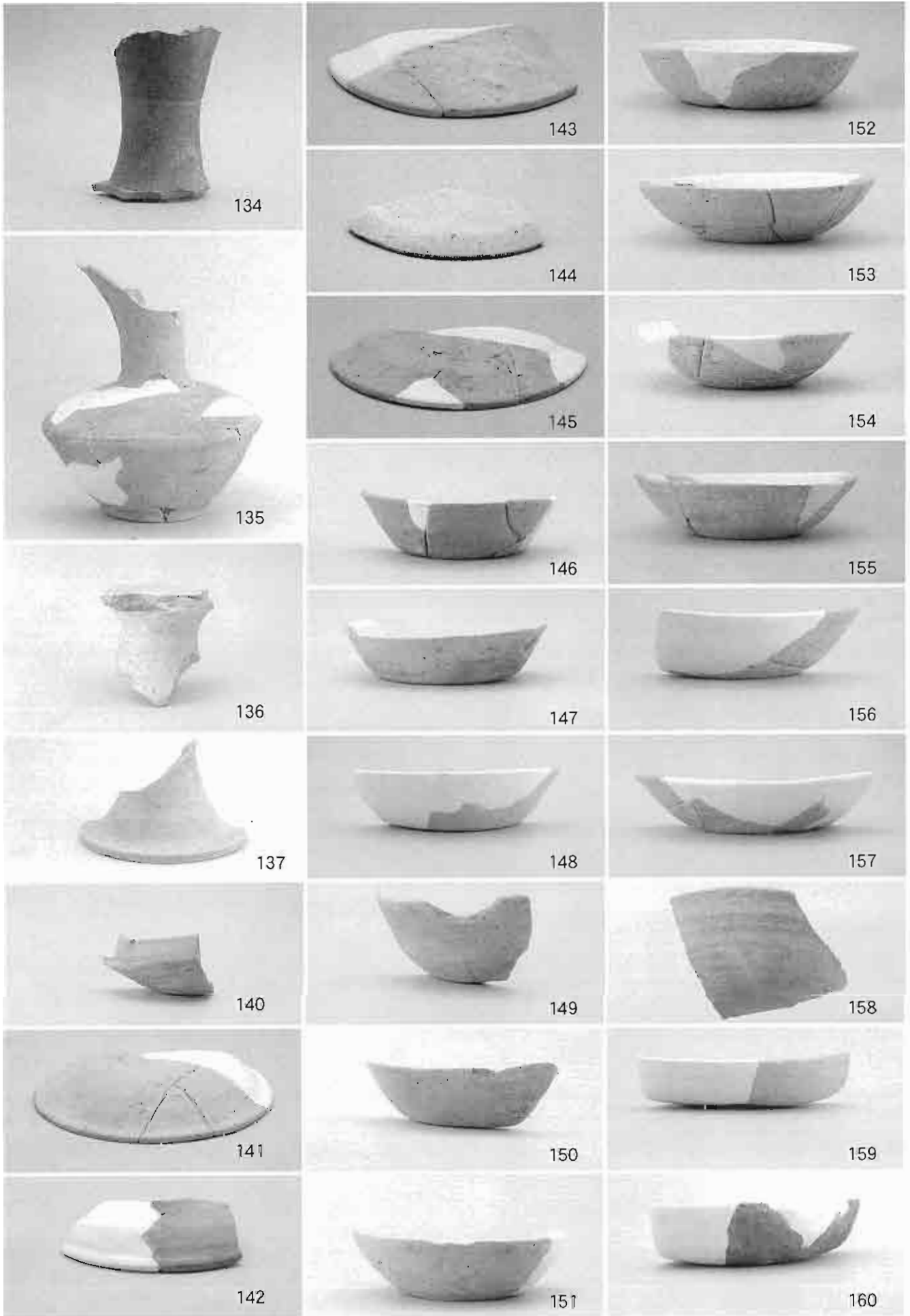


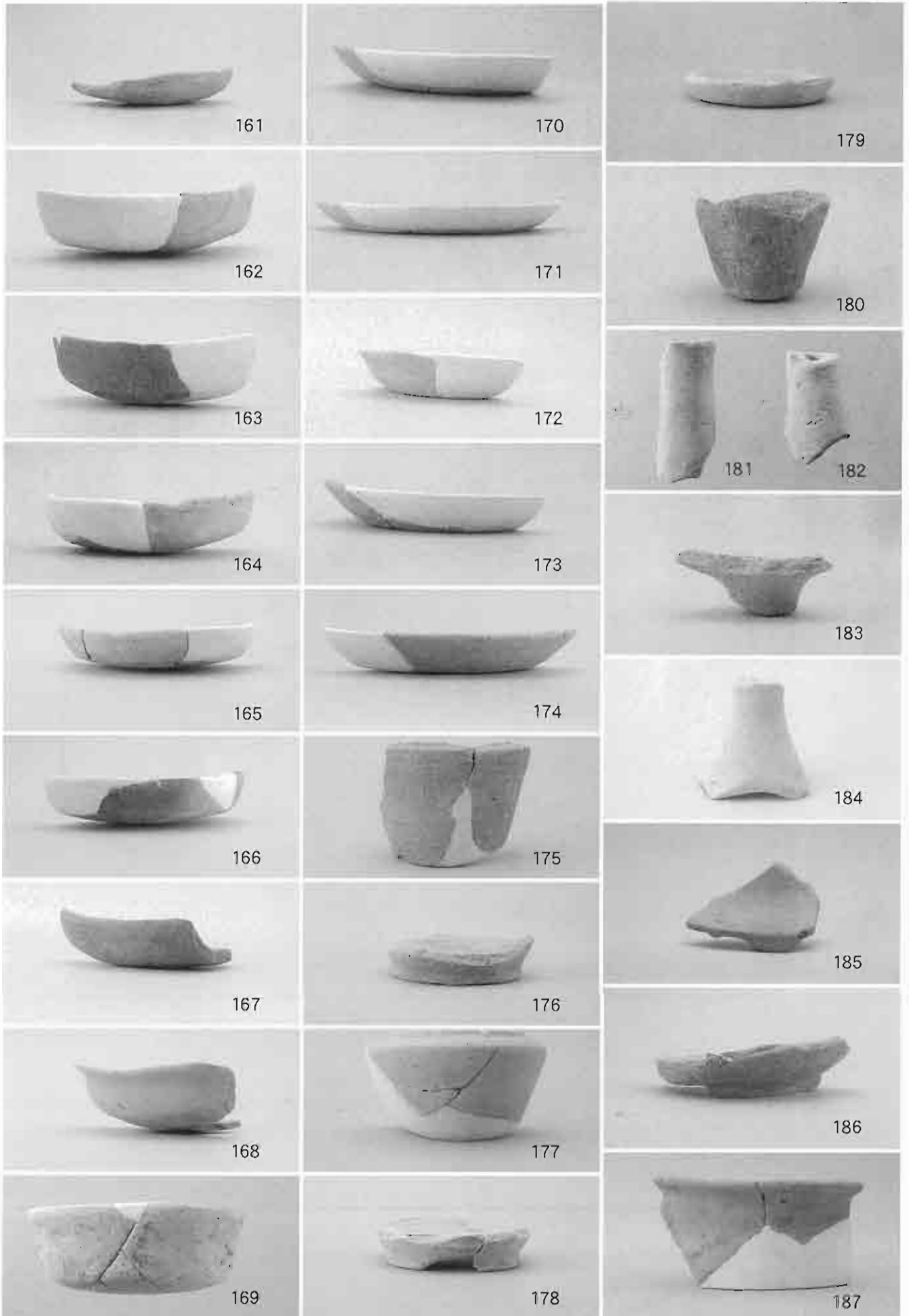


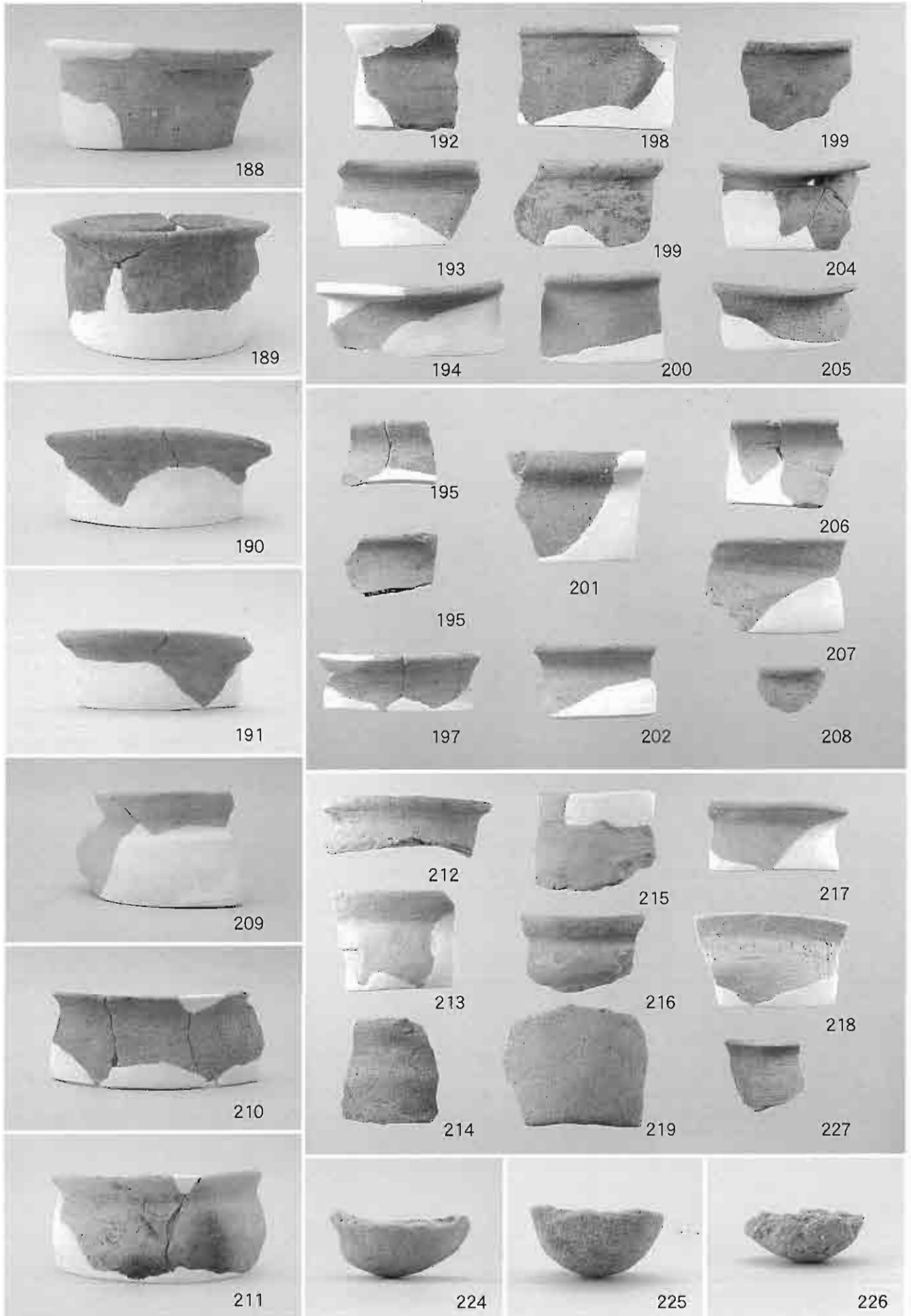


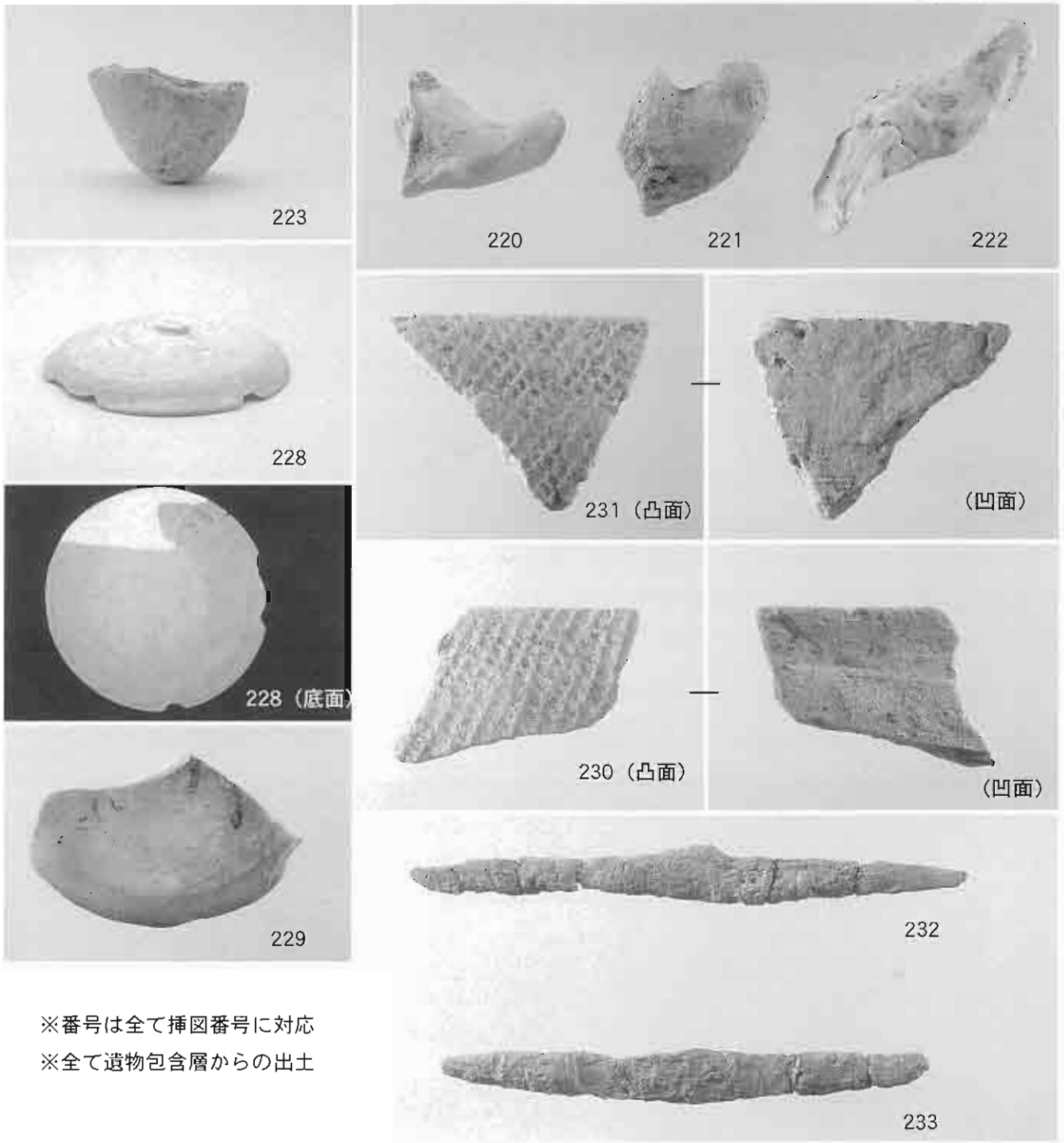












※番号は全て挿図番号に対応
※全て遺物包含層からの出土



①E区北側全景（真上から）



②E区南側全景（真上から）



① 1号溝完掘北側 (南から)



② 1号溝土層断面 1



③ 1号溝完掘南側 (南から)



④ 1号溝土層断面 2



⑤ 2号溝完掘 1 (南東から)



⑥ 2号溝完掘 2 (南東から)



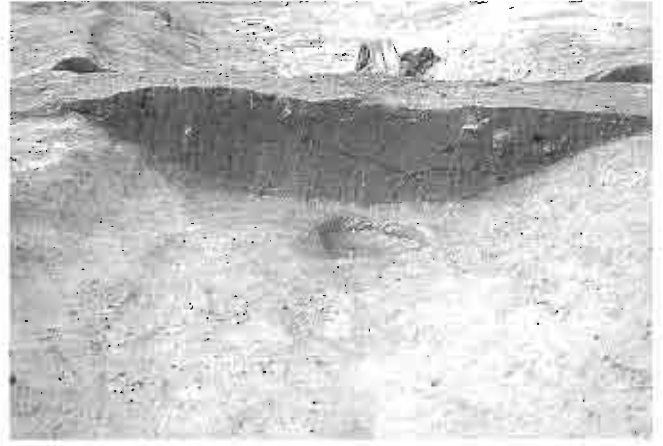
⑦ 2号溝土層断面



⑧ 2号溝杭出土状況



① 3号溝完掘（北西から）



② 3号溝土層断面 1



③ 3号溝土層断面 2



④ 3号溝土層断面 3



⑤ 3号溝遺物出土状況 1（西から）



⑥ 3号溝遺物出土状況 2（西から）



⑦ 3号溝遺物出土状況 3（西から）



⑧ 3号溝遺物出土状況 4（西から）



① 3号溝杭出土状況 1



② 3号溝杭完掘状況 2



③ 3・4号溝杭出土状況



④ 4号溝完掘 (南東から)



⑤ 4号溝土層断面



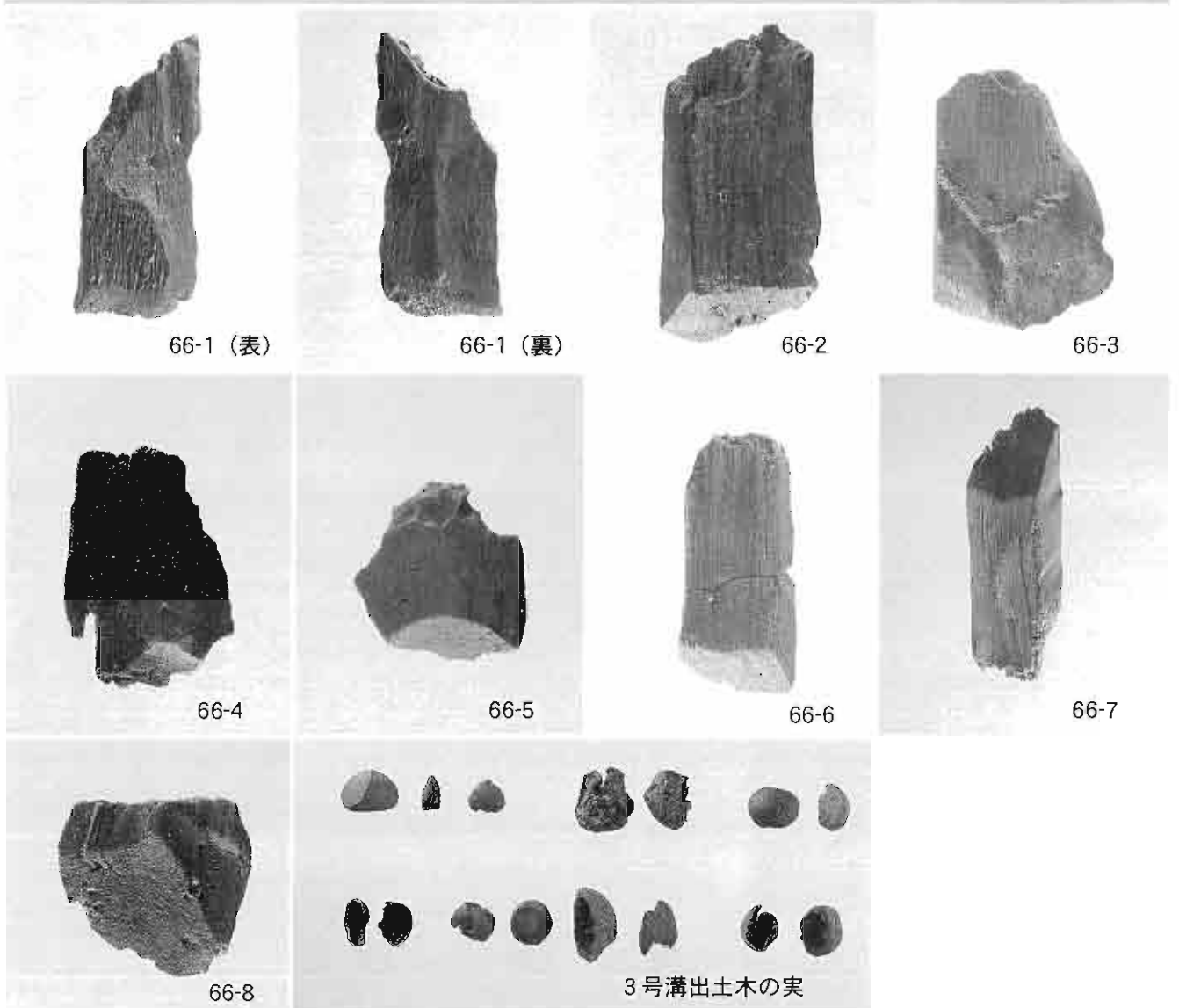
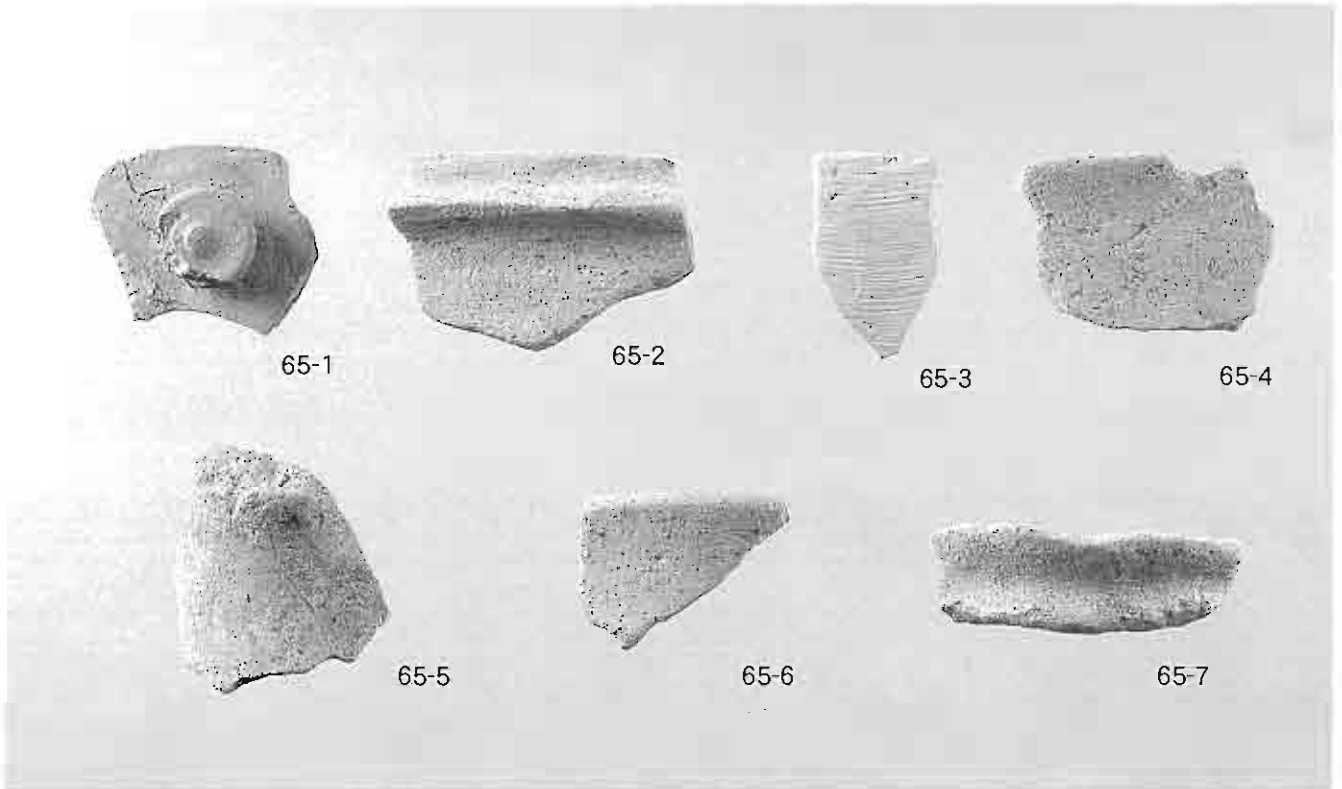
⑥ 5号溝完掘 (南東から)

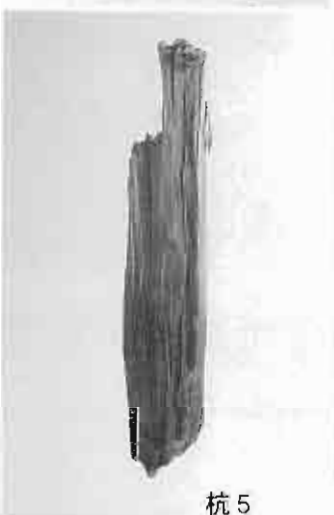
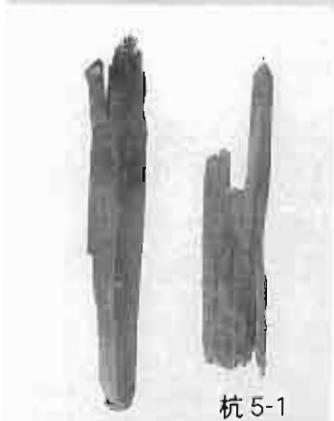
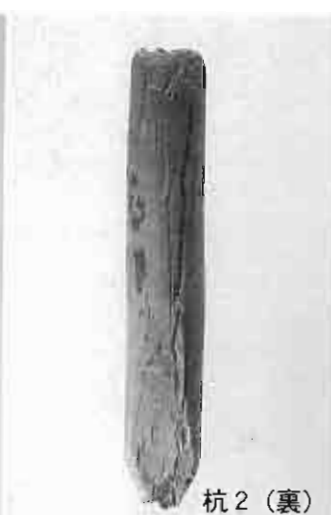
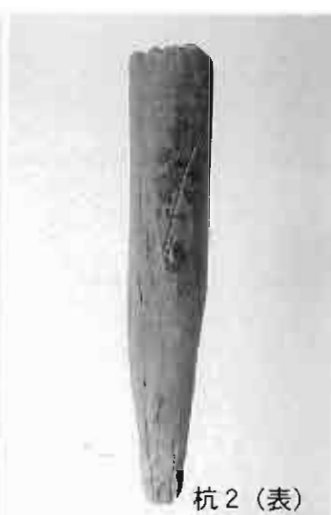


⑦ 5号溝土層断面



⑧ 1号土坑完掘 (西から)





報告書抄録

ふりがな	おおほらいせき
書名	大波羅遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第29集
編著者名	渡邊隆行、五十川雅也、吉田博嗣、土居和幸
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおほらいせき 大波羅遺跡	A区	おおいた ひと 大分県日田市 おおあだしまあざおおほら 大字田島字大原	44204-6			19990602～19990609 19991208～20000331 20000417～20000808	200	道路建設
	B区						1800	
	C区						180	
	D区						350	
	E区						440	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
おおほらいせき 大波羅遺跡	A区		溝3条	縄文土器、須恵器、青磁、瓦	
	B区	弥生時代	掘立柱建物2棟 溝17条 鑿穴状遺構1基 土坑9基	縄文土器、弥生土器、須恵器、青磁、瓦、木器、石器	墨書土器
	C区	古代	溝1条 土坑1基	石器、弥生土器、須恵器、土師器、陶器	
	D区	古代	包舎層	須恵器、土師器、瓦、鉄器	墨書土器
	E区	弥生時代～古代	溝5条 土坑1基	縄文土器、弥生土器、須恵器、木器、石器	

大波羅遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書
第29集
平成13年3月31日

発行 日田市教育委員会
大分県日田市田島2丁目6-1

印刷 日田時報紙器印刷株式会社
大分県日田市二串町345-3

